三重県埋蔵文化財調査報告１８８

金剛坂遺跡（第４次）
辰ノ口古墳群（第２次）
発掘調査報告

１９９９・３

三重県埋蔵文化財センター

序

今回の調査地である金剛坂遺跡は、県下において著名な遺跡であるうえに、考古学上非常に重要です。

また、金剛坂遺跡が所在する明野原台地には、数多くの遺跡が存在しており、当遺跡と周辺遺跡との関連性についても考慮しなければなりません。それらを考えることは、三重県の発展の歴史を鑑みることになり、我々自身の未来に向けての指標になると考えられます。

しかし、今回の調査対象部分は、残念なことに現状保存することが非常に困難な箇所であるため、発掘調査を行うことになりました。しかしながら、発掘調査によって金剛坂遺跡の一部分ではあるものの遺跡の解明の手掛かりになることに加え、考古学における研究の進展に役立られることは、喜ばしいことであります。

こういった発掘調査の成果が、今後の三重県の発展の一助に値するものであります。

なお、協議から発掘調査にかけて多大のご理解と協力をいただいた県土整備部・松阪地方県民局及び地元各位に心から感謝致します。

１９９９年３月

三重県埋蔵文化財センター

所長　大　井　與　生

例　　言

1　本書は、三重県多気郡明和町金剛坂字辰ノ口に所在する金剛坂（こんごうさか）遺跡・辰ノ口（たつのくち）古墳群の発掘調査報告書である。

2　本調査は、三重県教育委員会が三重県県土整備部から執行委任を受けて、平成10年度に一般地方道多気停車場斉明線緊急地方道路整備工事に伴って実施したものである。

3　調査は次の体制により実施した。
　調査主体：三重県教育委員会
　調査担当：三重県埋蔵文化財センター（調査第一課）
　　技師　萩原　義彦（担当）
　　技師　大川　操
　　技術補助員　川崎　志乃
　調査面積：８００㎡
　調査期間：平成10年６月８日～８月６日

4　本報告書の作成業務は、三重県埋蔵文化財センター調査第一課及び資料普及グループが行った。遺構・遺物の写真は、萩原・川崎が撮影した。執筆・編集は、調査担当者があたり、目次及び文末に執筆者名を記し文責を明記した。

5　図版における方位は、国土調査法による第Ⅵ系座標を基準とし、方位は座標北を用いた。なお磁針方位は、西偏６°20′（昭和62年）、真北方位は、西偏０°18′である。

6　本書で記載した遺構・遺物に関する色調は、農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帳』（1988年度版）に準拠している。

7　挿図と写真図版の遺物番号は、実測図の番号と対応している。写真図版は、特に断らない限り縮尺不同である。

8　当発掘調査による図面・写真等の記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターにおいて保管している。

9　本書で用いた遺構表示記号は、下記のとおりである。
　ＳＤ：溝・周濠　　ＳＫ：土坑　　ＳＸ：古墳　　Ｐｉｔ：柱穴

10　調査にあたっては、三重県県土整備部道路整備課、松阪地方県民局、松阪教育事務所ならびに地元各位の協力を得た。

11　スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前言 ……（萩原義彦）…… 1
1　調査契機 …… 1
2　調査方法 …… 1
3　調査経過 …… 1
4　調査日誌 …… 1
5　文化財保護法等による諸通知 …… 2
Ⅱ　位置と環境 ……（萩原義彦）…… 3
1　位置 …… 3
2　環境 …… 3
Ⅲ　遺構 ……（萩原義彦）…… 7
1　調査区の地形及び基本的層位 …… 7
2　検出遺構 …… 7
(1)弥生時代 …… 7
(2)古墳時代 …… 15
Ⅳ　遺物 …… 23
1　弥生時代 ……（川崎志乃）…… 23
A　ＳＨ１出土遺物 …… 23
B　Ｐ45・46出土遺物 …… 23
C　ＳＫ21出土遺物 …… 23
D　包含層（Ｅ８区）出土遺物 …… 23
E　ＳＫ57出土遺物 …… 23
2　古墳時代 ……（萩原義彦）…… 26
A　10号墳出土遺物 …… 26
B　９号墳出土遺物 …… 26
C　11号墳出土遺物 …… 31
D　13号墳出土遺物 …… 31
E　ＳＸ24（木棺墓）出土遺物 …… 31
3　古墳周濠混入遺物 ……（川崎志乃）…… 31
A　10号墳混入遺物 …… 30
B　９号墳混入遺物 …… 34
C　11号墳混入遺物 …… 34
D　12号墳混入遺物 …… 36
E　13号墳混入遺物 …… 36
4　カクラン坑出土遺物 ……（萩原義彦）…… 37
5　石器・金属製品 ……（萩原義彦）…… 37
Ⅴ　まとめ …… 50
1　弥生時代について ……（川崎志乃）…… 50
(1)住居址について …… 50
(2)ＳＨ１出土甑の系譜について …… 50
(3)刻目について …… 50
(4)いわゆる半截竹管文について …… 50
(5)ハケ調整仕上げの甕について …… 51
(6)弥生時代の遺構・遺物の時期について …… 51
(7)金剛坂遺跡出土土器の特徴 …… 52
2　古墳時代について ……（萩原義彦）…… 52
(1)周辺の古墳群との関係について …… 52
(2)墳形について …… 52
(3)小結 …… 52

挿　図　目　次

Fig. 1　遺跡位置図
Fig. 2　遺跡周辺地形図
Fig. 3　調査区位置図
Fig. 4　調査区平面図
Fig. 5　調査区東壁断面図
Fig. 6　調査区北壁断面図
Fig. 7　ＳＨ１平面・断面図
Fig. 8　ＳＨ２平面・断面図
Fig. 9　ＳＫ57平面・断面図
Fig. 10　ＳＸ13（10号墳）遺物出土状況図
Fig. 11　ＳＸ13（10号墳）・23（９号墳）断面図
Fig. 12　ＳＸ23（９号墳）遺物出土状況図
Fig. 13　ＳＸ28（11号墳）遺物出土状況
Fig. 14　ＳＸ28（11号墳）断面図
Fig. 15　ＳＸ38（12号墳）・49（13号墳）断面図
Fig. 16　ＳＸ11平面・断面図
Fig. 17　ＳＸ24平面・断面図
Fig. 18　出土遺物実測図
Fig. 19　出土遺物実測図
Fig. 20　出土遺物実測図
Fig. 21　出土遺物実測図
Fig. 22　出土遺物実測図
Fig. 23　出土遺物実測図
Fig. 24　出土遺物実測図
Fig. 25　出土遺物実測図
Fig. 26　出土遺物実測図
Fig. 27　出土遺物実測図
Fig. 28　出土遺物実測図
Fig. 29　出土遺物実測図
Fig. 30　出土遺物実測図
Fig. 31　出土遺物実測図
Fig. 32　出土遺物実測図

表　目　次

Tab. 1　遺構一覧表
Tab. 2　遺物観察表
Tab. 3　遺物観察表
Tab. 4　遺物観察表
Tab. 5　遺物観察表
Tab. 6　遺物観察表
Tab. 7　遺物観察表
Tab. 8　遺物観察表
Tab. 9　遺物観察表
Tab. 10　甕の断面形態分類

写真図版目次

ＰＬ．１　調査作業風景　完掘全景
ＰＬ．２　ＳＨ１完掘全景　ＳＫ57遺物出土状況
ＰＬ．３　ＳＸ13完掘全景　ＳＸ13遺物出土状況
ＰＬ．４　ＳＸ13遺物出土状況　ＳＸ23遺物出土状況
ＰＬ．５　ＳＸ28完掘全景　ＳＸ28遺物出土状況
ＰＬ．６　ＳＸ38完掘全景　ＳＸ38完掘全景
ＰＬ．７　ＳＸ49完掘全景　ＳＸ49完掘全景
ＰＬ．８　ＳＸ11完掘全景　ＳＸ24遺物出土状況
ＰＬ．９　耳鐶出土状況　拡張区完掘全景
ＰＬ．10　出土遺物
ＰＬ．11　出土遺物
ＰＬ．12　出土遺物
ＰＬ．13　出土遺物
ＰＬ．14　出土遺物
ＰＬ．15　出土遺物
ＰＬ．16　出土遺物
ＰＬ．17　出土遺物
ＰＬ．18　出土遺物

Ⅰ　前　　言

1　調査契機

県道多気停車場斉明線は、国道42号線から県道鳥羽松阪線への交通路として重要な機能を果たしている。しかし、現状の県道多気停車場斉明線は、狭くてカーブも多く交通路としては非常に不便である。

そのため、この県道の新たなルートの一部として調査対象地が選ばれた。そのルート上には周知の遺跡である金剛坂遺跡が所在しており、その確認の為試掘調査が平成９年度に行われた。その結果、試掘坑から弥生土器等がみつかり、今回の調査に至った。

2　調査方法

調査区に４ｍ四方の小地区を設定した。これには、県道側から南方向に１、２番とういう数字を与え、北西方向から南東方向にアルファベットのＡ、Ｂの名称を与えた。この地区名は、北西隅の杭番号によっている。

3　調査経過

調査地の現状は、畑である。しかし、一部の畑ではトウモロコシの栽培が行われており、段階的に調査を進めることになった。調査そのものは、６月８から重機掘削を行い、６月中旬から作業員による手掘り作業となった。

調査区全体の調査は、７月下旬に大体終了でき、７月25日には、現地説明会を開催した。現地説明会には、約80名の参加者を得ることが出来た。

調査進行中において下層調査の必要性があり、調査は最終的に８月６日までかかって終了することが出来た。

最終的な調査面積は、約800㎡である。この内約50㎡は、下層調査である。

調査は、作業員各位の努力により、無事終了することができた。ここに御名前を記し、御礼を申しあげたい。

高森留吉、永田信夫、脇坂賢、中西芳、小林君栄、島あつ子、小林つる子、辻井眞子、脇坂志津枝、櫛谷みよ子、長谷川久江、阪井志づ、大西み志、池田文子、小川陽、西川好子、西場妙子、樋口茂子、高橋ひな。（敬称略）

4　調査日誌

６／８　重機による表土掘削、竪穴住居とみられる方形の土坑を確認。調査区の一部を除いて表土掘削終了。

６／９　地区設定を行う。北から南にかけてを１・２・３～の番号、東から西にかけてＡ・Ｂ～のアルファベットの設定。午後から雨のため作業中止。

６／15　人力掘削開始。最初に調査区周辺の清掃、壁の精査を行う。

午後からベルトコンベアーの設定及び遺構検出に取りかかる。

６／16　遺構検出。竪穴住居の掘削開始。竪穴住居の残りが非常に悪い。

円筒埴輪が出土。溝と考えていた遺構は、古墳の周濠と判明。

６／17　古墳の周濠を掘削する。古墳の周濠は、かなり深く残っており、円筒・朝顔形埴輪が出土。

６／18　竪穴住居平面・断面実測。土壙墓検出、掘削後実測。他は、周濠掘削。

６／19～25　一週間の間、雨の為、作業中止。

６／26　久々に現場作業再開。古墳の周濠掘削。

６／29　古墳の周濠掘削。現状では、古墳３基存在することが判明する。全て、方墳である。

６／30　調査第一課会議。

７／１　３基目の古墳の周濠掘削開始。

７／２　ひたすら、古墳の周濠掘削。

７／３　調査区の残りの部分の重機による表土掘削。

７／６　新たに表土掘削部分の地区設定。古墳の周濠掘削。追加部分の遺構検出。

７／７　新たに古墳が２基検出した。これらも全て方墳であることが判明。

７／８～10　周濠掘削。ＳＫ57検出後掘削。まと

まって弥生時代の前期の土器出土。

7／13　ひたすら周濠掘削。周濠内に弥生時代前期の土器が多く含む。

7／14　大体の遺構掘削終了。

7／15　調査区の写真撮影のための清掃開始。

7／16　雨のため、作業中止。

7／17　調査区の写真撮影のための清掃開始。午後から写真撮影。

7／20　午前中、写真撮影。午後から実測の為の割り付け。

7／21～22　平面図実測開始。

7／23～24　雨天のため、作業中止。

7／25　連日の雨にもかかわらず晴天、現地説明会開催、約80名の参加者あり。

7／28・29　実測図のレベル入れ。

7／30　下層確認調査約50㎡掘削。進入路部分の重機による表土掘削。

7／31　進入路部分の遺構検出。調査区の古墳とつながることが分かる。

8／3・4　古墳の周濠掘削及び写真撮影。

8／5　センター関連の機材一式撤収。

8／6　午後、現場引渡。

5　文化財保護法等による諸通知について

文化財保護法（以下、法）等にかかる諸通知は、以下によって行っている。

・法第57条の3第1項（文化庁長官宛）

平成10年5月1日付道整第74号（県知事通知）

・法第98条の2第1項（文化庁長官宛）

平成10年6月12日付教埋第85号（県教育長宛）

遺失物法第1条第1項の規定にかかる文化財発見・認定通知

平成10年10月6日付教生第8-20号（松阪警察署長宛）

平成10年10月1日付教埋第2-3号（県教育長通知）

（萩原義彦）

Ⅱ　位置と環境

1　位置

多気郡明和町は、三重県内を北流する櫛田川と宮川によって挟まれた洪積台地の西端に位置している。

北には、櫛田川によって形成された沖積平野が広がり、西には櫛田川と祓川が北流し、東には洪積台地が続き、南には玉城丘陵が連なる。

櫛田川下流域は、大きく３つの地域に区分される。１番目は、櫛田川によって形成された沖積平野、２番目は、櫛田・祓川の両河川に挟まれた河川の氾濫等によって形成された自然堤防・旧河道がみられる地域。３番目は、祓川右岸に広がる明野原台地と呼ばれる洪積台地である。

今回の調査地である金剛坂遺跡（１）は、３番目の地域にあたり、標高14～16m前後の明野原台地上に位置している。

2　環境

遺跡の範囲は南北約700m、東西約100～200mに及ぶ非常に広大な面積である。この遺跡は、縄文時代から中世に至る遺構や遺物を多く出土し、県下でも著名である。

本遺跡は、昭和46年の土砂採取に伴う事前調査（以下、第１次調査と記述する）[1]・59年の県圃場整備事業に伴う調査（以下、森田地区・辰ノ口地区の地区名で記述する）[2]が実施されており、様々な成果を得た。また、圃場整備事業に伴う排水路部分の調査も行われている。

過去の調査から特筆すべき点は、第１次調査で遺物に縄文時代後期とみられる環状壺、弥生時代前期の遠賀川式土器等の出土である。遺構においては、弥生時代中期の方形周溝墓７基を確認している。

森田地区では、弥生時代中期、奈良・平安時代の土器が出土している。遺構では、弥生時代後期の方形周溝墓が６基確認されている。一方、辰ノ口地区のでは、弥生時代前期の土器や古墳時代後期の須恵器等が出土している。遺構では、弥生時代前期の土坑及び古墳時代後期の古墳が５基確認されている。

明和町内を中心に周辺の遺跡を概観すると、旧石器時代の遺跡は、玉城丘陵地域に多く分布する。とりわけ遺物散布地として知られる遺跡は、数多く存在する。金剛坂遺跡南方には、平成９年度調査されたコドノＡ・Ｂ遺跡（１・２）[3]、カゴ山遺跡（３）[4]、上村池Ａ・Ｂ遺跡（４・５）[4]がある。一方、明和町東南隅の玉城丘陵地内にシンゲ池遺跡（６）[4]、明星牛場Ａ（通称シンデ遺跡）・Ｂ・Ｃ遺跡（７・８・９）[4]、水池Ｂ遺跡（10）[5]、新池東遺跡（11）[6]、長岡遺跡（12）[7]、須磨ケ広遺跡（13）[8]がある。また、この中間地域に北野遺跡（14）[9]がある。これらの遺跡は、調査されているものが少ない。

縄文時代の遺跡では、明野原台地上に金剛坂遺跡自体が中期から晩期にかけての遺物が出土している。台地縁辺部上の粟垣内遺跡（15）[10]では、晩期の土器が出土している。

玉城丘陵地内では、早期や後期の土器が出土する上村池Ａ遺跡、前期の丸山Ｂ遺跡（16）[11]、中・後期にかけての六ッ葉広遺跡（17）[11]があり、これら以外でも斎宮池遺跡（18）[12]、城山遺跡（19）、斎宮跡[13]からも縄文土器が出土している。

台地と平野部との接点地域には、晩期の土器や人面土版が出土したことが知られる西出遺跡（20）[14]がある。また、大堀川を挟んだ台地上には、中・後期の土器が出土する明星牛場Ａ遺跡がある。

弥生時代の遺跡は、櫛田川下流域に多く存在する。明野原台地の縁辺部に立地する金剛坂遺跡を始め、粟垣内遺跡、中期から後期にかけての竪穴住居を検出した西出遺跡、中期を主体とした斎宮跡（古里遺跡）[15]、田家頭遺跡（21）、一ト城戸Ｃ遺跡（22）、平尾遺跡（23）がある。

台地内陸部には、弥生時代前期から古墳時代初頭にかけて竪穴住居が検出され、また後期の竪穴住居から銅鐸形土製品が出土した北野遺跡をはじめ水池Ｂ遺跡、本郷遺跡（24）がある。

玉城丘陵地域では、弥生時代前期とみられる上村ウシバ遺跡（25）、大道Ｂ遺跡（26）[16]や中期の壺が出土している西村遺跡（27）[17]、広垣内遺跡（28）[18]及び後期とみられる丸山Ｂ遺跡、樋口遺跡（29）、六

ッ葉広遺跡がある。

櫛田川や祓川によって形成された低位の河岸段丘上には、数多くの方形周溝墓が築かれ、パレススタイルの壺が出土した寺垣内遺跡（30）[19]や神殿遺跡（31）[20]、川原口遺跡（32）[21]がある。また、古墳封土からであるが神前山１号墳（33）[22]では、いわゆる亜流遠賀川式の前期土器が出土している。

古墳時代になると、玉城丘陵や明野原台地に多くの古墳が造営される。玉城丘陵中の多気町側には、５世紀前半の方墳、権現山２号墳を始めに５世紀中頃の高塚１号墳（34）[23]、５世紀後半の神前山１号墳が順次造営されている。

６世紀に入って規模は縮小するものの、数多くの古墳（群集墳）が造営されている[24]。金剛坂遺跡から南西地域には、すでに消滅した織糸古墳群（35）やコドノ古墳（36）、かまくら古墳群（37）、城山古墳

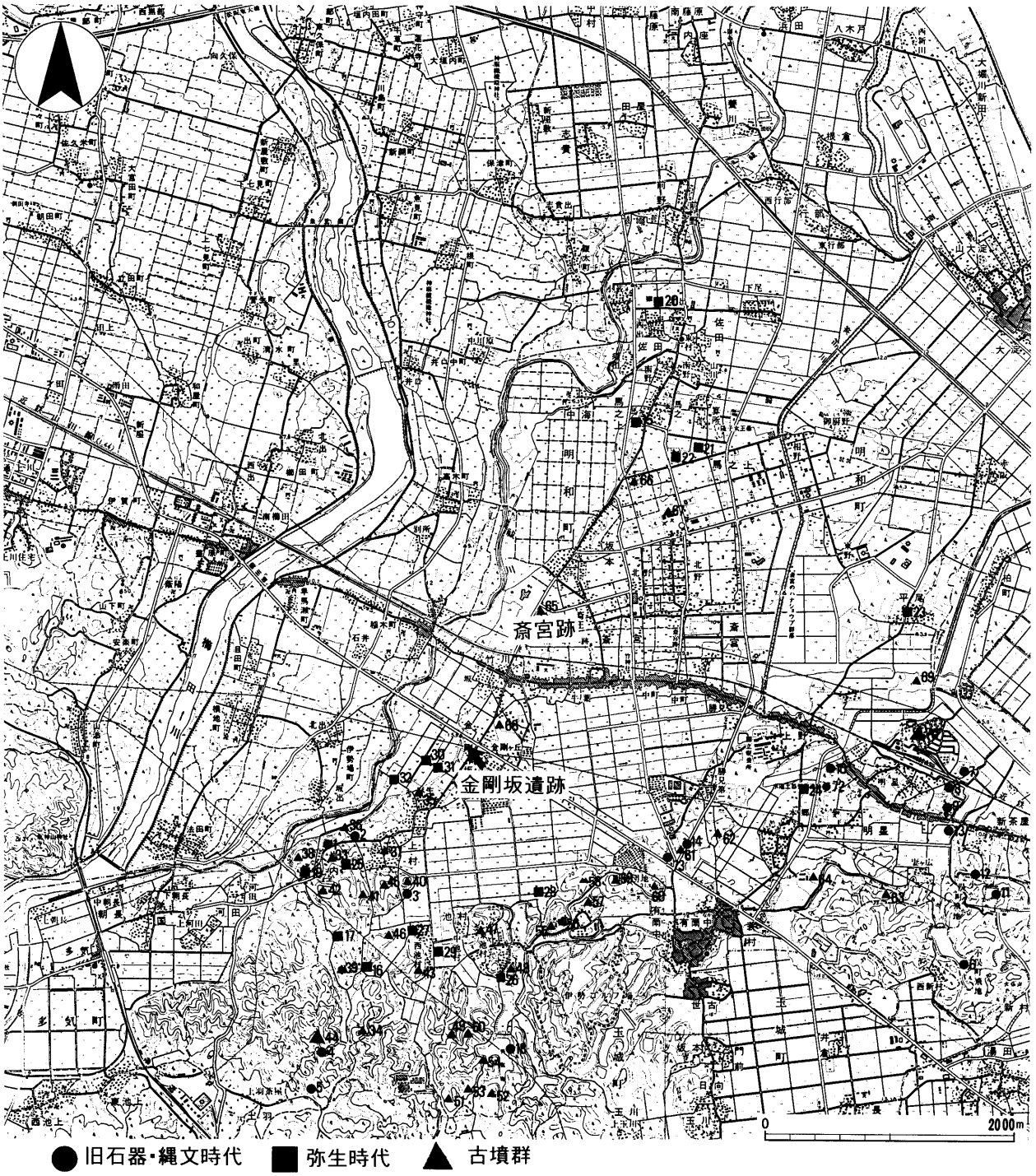


Fig. 1　遺跡位置図（１／50，000）　　（国土地理院「明野」１／25，000 から）

群（38）、神前山古墳群（33）、六ッ葉広古墳群（39）、カゴ山古墳群（40）、黒板古墳群（41）、大塚古墳群（42）、愛場古墳群（43）、高塚古墳群（34）、上村池古墳群（44）、天王山古墳群（45）、丸山古墳（46）がある。

南方の地域には、世古古墳群（47）、大道古墳（48）、小金古墳群（49）、池村古墳群（50）ユブミ古墳群（51）、戸峯A・B古墳群（52・53）、斎宮池古墳群（54）がある。

また、南東方向の丘陵地には、戸峰古墳群（55）、大林古墳群（56）、長五郎林古墳群（57）、合戦田古墳群（58）、垣場古墳群（59）、発シ古墳群（60）が集中している。

さらに、発シ古墳群の東方台地上には、順禮野古墳群（61）と西ノ野古墳（62）がある。

東方の丘陵地には、大仏山古墳群（63）や蓑村大塚古墳（64）がある。

明野原台地上では、斎宮跡に点在する塚山古墳群（65）、塚山古墳群北方にある坂本古墳群（66）、東垣外古墳群（67）がある。金剛坂遺跡の東方には、消滅したが金剛坂古墳（68）がある。

大堀川を越えた台地上には、曽祢崎古墳群（69）、明星古墳群（70）がある。

以上にのように、これほどまでに古墳が密集する地域は、三重県下では他に類を見ない。この特異さが、斎宮を形成する基盤になっていったと考えられる。

奈良時代から平安時代にかけては、斎宮跡が当域

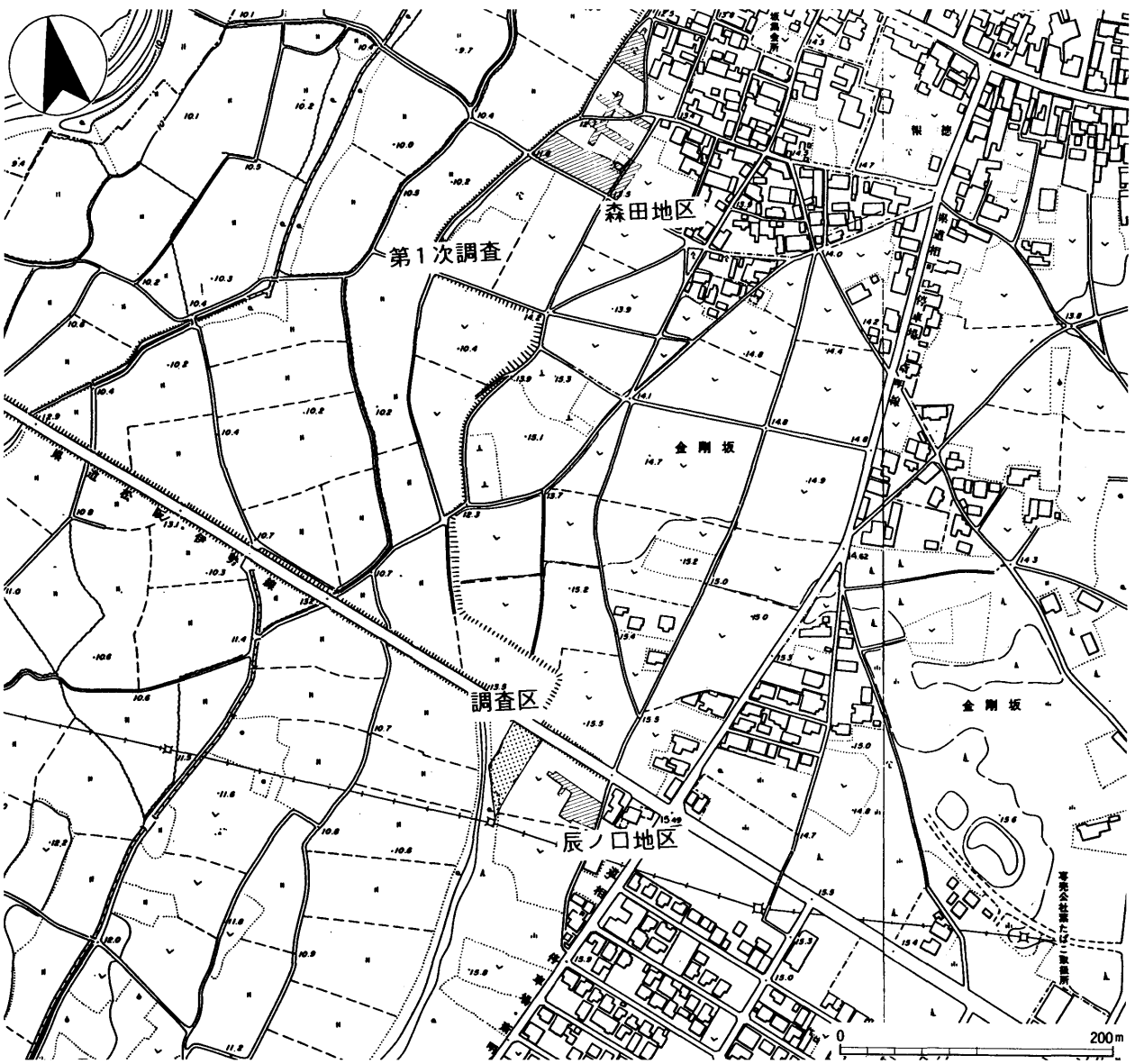


Fig. 2　遺跡周辺地形図（1／5，000）

を代表する遺跡である。斎宮跡以外では、北野遺跡や戸峰遺跡（71）、水池土器製作遺跡（72）、堀田遺跡（73）などがある。これらの遺跡からは、土器焼成坑がみつかっており、ここで製作された土器が伊勢神宮を含め、斎宮に供給されていたとみられる[25]。

（萩原義彦）

〔註〕

①山澤義貴・谷本鋭次「金剛坂遺跡発掘調査報告」（明和町教育委員会　1971年）

②田村陽一・浅尾悟・宮田勝功「昭和59年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告」（『金剛坂遺跡』三重県教育委員会　1988年）

③西出孝『コドノＡ・Ｂ遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター　1998年）

④下村登良男「河田古墳群周辺の古墳分布」（『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986年）

⑤奥義次「上地山遺跡発掘調査報告」（『三重県の先土器時代関連遺跡地名表』玉城町教育委員会　1985年）

大宮町「宮川流域周辺の先史遺跡と遺物」（『大宮町史　歴史編』1987年）

⑥奥義次「三重県の遺跡」（『日本の旧石器』第３巻　雄山閣　1976年）

⑤の文献にも記載されている。

⑦⑤の文献に記載されている。

⑧⑤の文献に記載されている。

⑨三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報15－昭和59年度－』（1984年）

竹田憲治・広岡公夫『北野遺跡（第５次）発掘調査概報』（三重県埋蔵文化財センター　1996年）

⑩三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報10－昭和54年度－』（1979年）

大宮町「宮川流域周辺の先史遺跡と遺物」（『大宮町史　歴史編』1987年）

⑪⑩の文献に記載されている。

⑫奥義次「上地山遺跡発掘調査報告」（『三重県の先土器時代関連遺跡地名表』玉城町教育委員会　1985年）

大宮町「宮川流域周辺の先史遺跡と遺物」（『大宮町史　歴史編』1987年）

⑬大西源一「伊勢国多気郡相可村斎宮村に於ける古墳及び同時代の遺物」（『人類学雑誌』第19巻第212号　東京人類学会　1904年）

大野雲外「参宮の記」（『人類学雑誌』第25巻第283号　東京人類学会　1910年）

鈴木敏雄『三重県名勝旧蹟天然記念物調査報告』（1925年）

大野雲外「参宮の記」（『土中の日本』　1925年）

谷川磐雄「伊勢考古断片」（『考古学雑誌』第17巻第５号　考古学会　1927年）

鈴木敏雄「伊勢に於ける弥生式の系統と分脈」（『考古学雑誌』第20巻第11号　考古学会　1930年）

鈴木敏雄「伊勢に於ける古代遺跡」（『史学会会報』第10号　神宮皇學館史学会　1932年）

鈴木敏雄『斎宮村考古誌考』（1935年）

吉田富夫「伊勢国の弥生式文化」（『考古学』第８巻第６号　東京考古学会　1937年）

藤岡謙二郎「－櫛田川・紀ノ川流域－」（『河谷の歴史地理』蘭書房　1958年）

岡田登「神宮皇學館と考古学（上）－鈴木敏雄氏遺稿資料を中心として－」（『史料』第93号　皇學館大学史料編纂所　1988年）

⑭三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報９－昭和53年度－』（1978年）

三重の考古遺物編集委員会『図録三重の考古遺物』（三重県良書出版　1981年）

⑮斎宮跡の調査については、『明和町遺跡地図』（明和町教育委員会　1988年）に記載されていた文献一覧表を参考としている。

⑯皇學館大學考古学研究会『土師器とその窯』（1986年）

三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報14－昭和58年度－』（1984年）

三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16－昭和60年度－』（1986年）

⑰三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報13－昭和57年度－』（1983年）

高見宣雄「西村遺跡・愛場遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1983年）

⑱三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報11－昭和55年度－』（1981年）

伊藤久嗣・伊勢野久好「堀田遺跡」（『昭和55年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1981年）

⑲三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16－昭和60年度－』（1986年）

三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報17－昭和61年度－』（1987年）

⑳三重県教育委員会『三重県埋蔵文化財年報16－昭和60年度－』（1986年）

㉑鈴木敏雄『斎宮村考古誌考』補記（1941年）

㉒下村登良男『神前山１号墳発掘調査報告』（明和町教育委員会　1973年）

伊藤久嗣「伊勢その南と北」（『考古学と地域文化』同志社大学　1987年）

㉓金子延夫『玉城町史』第１巻（1983年）

㉔④の文献に記載されている。

以下、文章中の古墳群については上記の報告書を参考にした。古墳群の細部については、『明和町遺跡地図』（明和町教育委員会　1988年）を参照されたい。

㉕西村美幸『曽祢崎遺跡（第２次）・曽祢崎古墳群』（三重県埋蔵文化財センター　1997年）

Ⅲ　遺　　構

1　調査区の地形と基本的層位

調査区の標高は、調査前において約16m前後を測る。今回の調査によって判明した遺構は、大きく分けて弥生時代前期と古墳時代後期の２時期に区分される。弥生時代前期は、竪穴住居・土坑があり集落とみられる。古墳時代後期の遺構は、古墳等によって占められているため古墳群（辰ノ口古墳群）とみられる。

基本的な層位は、表土直下の黄褐色土層が遺構検出面である。その面において削平された古墳及び弥生時代の遺構が確認された。

2　検出遺構

⑴弥生時代

ＳＨ１　調査区北隅に位置する隅丸方形を呈する竪穴住居である。遺構の一部は調査区外であるが、

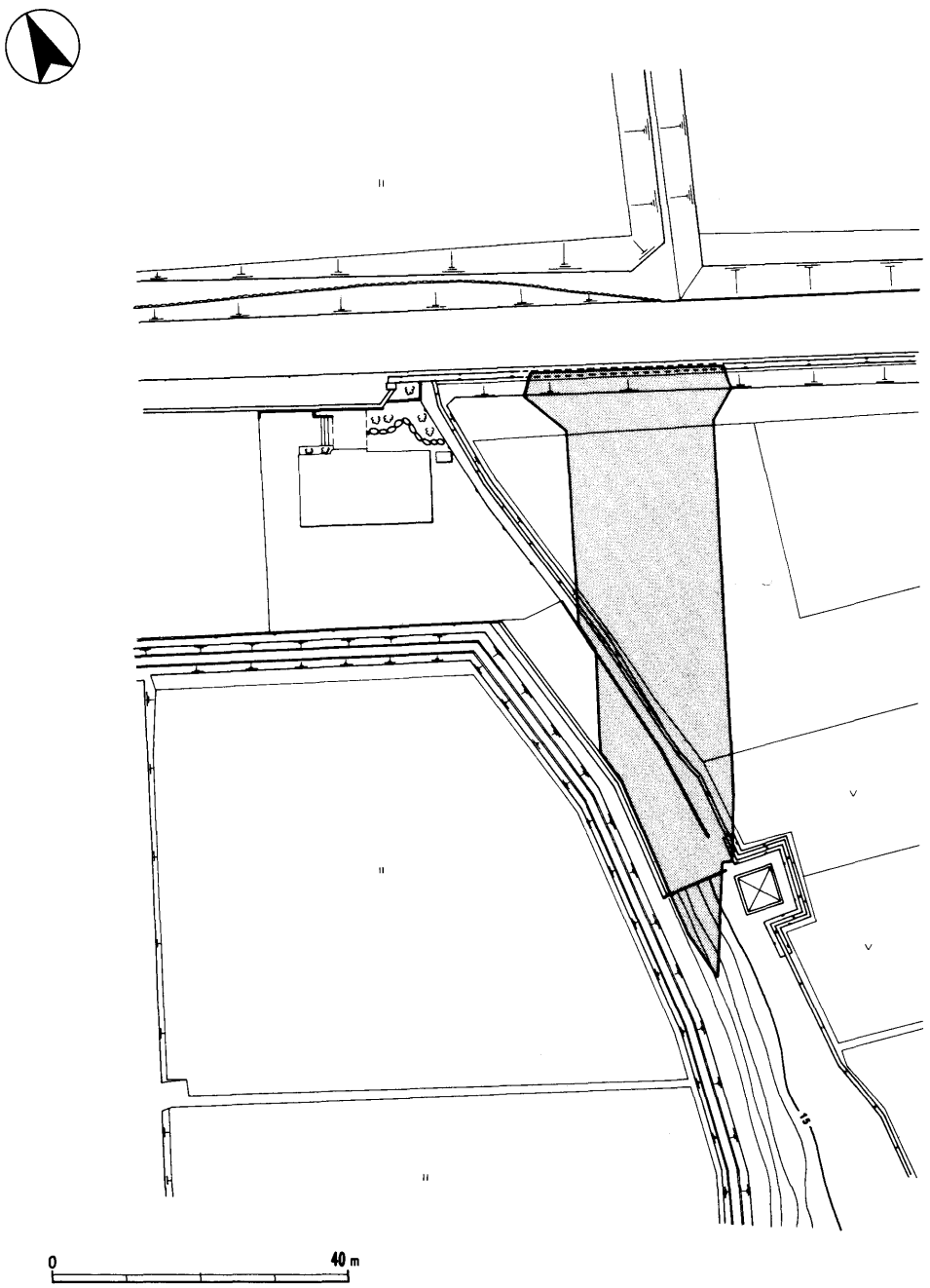


Fig. 3　調査区位置図（１／1，000）

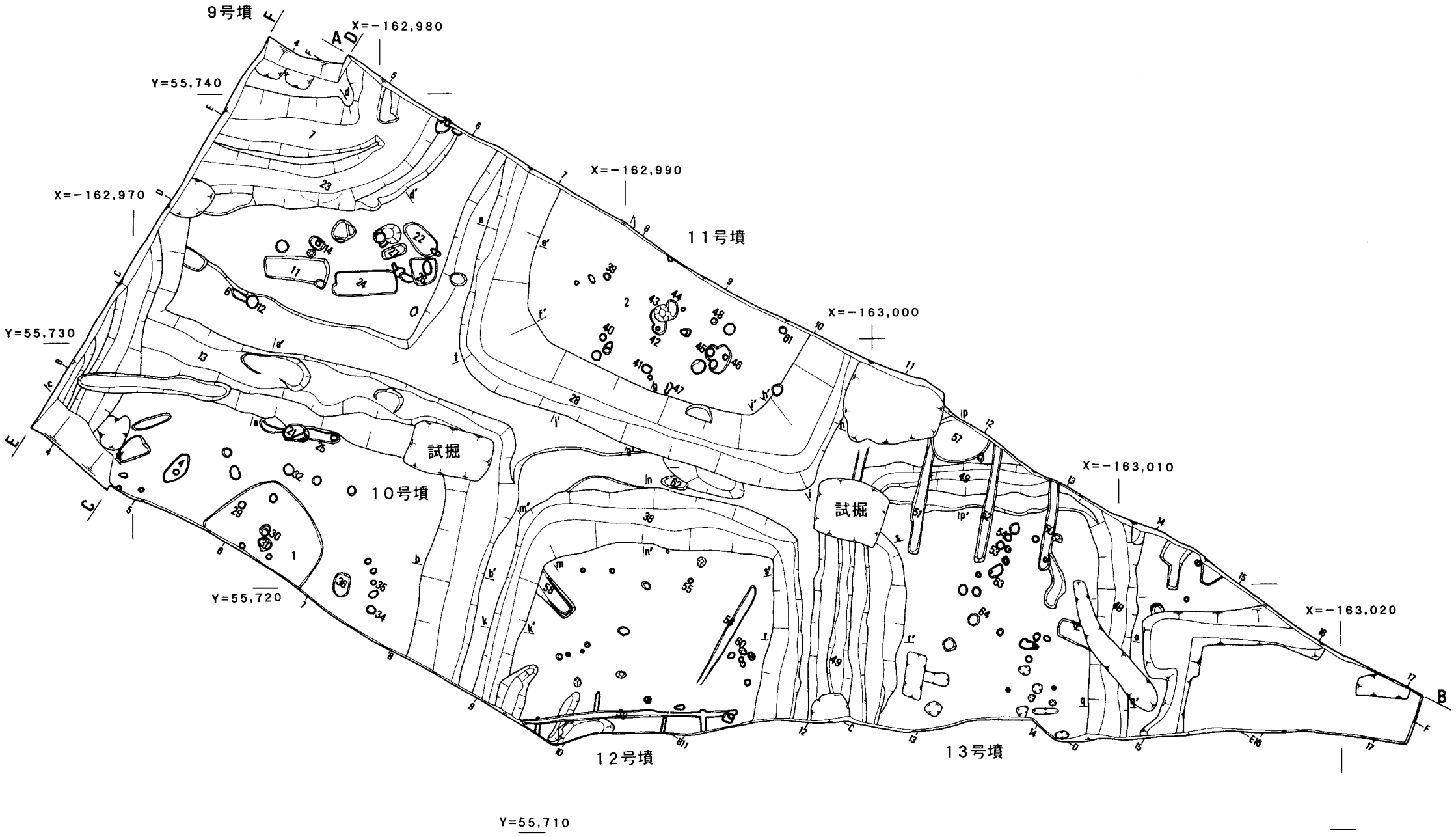
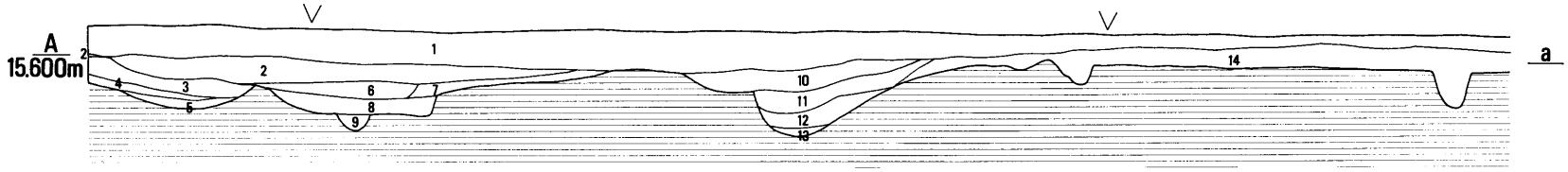
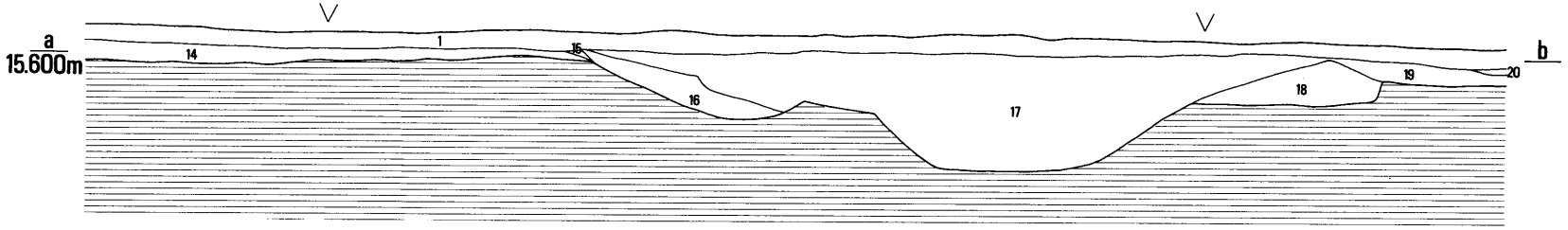
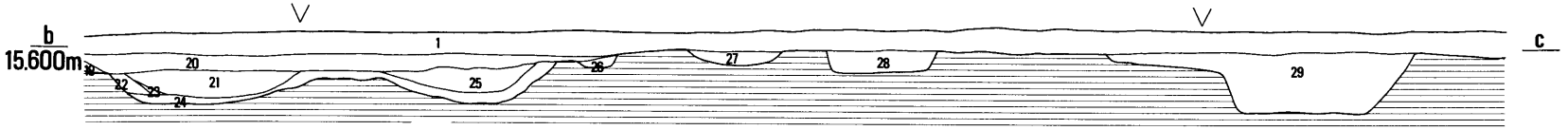
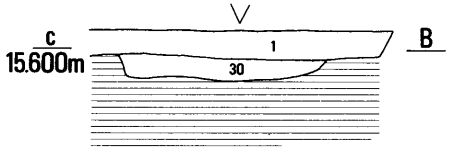


Fig. 4　調査区平面図（ 1／200 ）





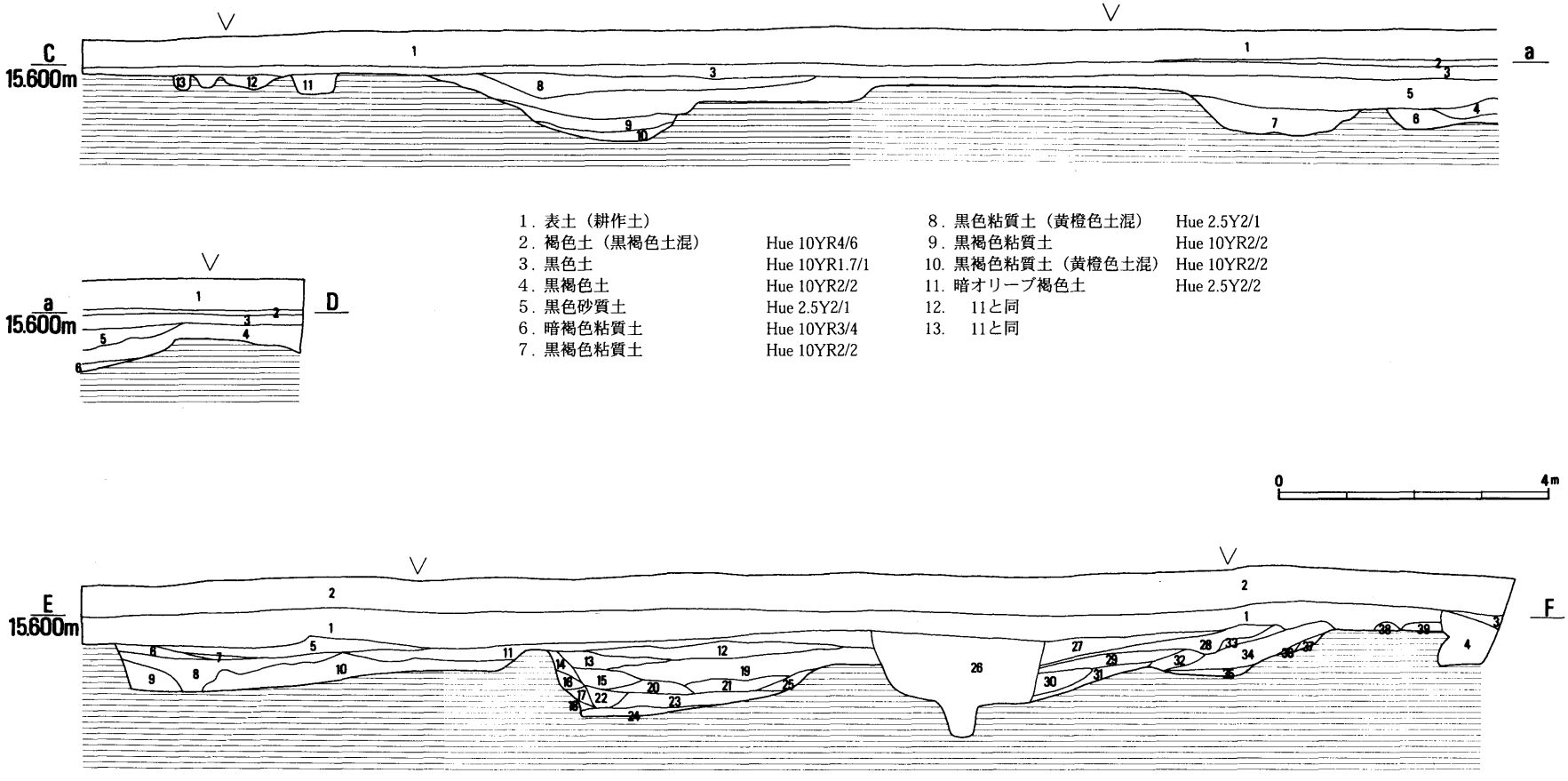




1. 表土（耕作土）		16. 7と同	
2. 褐色土（黒褐色土混）	Hue 10YR4/6	17. カクラン抗	
3. 黒色土	Hue 10YR4/6	18. 黒色砂質土	Hue N.1.5/0
4. 黒褐色土	Hue 10YR1.7/1	19. 黒褐色土	Hue 2.5Y3/2
5. 暗褐色粘質土	Hue 10YR3/4	20. 3と同	
6. 黒色土	Hue 2.5Y2/1	21. 4と同	
7. 黒色砂質土	Hue 2.5Y2/1	22. 黒色砂質土	Hue 2.5Y2/1
8. 黒褐色粘質土	Hue 10YR2/2	23. 黒色砂質土（褐色土混）	Hue 2.5Y2/1
9. 黒褐色粘質土（黄橙色土混）	Hue 10YR2/2	24. 5と同	
10. 7と同		25. 4と同	
11. 8と同		26. 4と同	
12. 9と同		27. 4と同	
13. 黄橙色粘質土（黒褐色土混）	Hue 7.5YR7/8	28. 3と同	
14. 3と同		29. 17と同	
15. 褐色土	Hue 10YR4/6	30. 17と同	

Fig. 5　調査区東壁断面図（1／100）

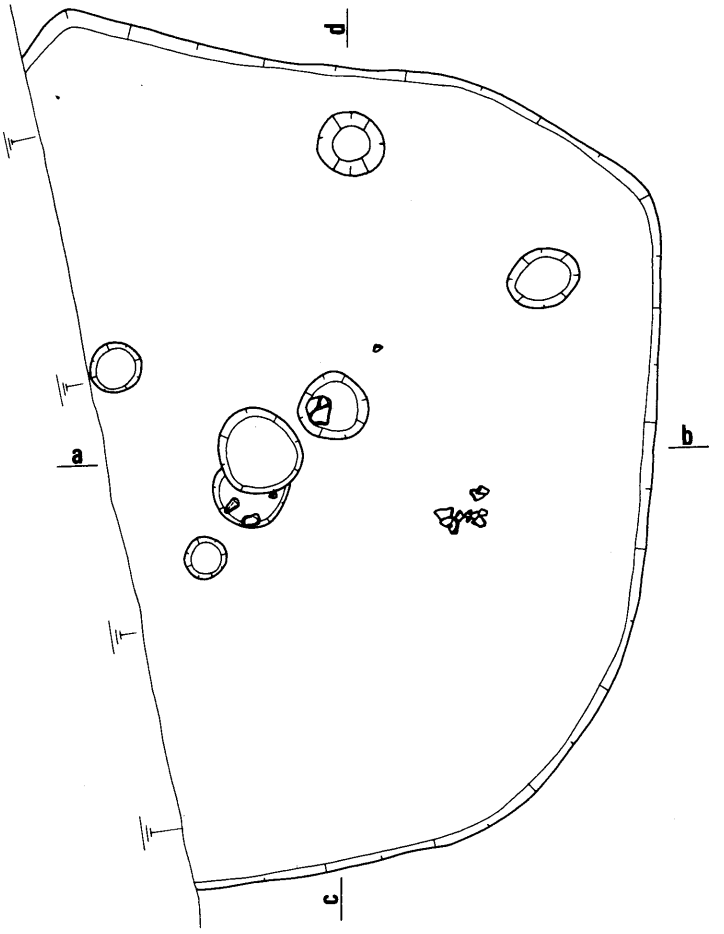
0　4m

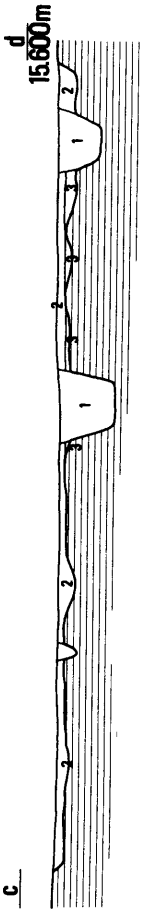


1．表土（耕作土）
2．褐色土（黒褐色土混）　Hue 10YR4/6
3．黒色土　Hue 10YR1.7/1
4．黒褐色土　Hue 10YR2/2
5．黒色砂質土　Hue 2.5Y2/1
6．暗褐色粘質土　Hue 10YR3/4
7．黒褐色粘質土　Hue 10YR2/2
8．黒色粘質土（黄橙色土混）　Hue 2.5Y2/1
9．黒褐色粘質土　Hue 10YR2/2
10．黒褐色粘質土（黄橙色土混）　Hue 10YR2/2
11．暗オリーブ褐色土　Hue 2.5Y2/2
12．　11と同
13．　11と同

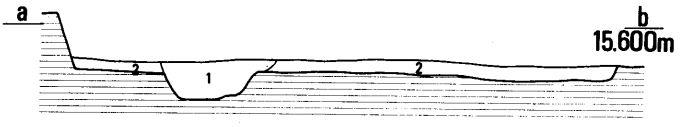
1．表土（耕作土）
2．盛土
3．カクラン
4．カクラン
5．黄褐色土　Hue 10YR5/8
6．褐色土　Hue 10YR4/4
7．黄褐色土　Hue 10YR7/8
8．褐色土　Hue 10YR4/6
9．にぶい黄褐色土　Hue 10YR4/3
10．　9と同
11．黄褐色土（黒色土混多い）　Hue 7.5YR7/8
12．黒色土　Hue 10YR2/1
13．黒褐色土　Hue 10YR3/1
14．黄橙色粘質土　Hue 10YR8/6
15．黒褐色土（黄橙色ブロック混）Hue 10YR2/3
16．黄橙色粘質土　Hue 7.5YR7/8
17．黒褐色砂質土（灰黄橙色土混）Hue 10YR2/3
18．明黄橙色粘質土　Hue 10YR6/8
19．暗褐色土　Hue 10YR3/4
20．黒褐色土　Hue 10YR2/2
21．黒褐色土（黄橙色土混）　Hue 10YR2/2
22．黒色砂質土　Hue 10YR6/8
23．　17と同
24．灰黄褐色砂質土　Hue 10YR4/2
25．　14と同
26．カクラン
27．　11と同
28．黄褐色土（黒色土混少い）　Hue YR5/6
29．褐色土　Hue 10YR5/6
30．黒色砂質土　Hue 10YR1.7/1
31．褐色砂質土　Hue 10YR4/4
32．暗褐色土　Hue 10YR3/3
33．　32と同
34．黒色砂　Hue 10YR1.7/1
35．黒褐色土（橙色土混）　Hue 7.5YR6/8
36．　34と同
37．暗褐色土　Hue 7.5YR3/3
38．　34と同
39．　34と同

Fig. 6　調査区北壁断面図（1／100）





1．黒褐色土　Hue 10YR2/2
2．黒褐色土（黄橙色土混）　Hue 10YR2/2
3．黒褐色土（明黄褐色土混）　Hue 10YR2/2



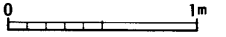


Fig. 7　ＳＨ１平面・断面図（１／40）

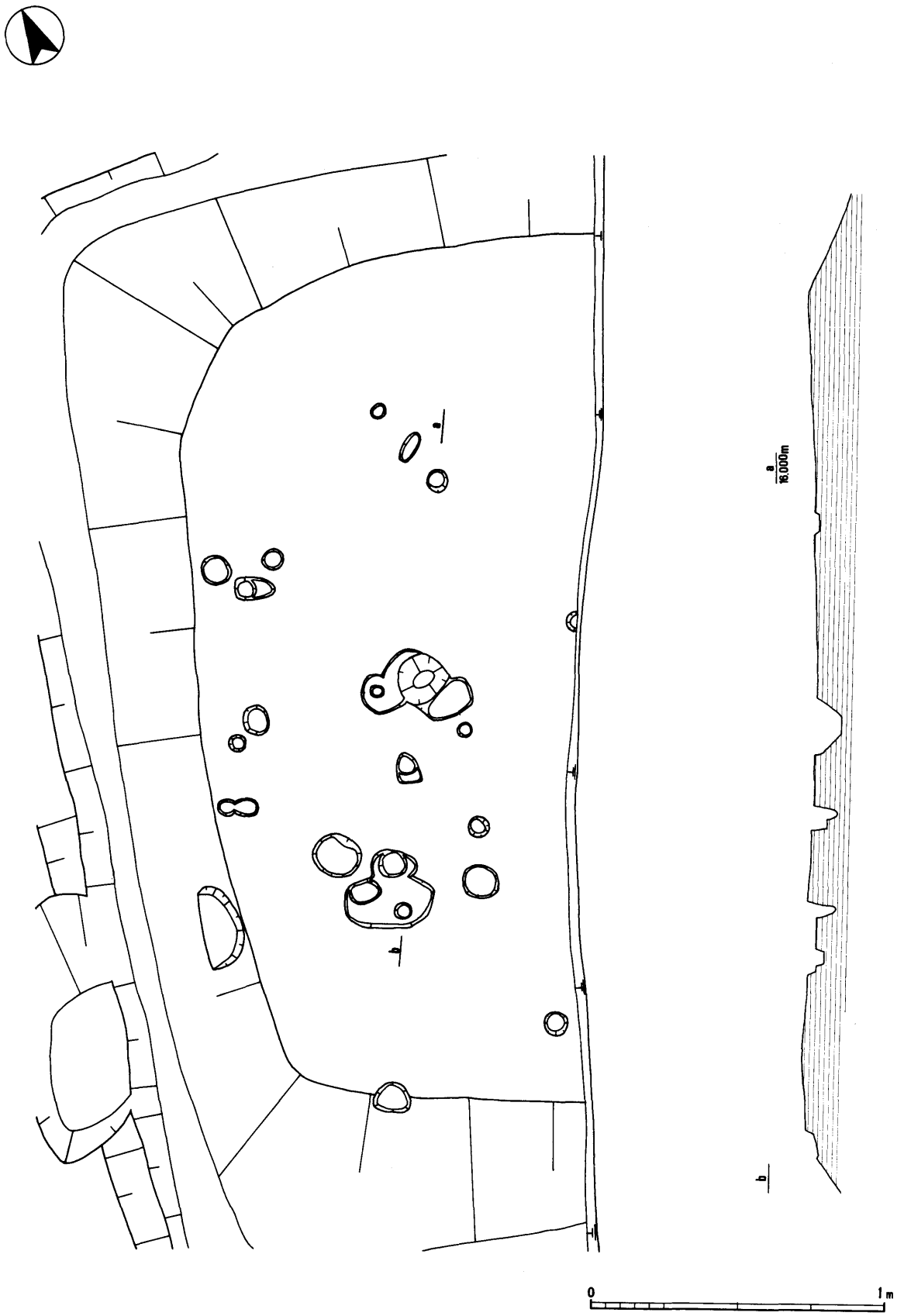


Fig. 8　ＳＨ２平面・断面図（１／80）

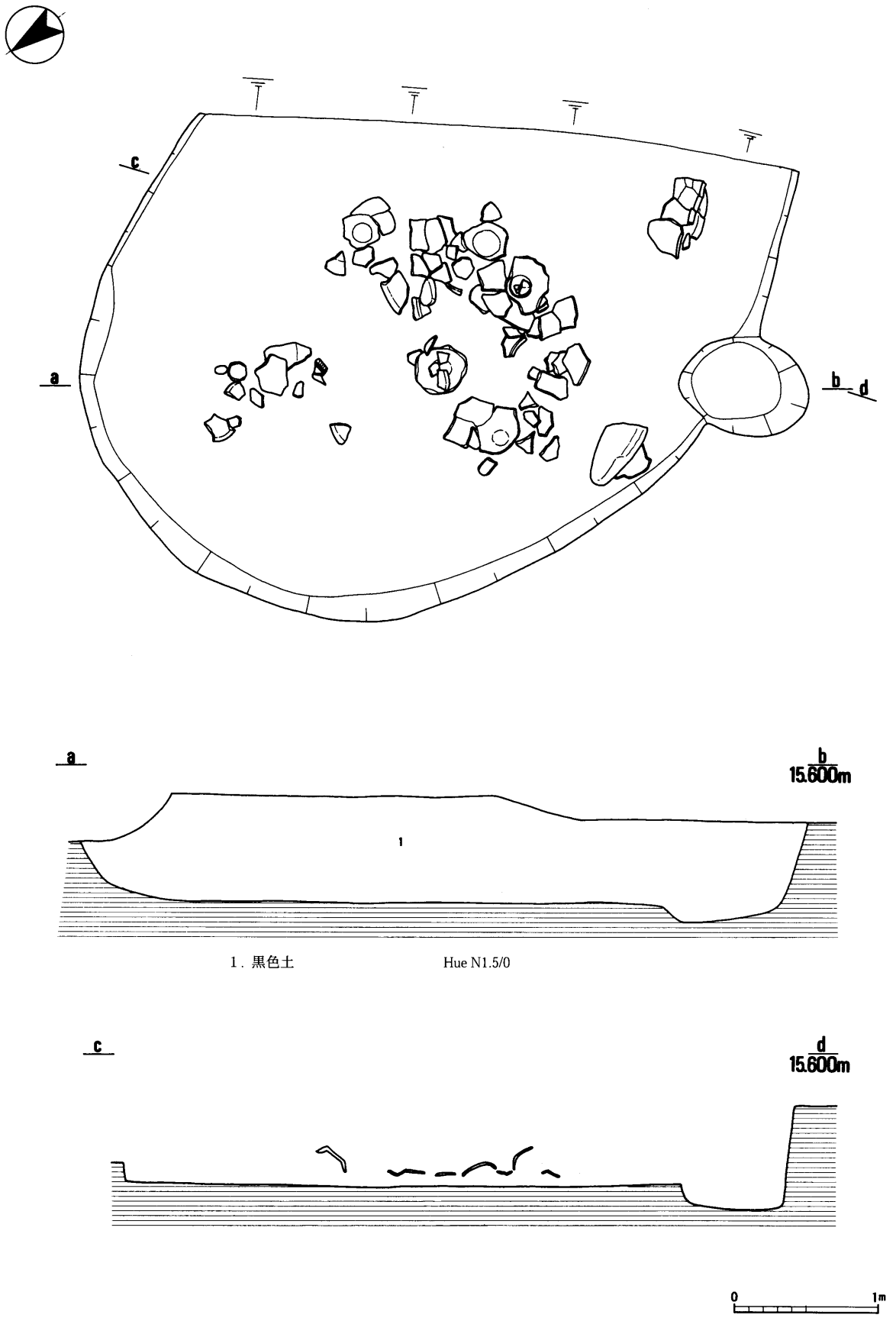


Fig. 9　ＳＫ57平面・断面図（１／40）

南北4.2m、深さ約７㎝前後を測る。主柱穴とみられる柱穴は１ヵ所確認できた。遺構の残存度合は、後世の削平を受けて低い。埋土は黒色土である。竪穴住居中央の穴は、現状では不明だがカマドの可能性もある。時期は出土遺物から前期とみられる。

ＳＨ２　調査区東壁付近北よりに位置する円形の竪穴住居である。調査時は黒色土の為、遺構検出時に確認できなかった。しかし、黒色土層を取り除いた状態で柱穴が円形状に並び建つため、松菊里式の円形竪穴住居と考えられる。時期は出土遺物から前期とみられる。

ＳＫ57　調査区東壁中央部付近に位置する土坑である。南北約２ｍ、東西約1.8m、深さは、約0.6mのやや楕円形を呈する。遺構は、非常に良く残り出土遺物も多く出土した。時期は出土遺物から前期とみられる。

ＳＫ21　調査区北側に位置する楕円形状の土坑である。南北約１ｍ、東西約0.8m以上、深さ約0.6mである。時期は、出土遺物から弥生前期とみられる。

ＳＤ７　調査区北東隅に位置する溝である。調査区東からＬ字形状に90°北に向かって屈曲する溝である。検出長は、南北方向で約5.5m、東西方向で約２ｍである。規模は、南北方向幅約2.5m、深さは遺構検出面から約0.6m、東西方向幅約1.1m、深さは遺構検出面から約0.3mである。時期は出土遺物から前期とみられ、可能性としては方形周溝墓が考えられる。

⑵古墳時代

ＳＸ13（辰ノ口古墳群10号墳、以下文章中では10号墳とする）　調査区北西部を占める削平された方墳である。古墳の一部は調査区外であるため、周濠の西辺と北辺の一部は、検出できなかった。周濠をは、近代に入った段階で古墳を削平した土で埋め立て整地されている。そのため、周濠の埋土の上層には、弥生時代から古墳時代の遺物の他、近代のものまで含まれている。

墳丘の規模は、基底で南北約17ｍを測る。残丘は、南北14ｍ、高さは最も深い溝底から約１ｍを残す。周濠を含めた規模は、南北方向で18.6ｍを測る。南側周濠は、幅約2.5m、深さ約0.7mを測る。東側周濠は、幅約３ｍ，深さ約１ｍを測る。北側周濠は、幅約1.5m、深さ約0.8mを測る。埋葬施設およびその痕跡は、削平を受け全くみられず完全に破壊されている。墳丘の方位は東側周濠基底で、北から13°東に振っている。

出土遺物は東側周濠の埋土下層から土師器杯、須恵器蓋、杯、円筒埴輪、朝顔形埴輪が出土している。出土遺物の時期は、６世紀前半に位置する。埋土上層から弥生時代前期壺、甕、古墳時代後期須恵器身等が出土している。

ＳＸ23（辰ノ口古墳群９号墳、以下文章中では９号墳とする）　調査区北東隅の一角を占める古墳である。古墳の南西隅のみ検出した。おそらく平面形は、方墳と考えられる。この古墳も10号墳と同様近代の削平を受け完全に破壊されている。

古墳の規模は不明である。墳丘の方位は東側周濠の基底で、北から７°東に振っている。

出土遺物は、周濠埋土上層から須恵器蓋、杯、円筒埴輪、形象埴輪が出土している。下層からは、形象埴輪が出土している。出土遺物の時期は、７世紀に位置する。

ＳＸ28（辰ノ口古墳群11号墳、以下文章中では11号墳とする）　調査区東側中央付近を占める方墳である。古墳は、北および南側周濠の一部と西側周濠を検出した。この古墳も９・10号墳と同様近代の削平を受け完全に破壊されている。

墳丘の規模は、基底で南北約14.5ｍを測る。残丘は、南北11.5ｍ、高さは最も深い溝底から約0.8mを残す。周濠を含めた規模は、南北16.1ｍを測る。南側周濠は、幅約３ｍ、深さ約0.7mを測る。東側周濠は、幅約2.5m、深さ約0.6mを測る。北側周濠は、幅約2.2m、深さ約0.8mを測る。

埋葬施設およびその痕跡は、まったくみられず完全に破壊されている。墳丘の方位は東側周濠基底で、北から18°東に振っている。

出土遺物は周濠埋土上層から弥生時代前期の壺、甕を含んでいる。下層からこの地域で出土しない土師器甕、弥生土器が出土している。出土遺物は混入が多いが、時期は６世紀代とみられる。

ＳＸ38（辰ノ口古墳群12号墳、以下文章中では12号墳とする）　調査区西側中央付近を占める方墳で

ある。古墳は、北、西および南側周濠の一部を検出した。この古墳も９・10・11号墳と同様近代の削平を受け完全に破壊されている。

墳丘の規模は、基底で南北約11.2mを測る。残丘は、南北9.8m、高さは最も深い溝底から約0.7mを残す。周濠を含めた規模は、南北12.4mを測る。南側周濠は、幅約1.2m、深さ約0.6mを測る。西側周濠は、幅約2.2m、深さ約0.7mを測る。北側周濠は、幅約1.4m、深さ約0.7mを測る。

埋葬施設およびその痕跡は、まったくみられず完全に破壊されている。墳丘の方位は10号墳と揃えられており西側周濠基底で北から３°東に振っている。出土遺物は周濠埋土上層から弥生時代前期の壺、甕を含んでいるが、古墳造営を明確にする遺物はない。

ＳＸ49（辰ノ口古墳群13号墳、以下文章中では13号墳とする）　調査区南付近を占める方墳である。古墳は、北、西および南側周濠を検出した。この古墳も９・10・11・12号墳と同様近代の削平を受け完

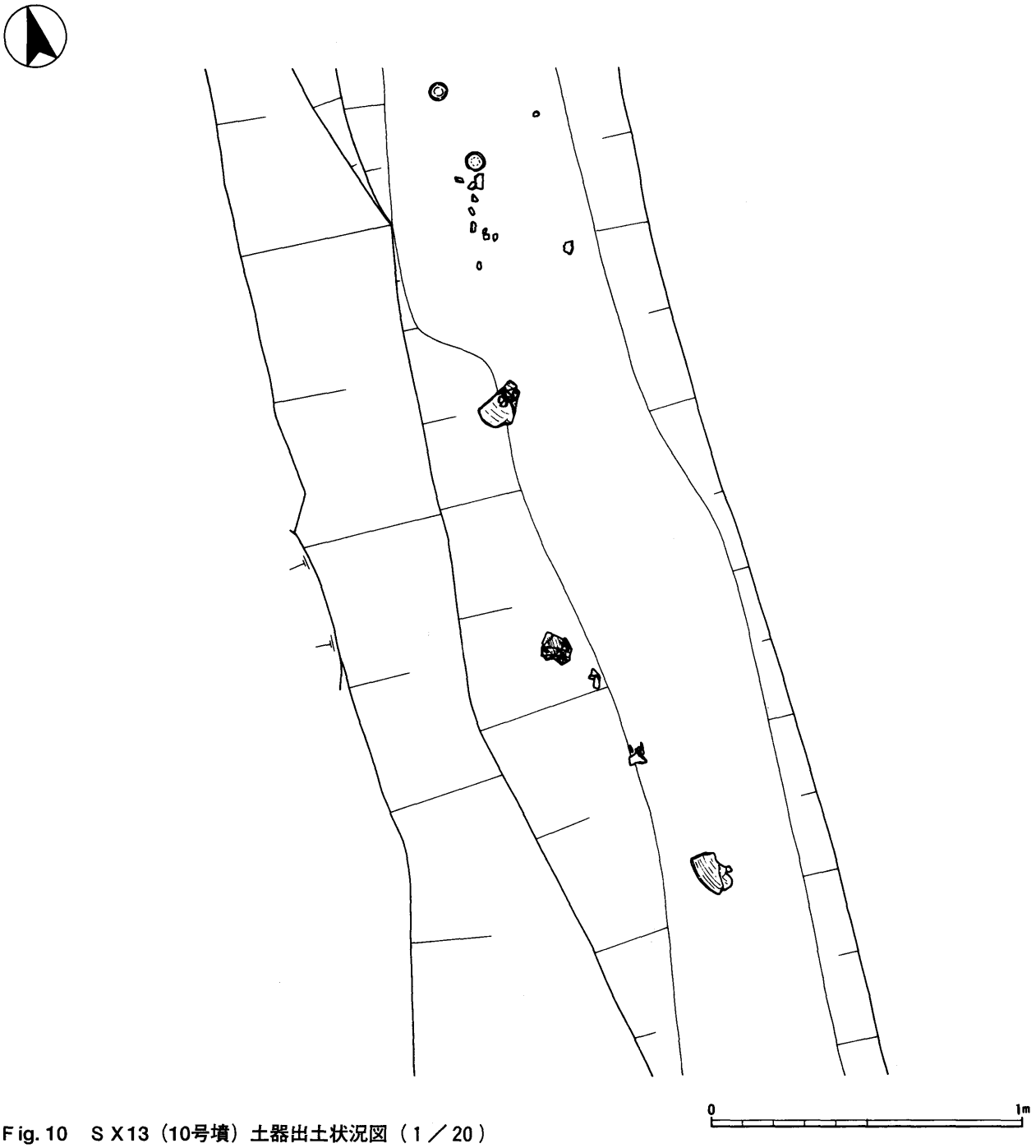
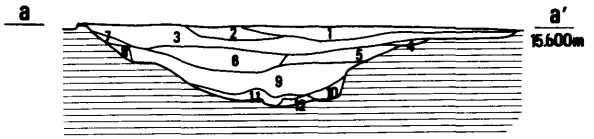


Fig. 10　ＳＸ13（10号墳）土器出土状況図（１／20）

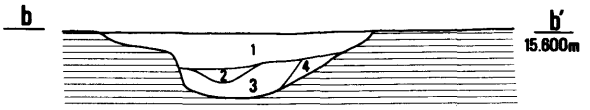
10号墳　畦1



10号墳　畦1

1．黒色砂質土	Hue 7.5YR2/1
2．にぶい黄褐色土	Hue 7.5YR4/3
3．にぶい黄褐色土	Hue 7.5YR5/4
4．明黄褐色土	Hue 7.5YR6/8
5．黒褐色土	Hue 7.5YR3/1
6．褐色土	Hue 7.5YR4/4
7．暗褐色砂質土	Hue 7.5YR3/4
8．黄褐色土	Hue 7.5YR5/6
9．黒色砂質土	Hue 7.5YR1.7/2
10．黒褐色砂質土	Hue 7.5YR2/2
11．黒褐色砂質土（黄褐色砂質土混）	Hue 7.5YR2/3
12．黄橙色粘質土（黒褐色土混）	Hue 7.5YR7/8

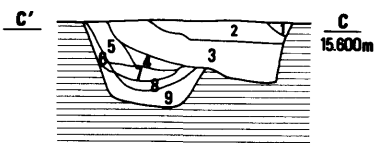
畦2



畦2

1．明黄褐色土（黒色土混）	Hue 10YR6/8
2．黒褐色砂質土	Hue 7.5YR2/2
3．黒色土	Hue 7.5YR2/1
4．黒褐色砂質土	Hue 7.5YR3/1

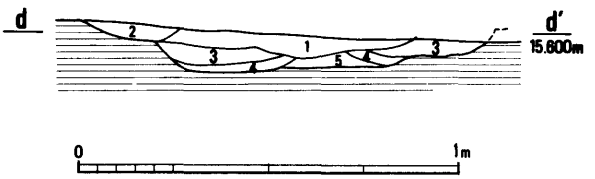
畦3



畦3

1．褐色土	Hue 10YR4/4
2．褐色土	Hue 10YR4/6
3．にぶい黄褐色土	Hue 10YR4/3
4．暗褐色土	Hue 10YR3/3
5．黒褐色土	Hue 2.5Y3/2
6．黒褐色土	Hue 2.5Y3/1
7．暗オリーブ褐色土	Hue 2.5Y3/1
8．黄色土（黒色土混）	Hue 2.5Y7/8
9．黒色土（黄色ブロック混）	Hue 2.5Y2/1

9号墳　畦1　断面図



SX　畦1

1．暗褐色土（黒色砂質土混）	Hue 10YR3/4
2．褐色砂質土	Hue 10YR4/6
3．黒褐色砂質土	Hue 2.5YR1.7/1
4．暗褐色砂質土（黒色砂質土混）	Hue 10YR3/3
5．黄褐色土	Hue 10YR5/8
6．明赤褐色粘質土	Hue 5 YR5/8

Fig. 11　SX13（10号墳）・23（9号墳）断面図（1／80）

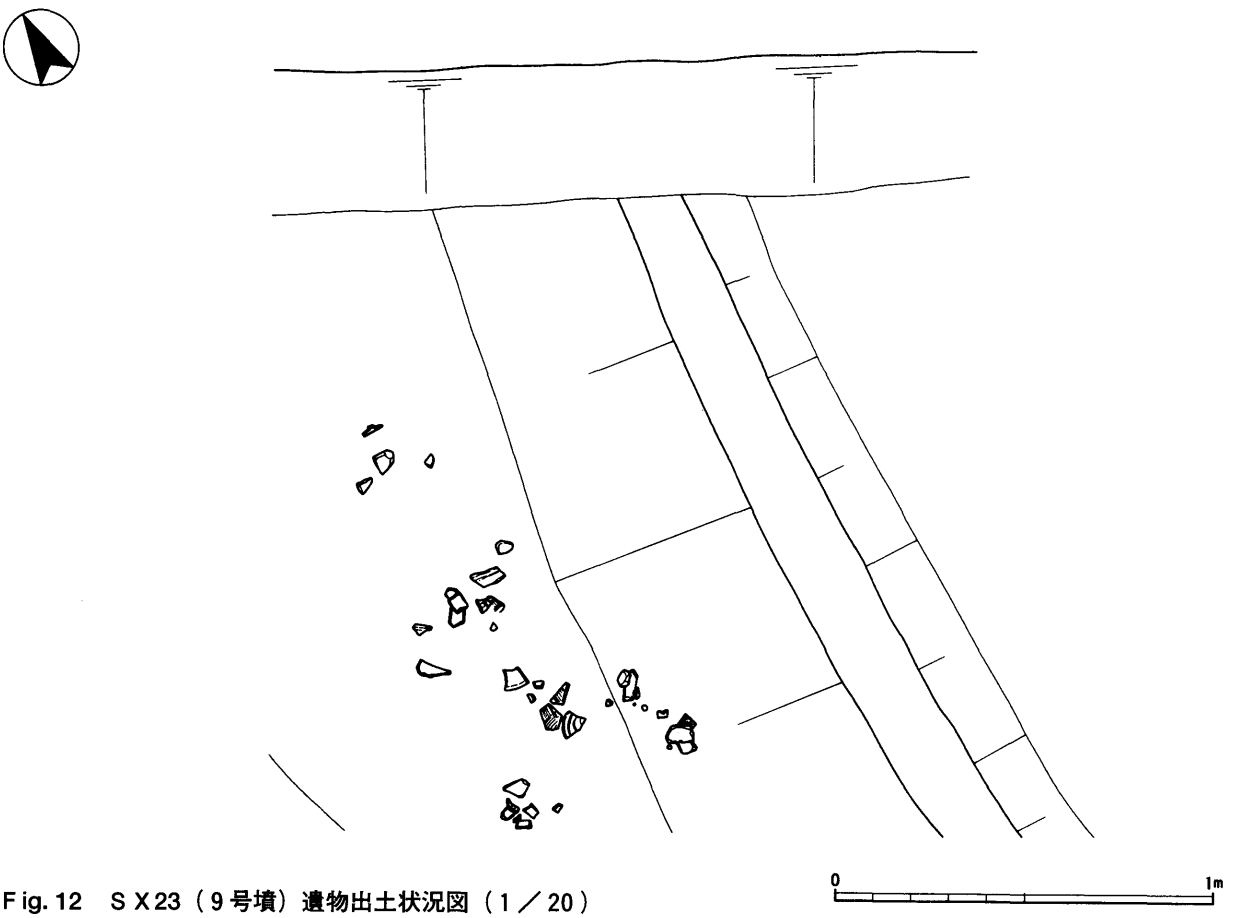


Fig. 12　SX23（9号墳）遺物出土状況図（1／20）

全に破壊されている。

墳丘の規模は、基底で南北約10mを測る。残丘は、南北9.2m、高さは最も深い溝底から約0.5mを残す。周濠を含めた規模は、南北12.2mを測る。南側周濠は、幅約1.5m、深さ約0.4mを測る。西側周濠は、幅約1.8m、深さ約0.5mを測る。北側周濠は、幅約1.4m、深さ約0.4mを測る。

埋葬施設およびその痕跡は、まったくみられず完全に破壊されている。墳丘の方位は10・12号墳と揃えられており西側周濠基底で、真北を指している。

出土遺物は周濠埋土上層から弥生時代前期の壺、甕を含んでいるが、古墳造営を明確にする遺物はない。

ＳＸ11　調査区北側９・10・11号墳によって囲まれた三角状に残されたところに位置する土壙墓である。東西約0.9m、南北約2.6mの南側がやや広がる隅丸長方形の墓壙である。埋土は、黒色砂質土である。

内部からは、木棺痕跡を確認できなかった。また、

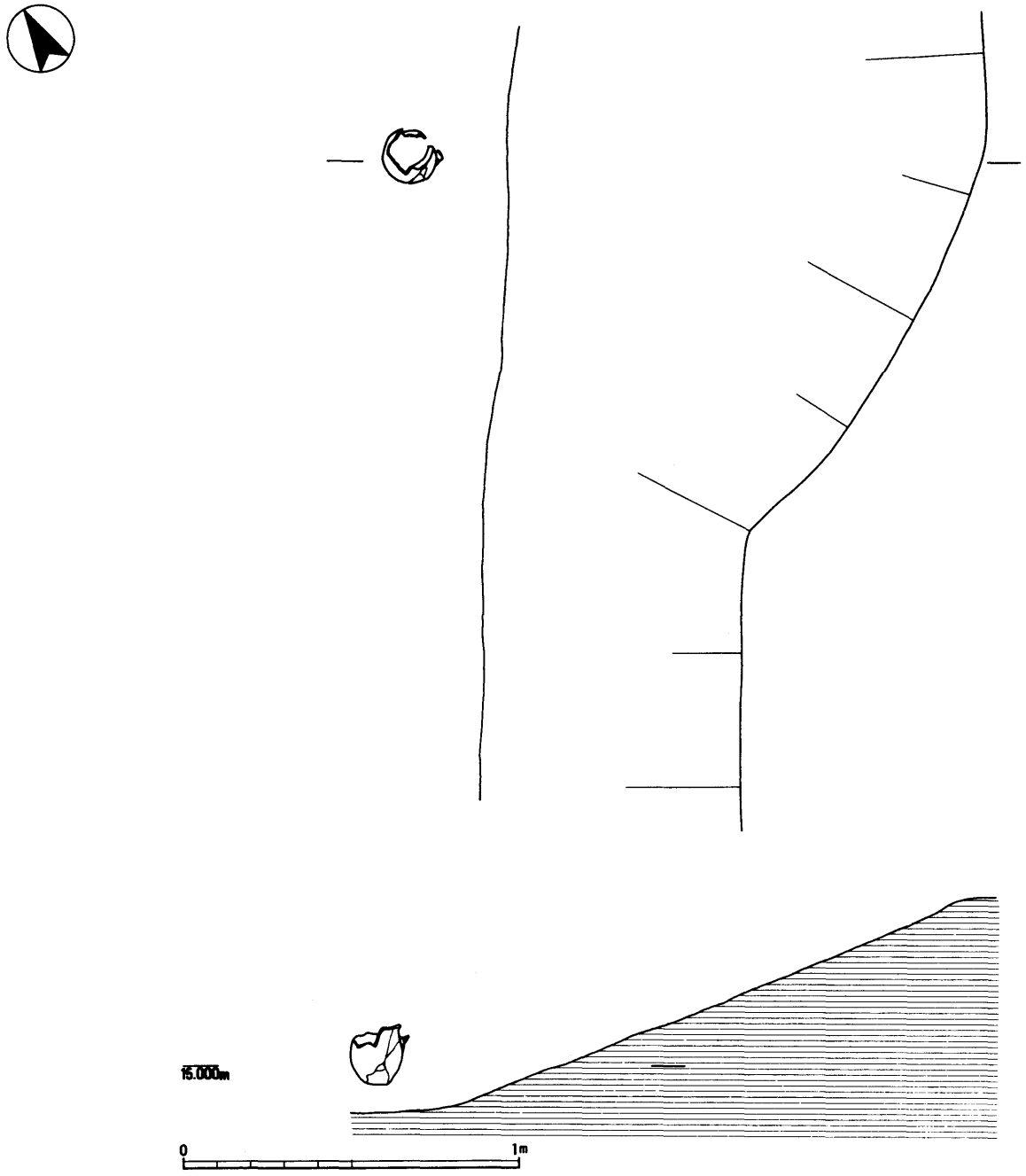
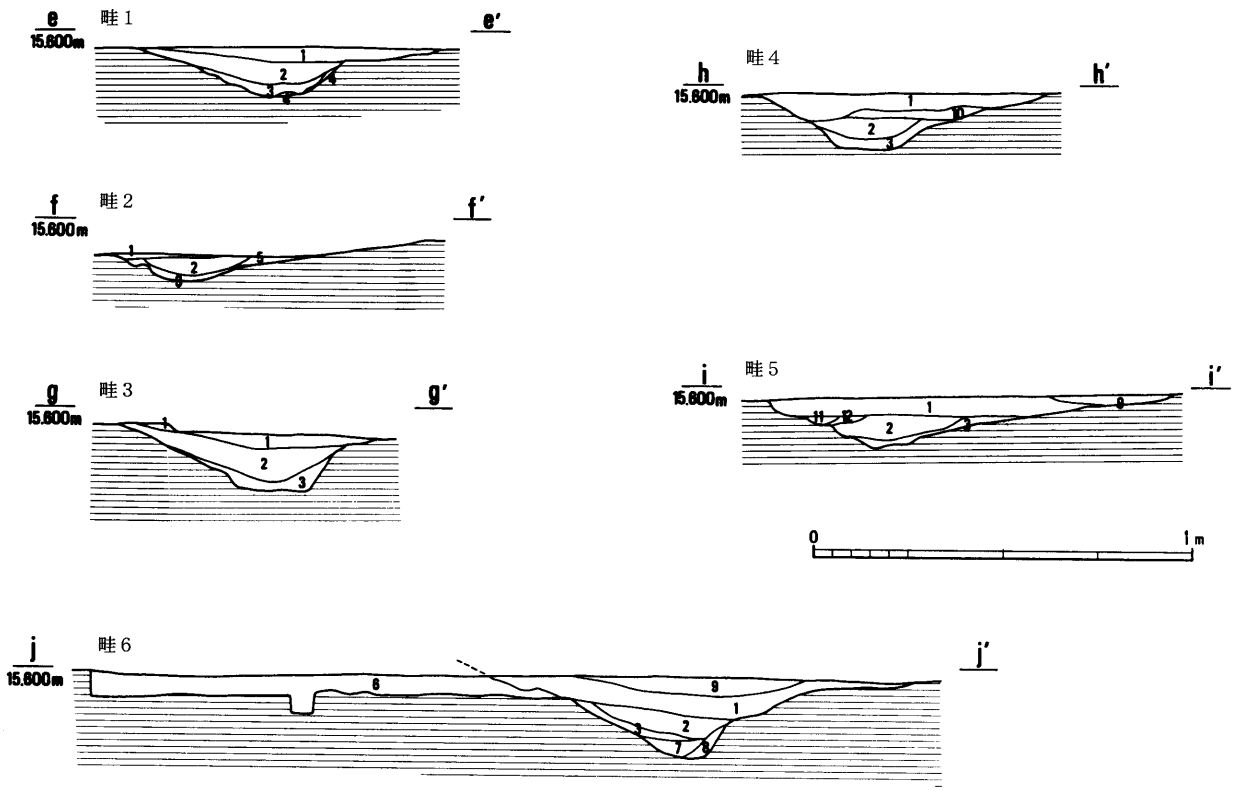
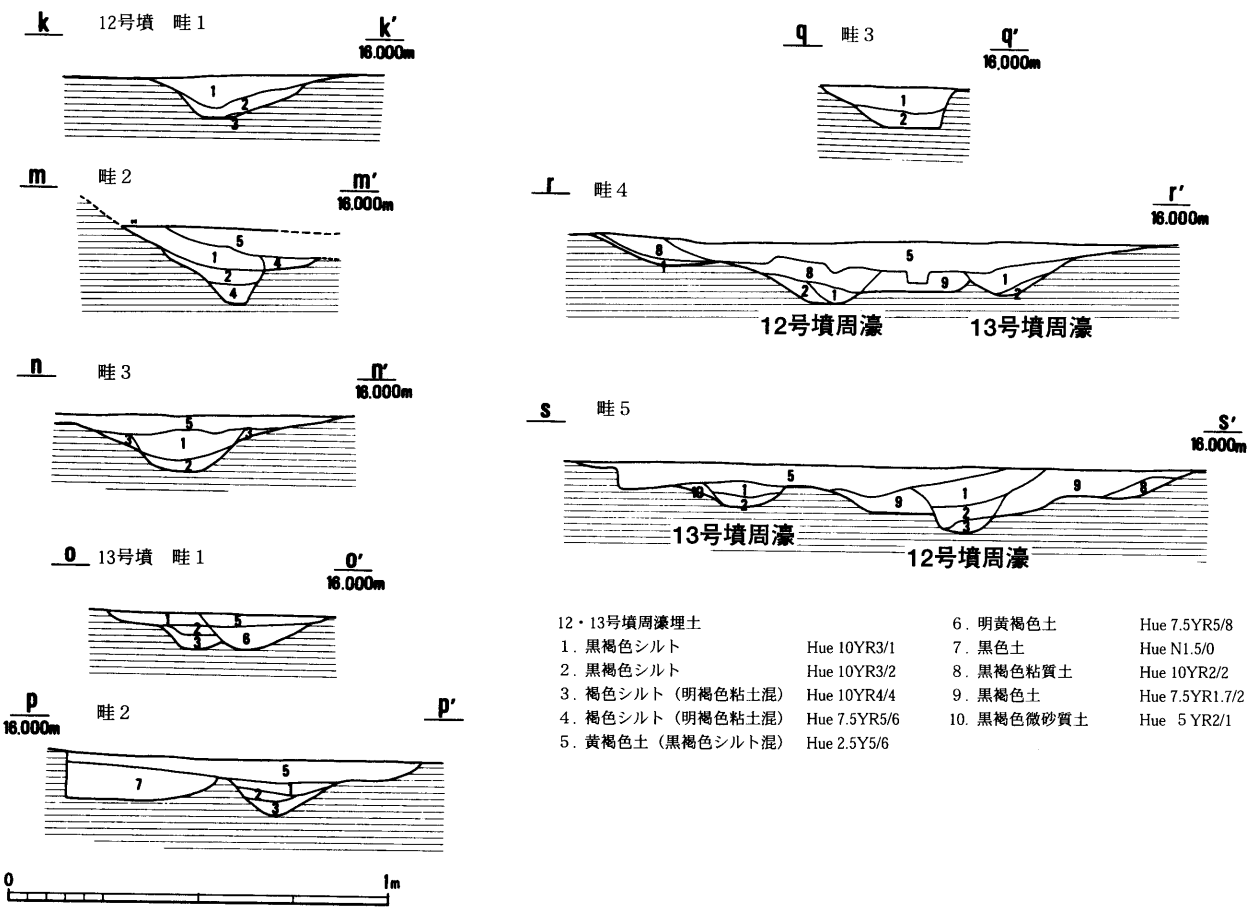


Fig. 13　12号墳　遺物出土状況図（１／20）



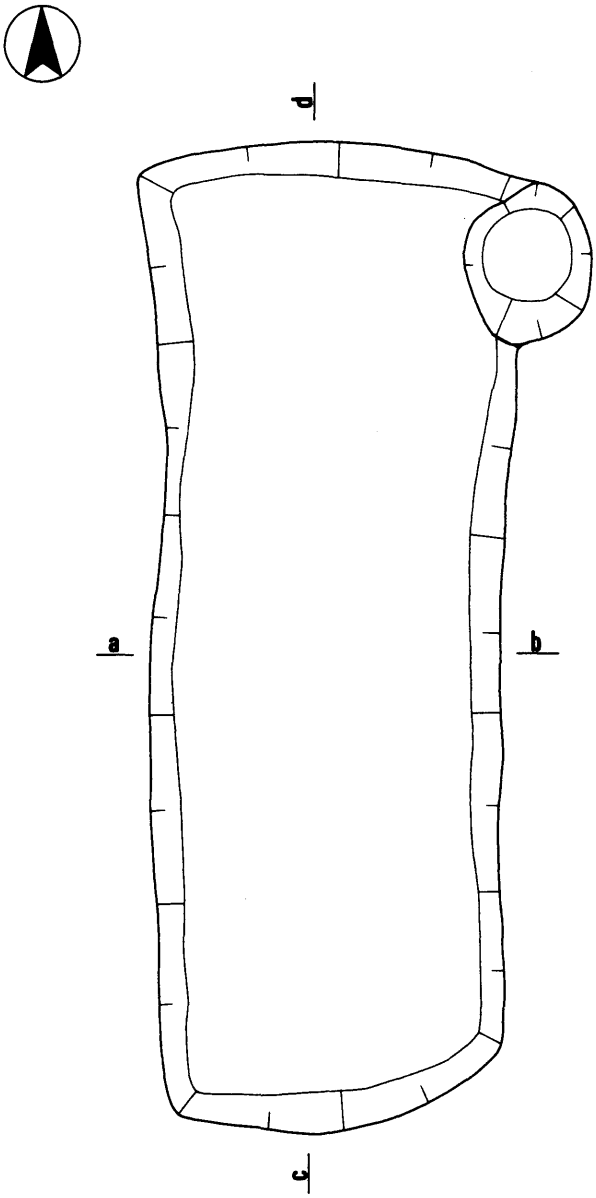
1．明黄褐色土（黒色土混）	Hue 10YR6/8	5．黄橙色土	Hue 10YR7/8	9．黒褐色土（明黄褐色土混）	Hue 7.5YR1.7/1
2．黒色土	Hue 7.5YR2/1	6．黒褐色土	Hue 7.5YR3/1	10．黒褐色土（黄褐色砂質土混）	Hue 2.5Y3/1
3．黒褐色砂質土	Hue 7.5YR3/1	7．黒褐色土	Hue 7.5YR3/2	11．明赤褐色粘質土	Hue 2.5YR5/8
4．明黄褐色粘質土	Hue 10YR6/8	8．極暗褐色砂質土	Hue 7.5YR2/3	12．明赤褐色土	Hue 5YR5/8

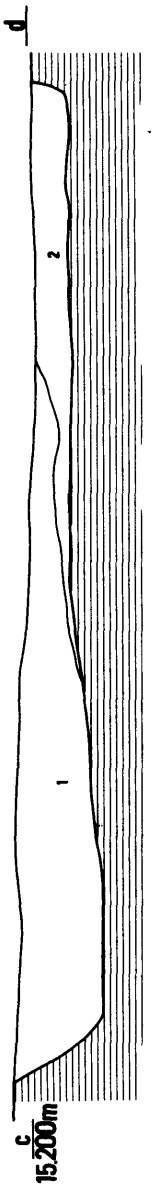
Fig. 14 11号墳　断面図（1／80）



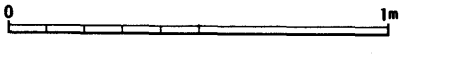
12・13号墳周濠埋土		6．明黄褐色土	Hue 7.5YR5/8
1．黒褐色シルト	Hue 10YR3/1	7．黒色土	Hue N1.5/0
2．黒褐色シルト	Hue 10YR3/2	8．黒褐色粘質土	Hue 10YR2/2
3．褐色シルト（明褐色粘土混）	Hue 10YR4/4	9．黒褐色土	Hue 7.5YR1.7/2
4．褐色シルト（明褐色粘土混）	Hue 7.5YR5/6	10．黒褐色微砂質土	Hue 5YR2/1
5．黄褐色土（黒褐色シルト混）	Hue 2.5Y5/6		

Fig. 15　12号・13号墳　断面図（1／80）





1．黒色砂質土　Hue 10YR1.7/2
2．黒色砂質土　Hue 10YR2/1



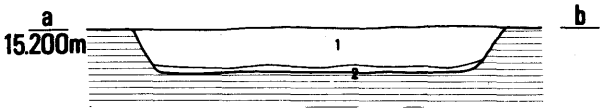
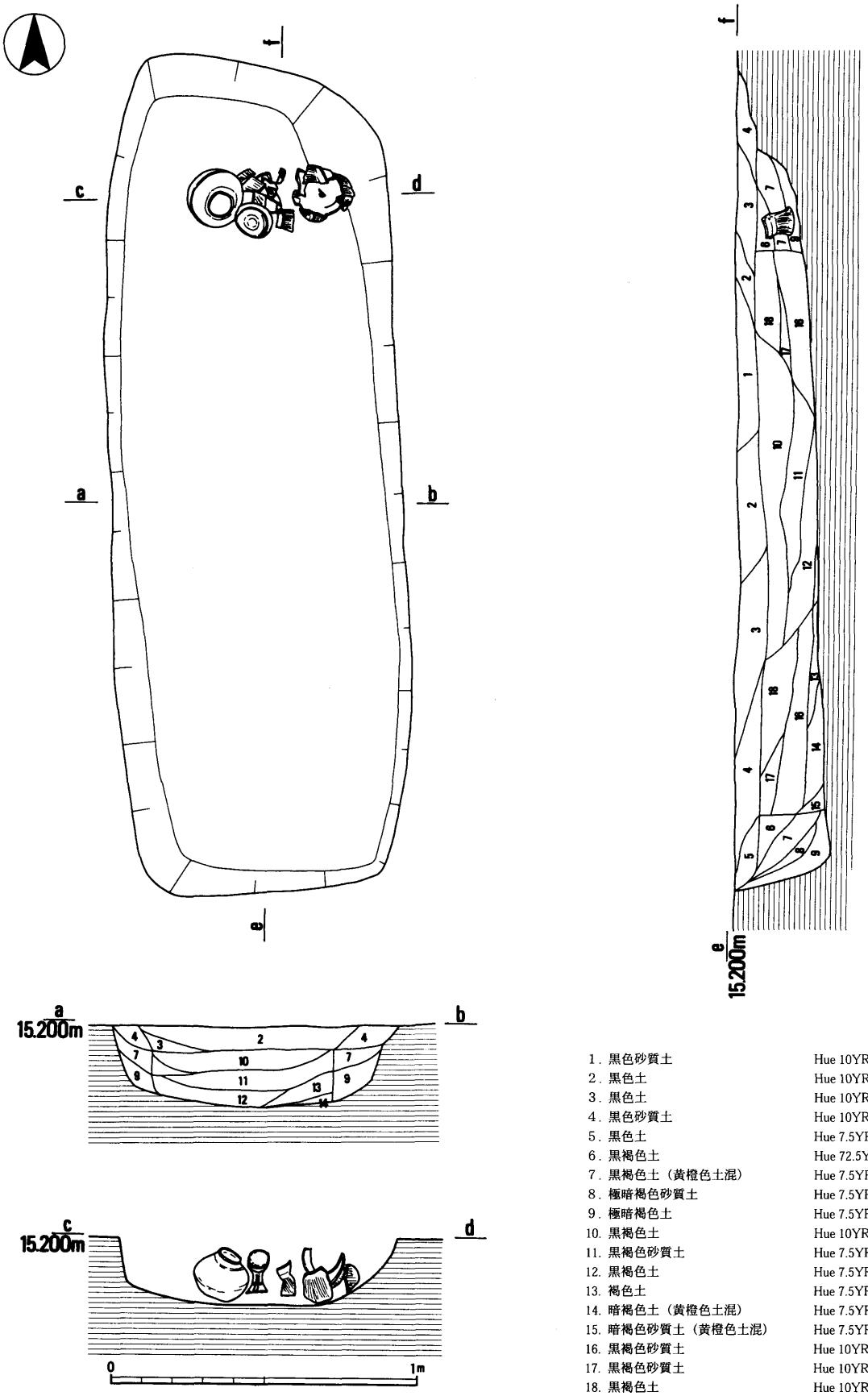


Fig. 16　ＳＸ11平面・断面図（１／２０）



1．黒色砂質土	Hue 10YR2/1
2．黒色土	Hue 10YR2/1
3．黒色土	Hue 10YR1.7/1
4．黒色砂質土	Hue 10YR1.7/1
5．黒色土	Hue 7.5YR2/1
6．黒褐色土	Hue 72.5YR2/1
7．黒褐色土（黄橙色土混）	Hue 7.5YR2/1
8．極暗褐色砂質土	Hue 7.5YR2/1
9．極暗褐色土	Hue 7.5YR2/3
10. 黒褐色土	Hue 10YR2/2
11. 黒褐色砂質土	Hue 7.5YR2/2
12. 黒褐色土	Hue 7.5YR2/2
13. 褐色土	Hue 7.5YR4/6
14. 暗褐色土（黄橙色土混）	Hue 7.5YR3/3
15. 暗褐色砂質土（黄橙色土混）	Hue 7.5YR3/3
16. 黒褐色砂質土	Hue 10YR2/2
17. 黒褐色砂質土	Hue 10YR2/3
18. 黒褐色土	Hue 10YR2/3

Fig. 17　ＳＸ24平面・断面・立面図（１／２０）

副葬品に相当するものは見られず、土壙墓と断定はできない。出土遺物には、時期を明確にするものはない。ただ表土掘削時にこの土壙墓そばから耳鐶が出土しており、副葬品とも考えられる。

ＳＸ24　ＳＸ11のほぼ南側に隣接するように位置する木棺墓である。東西約１ｍ、南北約2.7mの隅丸長方形の墓壙である。深さは北側で約0.2m、南側で約0.3mを測り、北側が深い。埋土は、ＳＸ11と似ている。内部からは、長さ約1.85m、幅約0.6mの木棺痕跡を確認できた。木棺痕跡は、断面形が垂直に立ち上がるため、組み合わせ木棺と考えられる。また、副葬品は、墓壙北側から土師器甕２点、須恵器高杯１点、須恵器短頸壺１点が出土している。頭位は、真北を指している。　（萩原義彦）

Tab. 1　遺構一覧表

遺構番号	小地区	性格	時期	備考	遺構番号	小地区	性格	時期	備考
ＳＨ1	Ｂ６他	竪穴住居	弥生	Fig. 7	欠番				
欠番					Ｐ34	Ａ７	柱穴	時期不明	
欠番					Ｐ35	Ａ７	柱穴	時期不明	
ＳＫ4	Ｂ６	土坑	時期不明	長辺1.5m、短辺0.6m、深さ約0.2m	ＳＫ36	Ａ７他	土坑	時期不明	
欠番					欠番				
ＳＤ6	Ｃ４他	溝	近代	開墾溝	ＳＤ38	Ｃ９他	12号墳周溝	古墳	Fig. 4
ＳＤ7	Ｅ４他	溝	弥生	幅 1.1～2.5m、深さ 0.3～0.6m	Ｐ39	Ｅ７	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
Ｐ8	Ｅ４	柱穴	近代	ＳＤ23上面に存在	Ｐ40	Ｅ８	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
Ｐ9	Ｅ５	柱穴	近代	ＳＤ23上面に存在	Ｐ41	Ｅ８	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
Ｐ10	Ｅ５	柱穴	近代	ＳＤ23上面に存在	Ｐ42	Ｅ８	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
ＳＸ11	Ｄ５他	土壙墓	時期不明	Fig. 16	Ｐ43	Ｅ８	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
Ｐ12	Ｃ５	柱穴	近代		Ｐ44	Ｅ８	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
ＳＤ13	Ｃ５	10号墳周溝	古墳	Fig. 4	Ｐ45	Ｅ９	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
Ｐ14	Ｄ５	柱穴	時期不明		Ｐ46	Ｅ９	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
ＳＫ15	Ｅ５	土坑	近代	ＳＤ23上面に存在	Ｐ47	Ｄ９	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
ＳＫ16	Ｅ４	土坑	近代	ＳＤ23上面に存在	Ｐ48	Ｅ９	柱穴	弥生	ＳＨ2・Fig. 8
ＳＫ17	Ｅ４	土坑	近代	ＳＤ23上面に存在	ＳＤ49	Ｅ12他	13号墳周溝	古墳	Fig. 4
ＳＤ18				ＳＤ23と同一	ＳＤ50	Ｅ12他	溝	近代	開墾溝
Ｐ19	Ｅ５	柱穴	近代	ＳＤ23上面に存在	ＳＤ51	Ｅ11他	溝	近代	開墾溝
Ｐ20	Ｅ５	柱穴	近代		ＳＤ52	Ｅ11他	溝	近代	開墾溝
ＳＫ21	Ｂ５	土坑	弥生	幅0.8m、深さ0.6m	Ｐ53	Ｅ12	柱穴	時期不明	
ＳＫ22	Ｅ６	土坑	時期不明		Ｐ54	Ｅ12	柱穴	時期不明	
ＳＤ23	Ｅ５	9号墳周溝	古墳	Fig. 4	Ｐ55	Ｃ11	柱穴	時期不明	
ＳＸ24	Ｄ５	木棺墓	古墳	Fig. 17	ＳＤ56	Ｂ11	溝	近代	開墾溝
ＳＤ25	Ｂ５	溝	近代	開墾溝	ＳＫ57	Ｅ11	土坑	弥生	Fig. 9
Ｐ26	Ｄ６	柱穴	時期不明		ＳＫ58	Ｂ９	土坑	時期不明	
ＳＫ27	Ｄ５	土坑	時期不明		ＳＤ59	Ａ10他	溝	近代	開墾溝
ＳＤ28	Ｄ７他	11号墳周溝	古墳	Fig. 4	Ｐ60	Ｃ11	柱穴	時期不明	
Ｐ29	Ａ５	柱穴	弥生	ＳＨ1・Fig. 7	Ｐ61	Ｅ９	柱穴	時期不明	
Ｐ30	Ａ６	柱穴	弥生	ＳＨ1・Fig. 7	ＳＫ62	Ｄ９	土坑	弥生？	
Ｐ31	Ａ６	柱穴	弥生	ＳＨ1・Fig. 7	Ｐ63	Ｄ12	柱穴	時期不明	
Ｐ32	Ｂ６	柱穴	時期不明		ＳＫ64	Ｄ13	土坑	時期不明	

Ⅳ 遺 物

今回の調査によって出土した遺物は、コンテナ箱にして約50箱である。時代順にみて弥生時代前期及び古墳時代後期の土器に２分される。量においては、弥生時代前期の土器が圧倒的に多い。しかしながら、それらは、古墳時代の遺構に混入している。土器以外では、石製品と金属製品が僅かながら出土している。遺物は、遺構別によって記述する。なお石製品や金属製品は、性質によって区分し、記述している。個々の詳細については、遺物観察表を参照されたい。

１　弥生時代

Ａ　ＳＨ１出土遺物

１は、甑である。１は、体部がやや張り出すタイプであり、内傾接合によって成形されている。体部は、内外面ともに斜方向のハケ調整が施されている。口縁部は、短く外反し、丸くなでて仕上げられている。体部内面の中程までは炭化物が部分的に付着しており、外面中程には煤が付着している。底部は、焼成後に穿孔されている。２は、壺の底部とみられる。

Ｂ　Ｐ45・46出土遺物

４は、中形の鉢である。口縁部は、強く外反している。

Ｃ　ＳＫ21出土遺物

５は、外面がハケメ調整されており甕の底部であろう。

Ｄ　Ｅ８区周辺（包含層）出土遺物

Ｅ８区周辺からの出土の土器には、壺（３・７・11～14・16・17・20)、壺蓋（６・９)、鉢？（10)、甕（５・15～19・21・24)、ミニチュア土器（25)、紡錘車（26）などがある。

壺には、比較的残存状況のよい３・13の他、口縁端部界に鋭い沈線、口頸部界に貼り付け凸帯を巡らせる16、口縁部内面に貼り付け凸帯を巡らせる20、貼り付け凸帯上に刻む11・14、沈線で区画した間に竹管状の刺突を巡らせる17、口縁端部に沈線と刻目を巡らせる７、口縁部外面にヘラ描き沈線を巡らせる12がある。３は、口頸部界・頸胴部界を削り出していないが、押圧で凹凸を付け、ヘラミガキの方向を変えることで変化をつけている。13は、口頸部界を削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせて区画している。口縁端部にも沈線を巡らせている。

６は、孔が焼成前に中央部に穿たれており、孔を挟んで２箇所に突起をもつ。

甕には、無文の24、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らせる15・22、頸胴部界と口縁部内面にヘラ描き沈線と口縁端部に刻目を巡らせる18、頸胴部界に半截竹管による沈線を巡らせる21、壁面をハケメ調整した上で頸胴部に半截竹管による沈線を口縁端部に刻目を巡らせる23がある。

底部片には、壺と予想される19がある。

25は、指オサエで整形されている。

Ｅ８区周辺には、ＳＨ２に本来所属していたと考えられる遺物が含まれると予想されることから、細片も合わせて検討した。その結果、ＳＨ２から出土した13や残存状況のよい３は、細片より古い様相を示している。よって、ＳＨ２の存続期間を表しているのは３・13であり、前期中段階[1]に相当すると考えられる。

Ｅ　ＳＫ57出土遺物

ＳＫ57からは、壺（27～30)、甕（31～36)、鉢(37)、加工円盤（38）がある。

壺には、口頸部界に削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせる27、ヘラ描き沈線を巡らせる28・29の他、底部片30がある。27は、頸胴部にも口頸部界同様に削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせている。また、口縁部には対角線上の２箇所に１個づつ焼成前に孔が穿たれている。30は、内外面ともにヘラミガキされている。

甕には、段をなす31とヘラ描き沈線を施す32・33とヘラ描き沈線を伴わない35などがある。31は、成形段階から段を形成しており、口縁部内外面と体部外面にはハケ調整が施されている。また、体部外面には、煤が付着している。32は、口縁端部とヘラ描き沈線２条の間に刻目が施されている。体部内外面には、荒いハケメが見られる。35の外面には、縦方

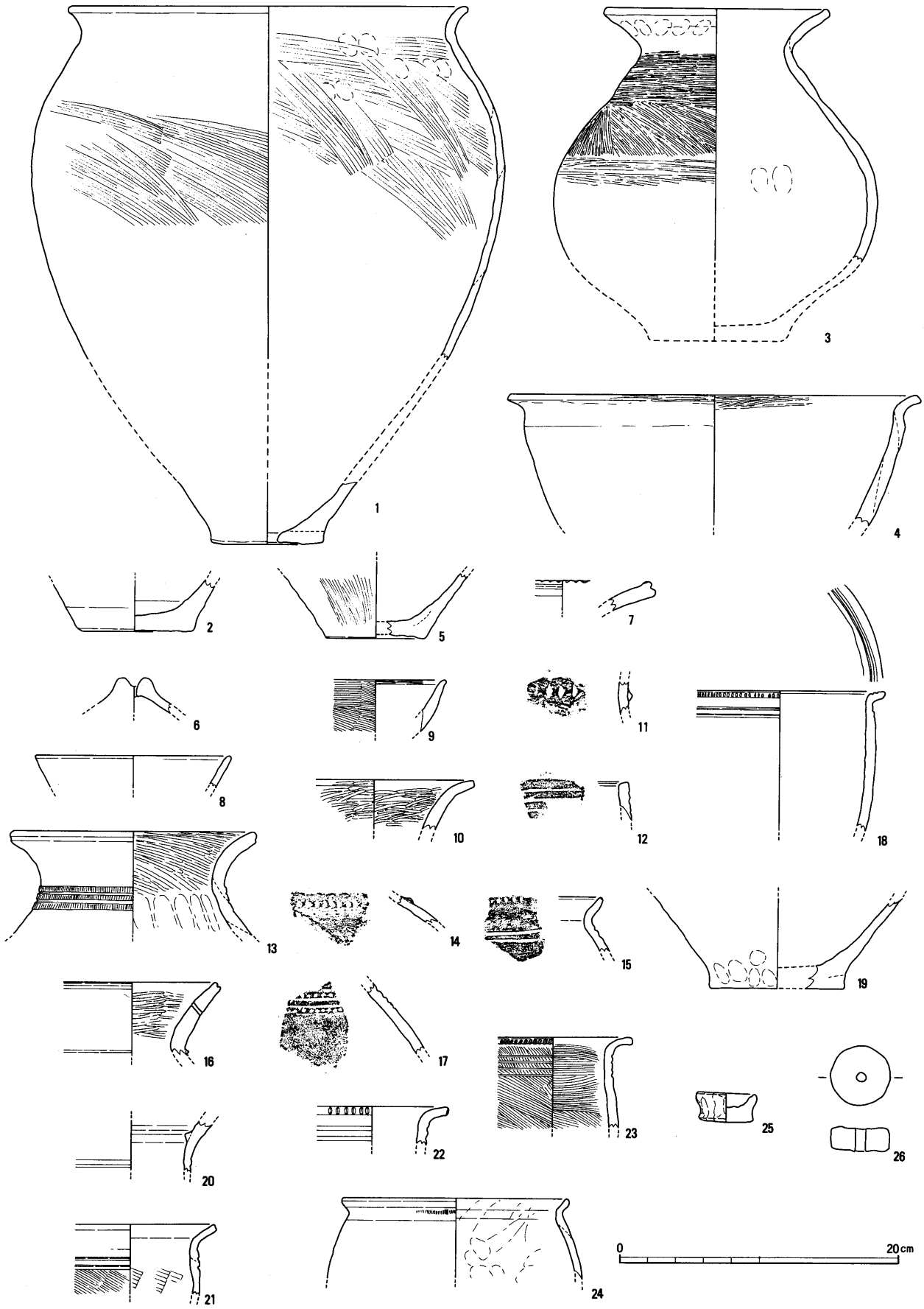


Fig. 18　出土遺物実測図

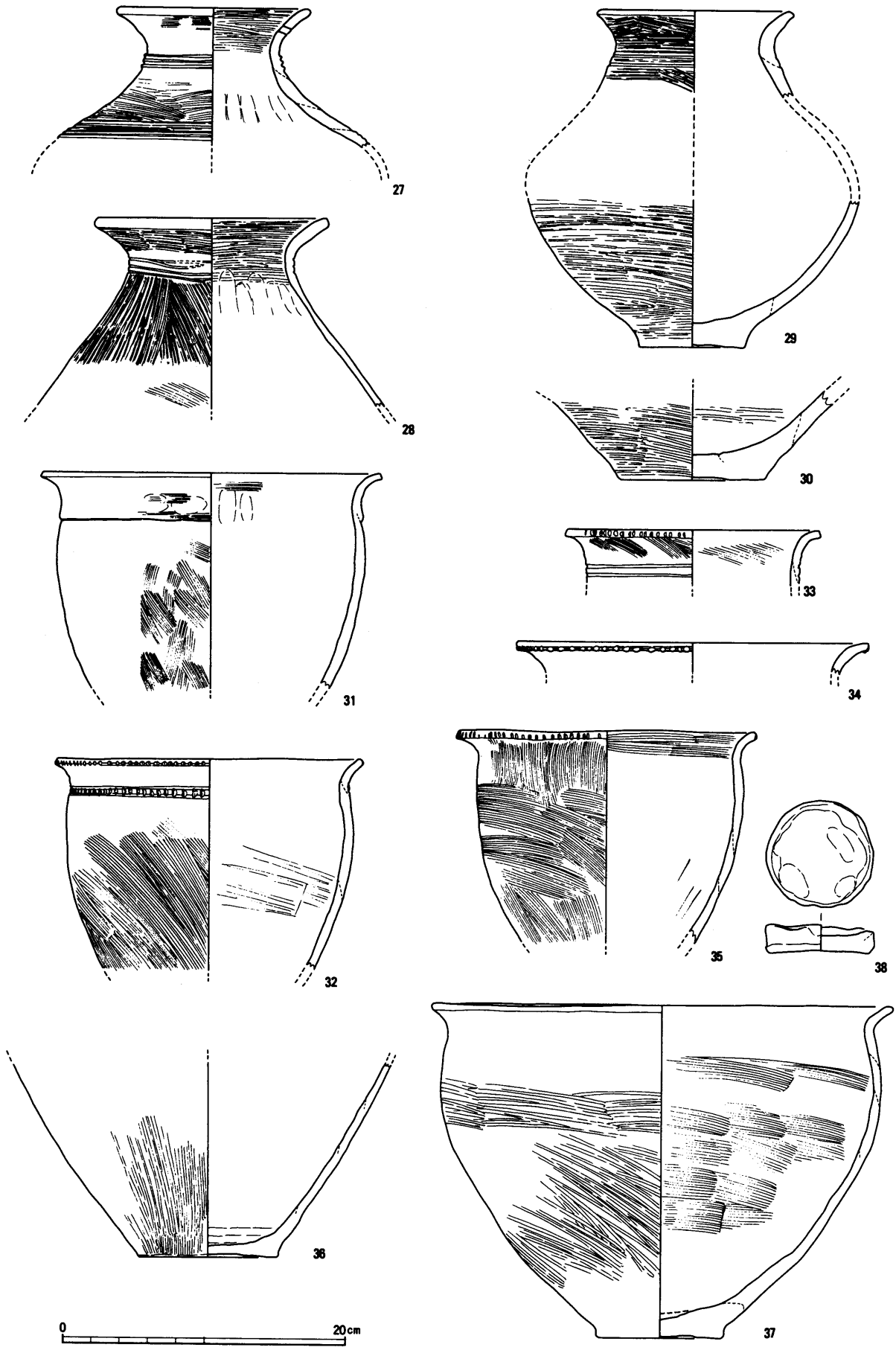


Fig. 19　出土遺物実測図

向のハケ調整が施されている。体部内面は、ハケ調整後なで消されているが、口縁部は横方向のハケメが残っている。口縁端部には、刻目が施されている。体部外面には煤が付着している。36は甕形を呈するが、外面・底部だけでなく内面もヘラミガキで仕上げられている。２次焼成により劣化しており、内面には炭化物が付着している。33は、内外面ともにハケ調整後なでられている。口縁端部には、刻目が施されている。34は、口縁端部のやや下がった位置に押圧が施されている。外面には、煤が付着している。

37は、大形の鉢である。底部付近面の剥離が著しい。

38は、加工円盤である。甕の底部を転用している。

時期的には、壺に削り出し凸帯が見られたり、鉢が存在すること、甕に半截竹管文が施文されるものがないことから前期中段階[2]に相当すると考えられる。

（川崎志乃）

２　古墳時代

周濠から出土遺物は、大きく２区分される。遺物は、周濠埋土（下層）からのものと古墳の封土を削平後整地土層（上層）からのものにわかれる。

Ａ　10号墳出土遺物

39～53は、10号墳の周濠から出土したものである。

39は、土師器高杯である。原形を損なう程、風化している。40は、土師器杯身である。底部から口縁にかけては、緩やかに屈曲し、口縁部付近で外側に外反する。底部は、ユビオサエによって緻密に調整されている。

41・42は、須恵器杯蓋である。41は、天井部から緩やかに傘状に開き、口縁部と天井部の境の稜は、丸く突出している。口縁部は垂直に降下し、端部はやや鋭角に内向している。陶邑田辺編年[3]のＭＴ15並行とみられる。42は、天井部が欠損し、口縁部は、やや強く傾斜して開く、端部は尖り気味にまとまる。陶邑田辺編年のＴＫ209並行とみられる。

43～45は、須恵器杯身である。43・44は、底部から受口部にかけて緩やかに開き、受口部で内側に彎曲する。45は、底部が平らに調整され、やや急傾斜で開く、口縁部は、やや内側に彎曲している。43～45は、陶邑田辺編年のＴＫ209並行とみられる。

46・48は、朝顔形埴輪である。46は緩やかに外上方に伸び、端部においてやや外反する。口縁端部は、外方向に向かって上下にやや開き気味の断面Ｍ字形を呈する。タガは、台形状を呈する。

48は、口縁部・胴部は欠損している。頸部は、口縁部にかけてやや急に外上方に開く。タガは、断面三角形を呈する。基底部は内側に折り込まれている。

47・49～52は、円筒埴輪である。47は、基底部から胴部にかけて第３段目まで残る。第２段目に円形の透孔がある。外面は、縦方向のハケによって調整され、内面は、指頭圧で調整後縦方向に指ナデをしている。タガは、第１タガ・第２タガ共に断面台形状を呈している。底部には、粘土巻き付けの痕跡が残っている。

50は、須恵質円筒埴輪である。基底部から胴部第２段目まであり、２段目に円形の透孔の一部が残る。外面は、第１段目・第２段目共に縦方向のハケによって調整されている。内面は、左上方向に指ナデが成されている。底部は、粘土巻き上げの痕跡が残る。第１タガは、断面Ｍ字形を呈する。

51は、基底部から第２段目まで残る。外面は、縦方向のハケによって調整されている。内面は指頭圧によって調整された後、ナデ、横方向のハケによって成形されている。第１タガは、断面台形を呈している。底部には粘土巻き上げの痕跡が残る。52も50・51と同様である。内面は、横方向のハケによって調整されている。底部は内側に肥厚する。これら円筒埴輪は、川西編年の第Ｖ期[4]とみられる。

53は加工円盤である。ほぼ円形を呈しており3.8㎝×4.0㎝である。重量は、10.9ｇである。

Ｂ　９号墳出土遺物

126～131・143～150は、９号墳の周濠から出土したものである。

126～128は、須恵器杯蓋である。126・127は、天井部に宝珠つまみがあり、緩やかに傘状に開いている。かえりの部分は、緩やかに内彎するか、垂下している。128は、天井部が欠損している。天井部から体部にかけては、緩やかに開きながら口縁部付近で内側に屈曲する。口縁端部は、やや尖り気味にまとまる。田辺編年のＴＫ209並行とみられる。

129は、杯身である。ＴＫ217並行とみられる。

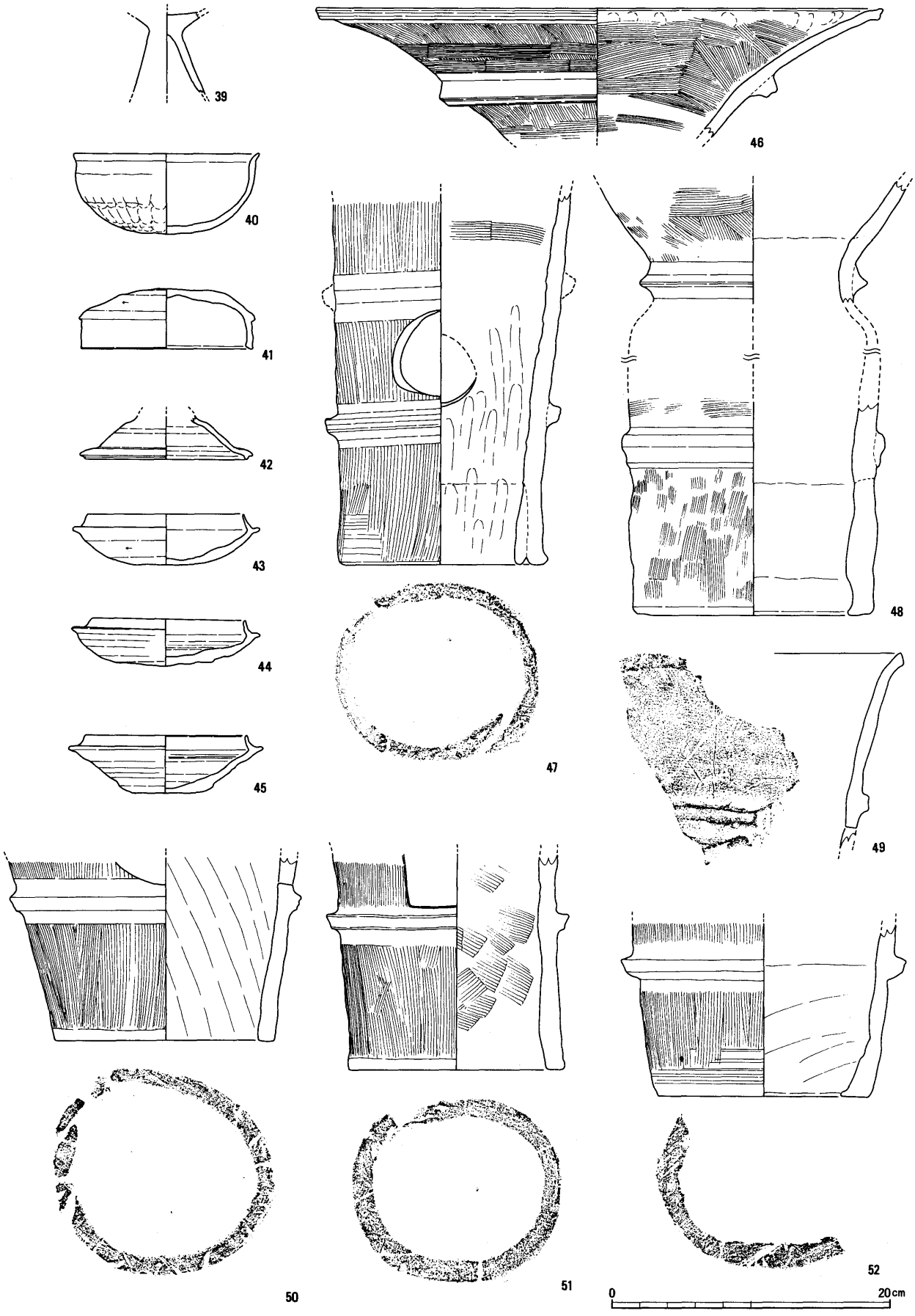


Fig. 20　出土遺物実測図

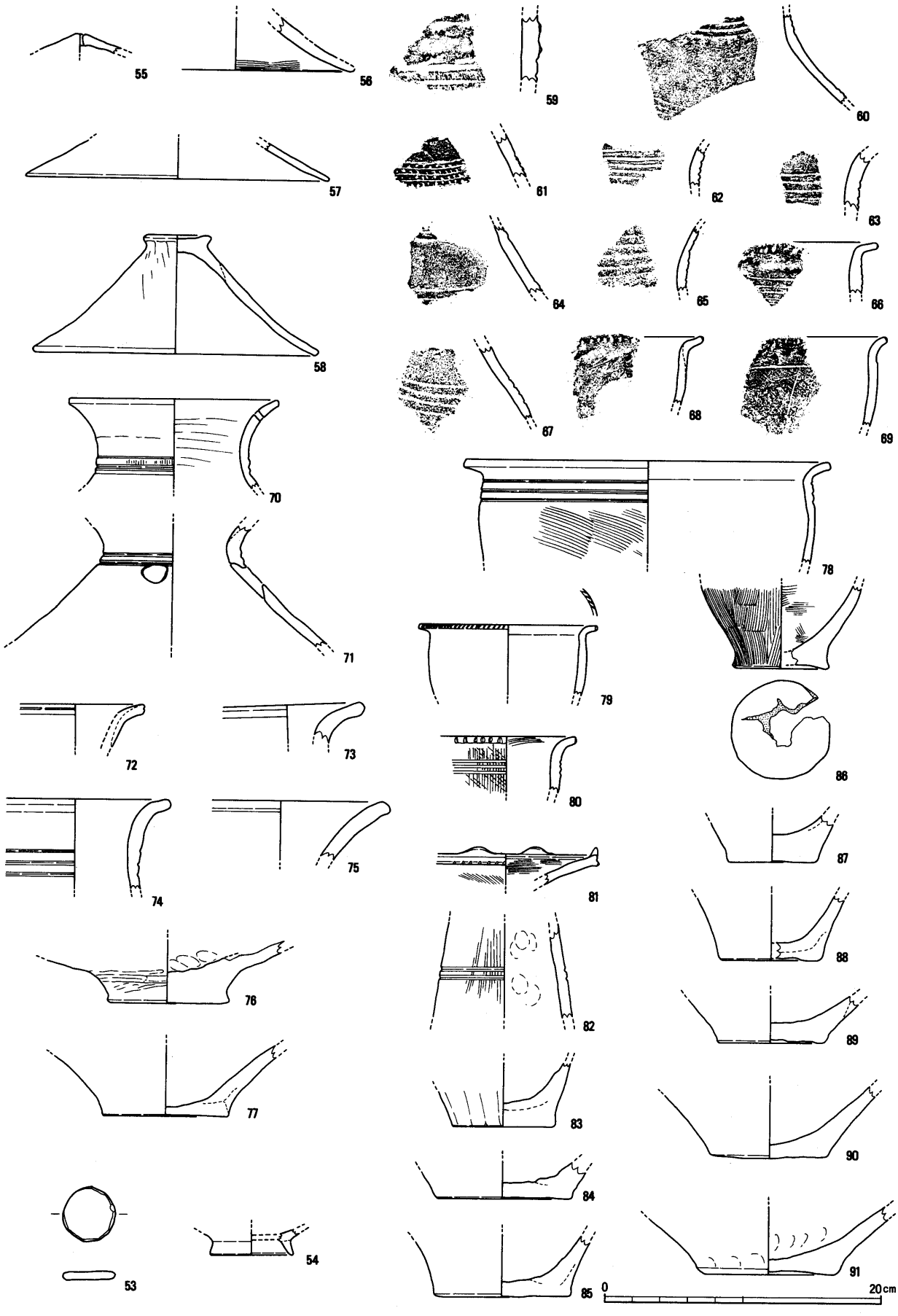


Fig. 21 出土遺物実測図

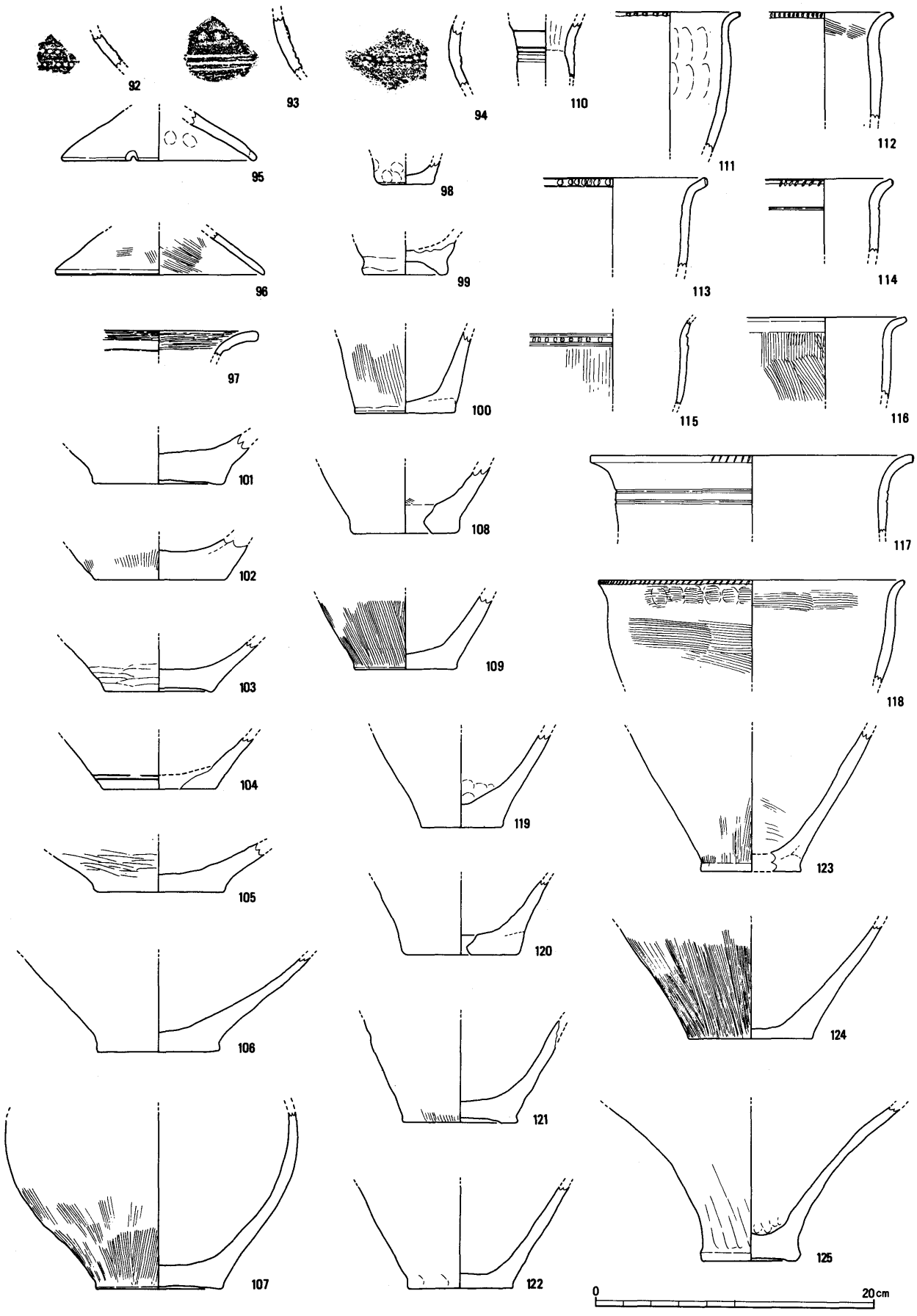


Fig. 22 出土遺物実測図

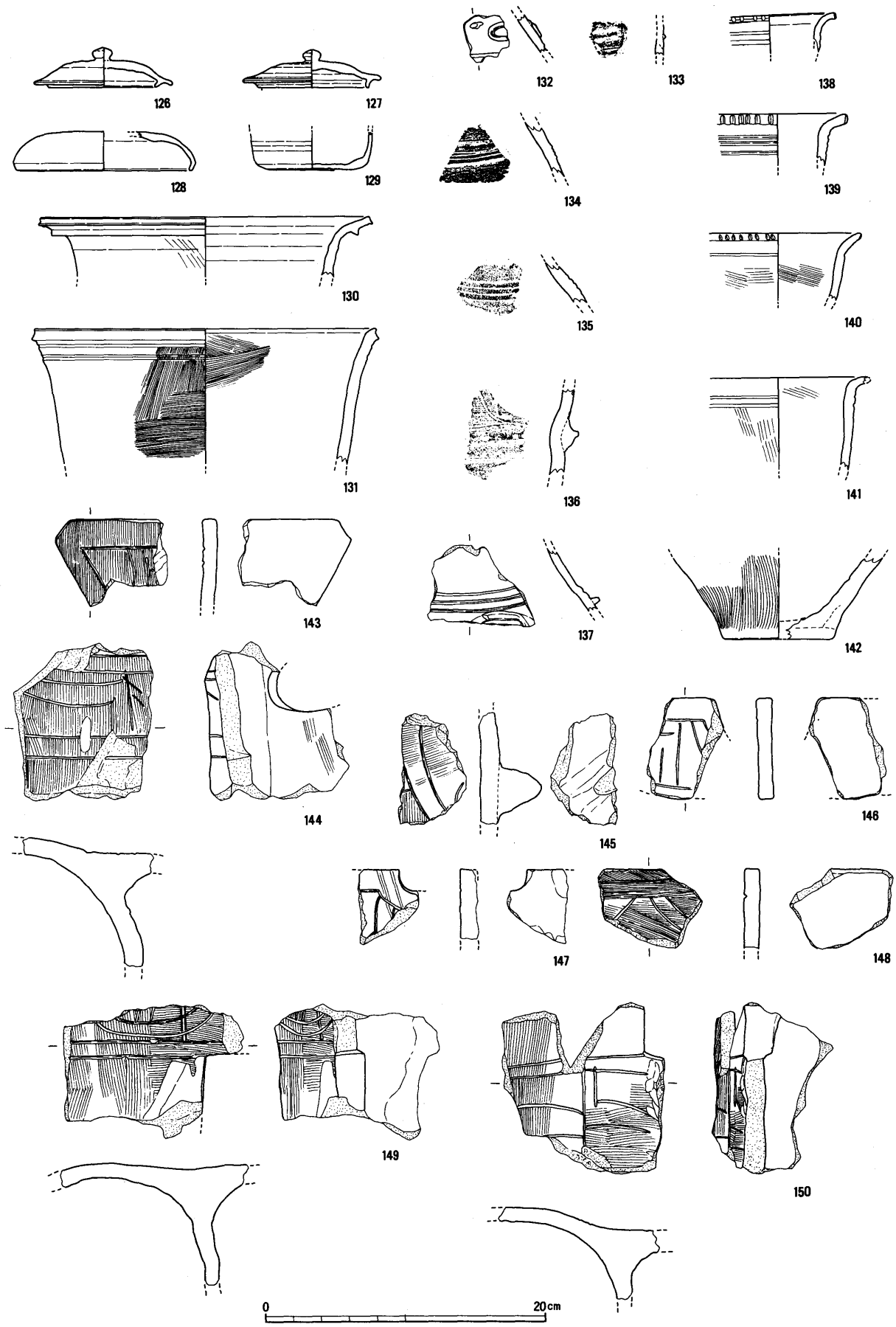


Fig. 23　出土遺物実測図

130は、須恵器広口甕である。頸部から口縁部は、緩やかに屈曲し、外反する。口縁部で斜め下方に断面三角形の張り出す部分を持ち、外見上強い稜線の様に見える。

131は、円筒埴輪の口縁部最上段である。口縁端部は外方に屈曲し、凹状に面を持っている。口縁端部直下には、沈線が2条巡っている。川西編年の第V期とみられる。

143～150は、形象埴輪である。遺物の観察状況から盾形埴輪の破片と考えられる。143は、盾の上端部とみられる。144・149・150は、円筒部分と盾部分の接合とみられ、144には、円形の透孔がある。

146～148は、盾部分の側辺とみられる。石見型盾の可能性もある。

C　11号墳出土遺物

151～155は、12号墳の周濠から出土したものである。151は、土師器杯である。口縁部は、やや内側に彎曲し、口縁端部は、丸くまとまる。

152は、土師器杯である。体部から口縁部にかけて丸くまとまり、口縁端部は、やや外反して尖り気味にまとまる。

153は、土師器甕である。底部は平底で、体部は「く」の字の逆に、外側に張り出す様にまとまる。頸部から口縁部にかけては、「く」の字状に外反し、口縁端部は、丸くまとまる。この甕は、三重県下において初出のものである。器形的に見て、若干の相違があるものの関東地方における鬼高式[6]の土師器甕に非常に似ている。また、愛知県豊橋市の白石遺跡[7]出土の甕とも器形的に非常によく似ており、時期的な差があるものの関連性が考えられる。

154は、土師器甕である。口縁端部は、面を持つ様にまとめられている。破片が小さい為に口径は約20cm前後と考えられる。

155は、陶器椀（山茶椀）である。尾張型第7型式[8]とみられる。山茶椀が周濠に混入していることから中世においても周濠が存在していたことを示しているとみられる。

D　13号墳出土遺物

210は、土師器杯である。体部から口縁部にかけて緩やかに丸く傾斜し、口縁部において外反する。口縁端部は、尖る様にまとめている。

E　SX24（木棺墓）出土遺物

248～252は木棺直葬とみられるSX24出土のものである。248・249は、土師器甕であり、頸部をくの字状に外反させ、口縁端部ををつまみ上げ、端部外面に面を持たせている。体部は、共に全体的に球形を呈している。

250は、須恵器短頸壺である。底部から頸部付近にかけて球形を呈し、頸部において緩やかに「く」の字状に外反し、上方に伸びる。口縁端部は、尖り気味にまとまる。

251は須恵器無蓋高杯である。傘状に開きながら、上方に屈曲する。杯部では、多段に渡って稜を持つ。口縁端部は尖り気味にまとまる。脚部の接地面は尖り気味であり、外方向にも同様に尖り気味である。脚部に2段の透孔が穿たれているが、上段の透孔は切り込みいれた状況で止められている。田辺編年のTK43並行とみられる。　（萩原義彦）

3　古墳周濠混入遺物

A　10号墳混入遺物

59～91は上層出土であり、92～125は下層から出土している。

弥生土器は、壺（59～74・81・82）、壺蓋（55）、甕（78～80）、甕蓋（56～58）、甑（86）がある。

70は、口頸部界を削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせて区画している。口縁部には、対角線上の2箇所に焼成前に孔が穿たれている。71は、口頸部界にヘラ描き沈線を巡らせている。頸部には焼成後穿孔されている。

この他は細片が多い。口頸部界・頸胴部を削り出した上にヘラ描き沈線を巡らせる60・64、口頸部にヘラ描き沈線を巡らせる74、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせる67、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせた間に中実の刺突を施す61、頸部にヘラ描きを巡らせる62・63・65、口縁端部に沈線と刻目を巡らせ、部分的に粘土を付加して突起を造る81、ヘラ描き沈線を巡らせるが形状不明な82がある。59は、貼り付け凸帯上に指押さえによる押圧が巡る。ヘラ描き沈線2条の間には、ハケメが残る。大形壺の頸部と考えられる。

55は、中央に孔が穿たれている。

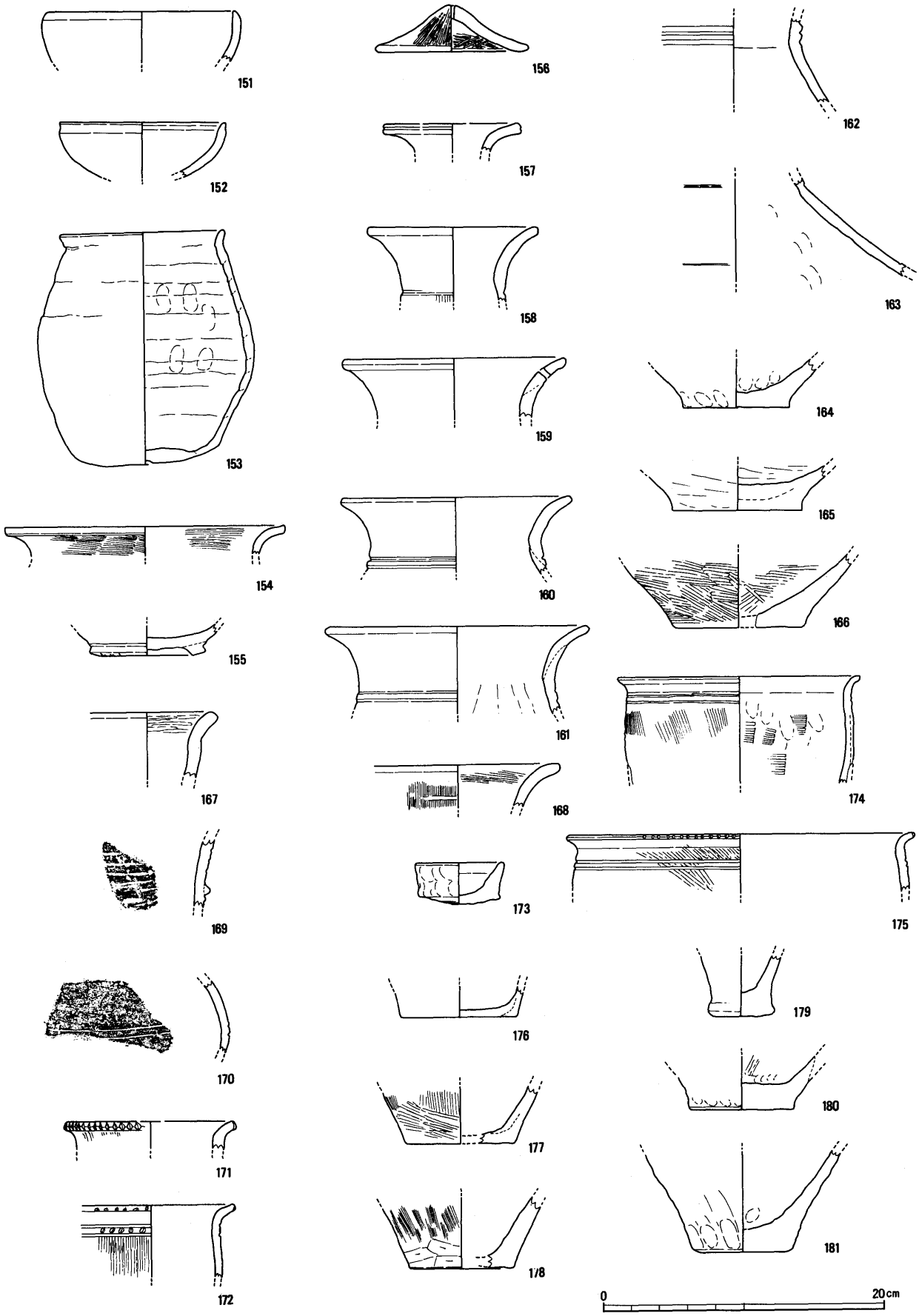


Fig. 24 出土遺物実測図

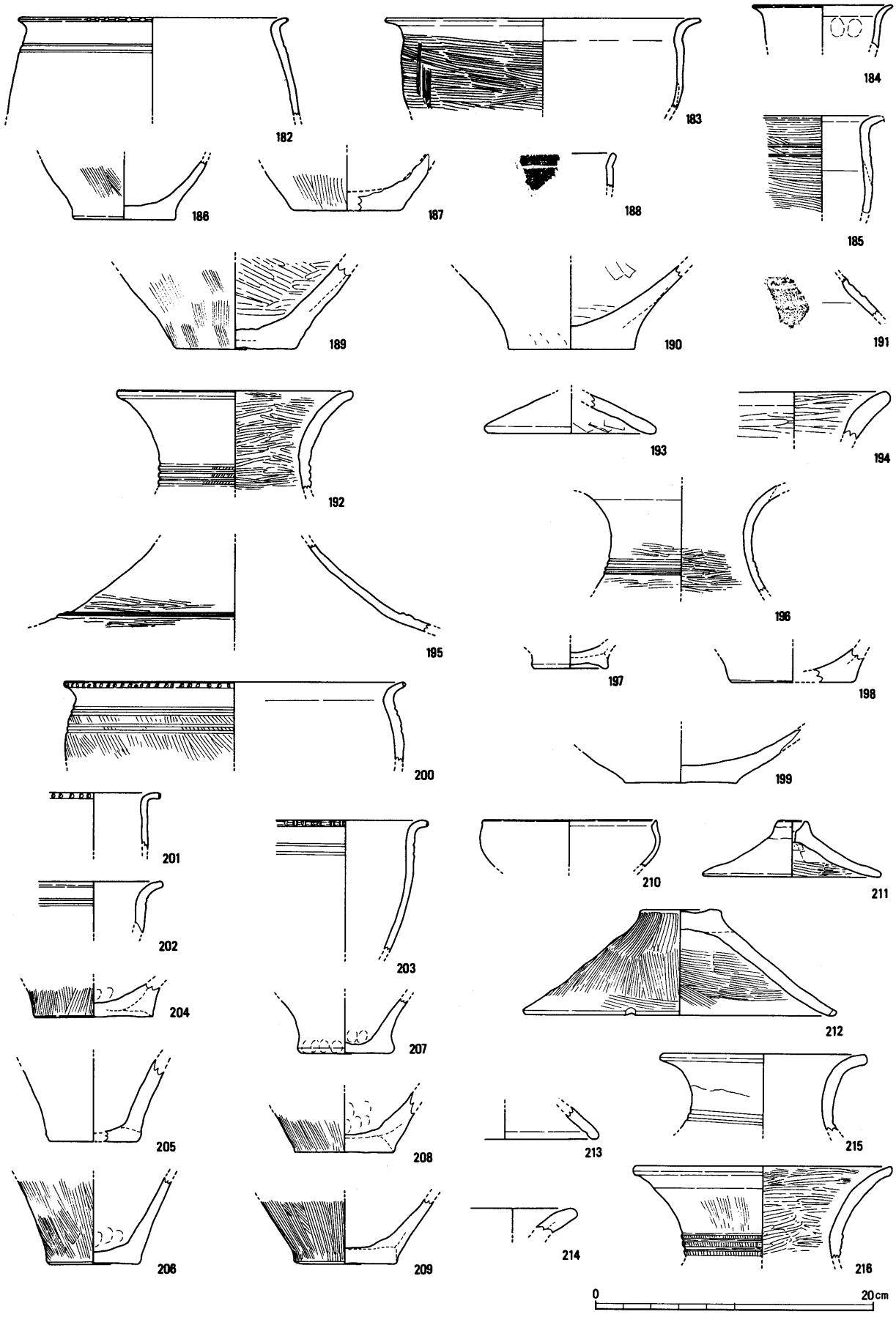


Fig. 25 出土遺物実測図

56・57は。58と同様の形状を呈するものとみられる。56は、口縁部に近い内面に炭化物が付着している。

甕には、無文で口縁端部に刻目を巡らす68・79、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に刻目を巡らせる66・69、外面をハケメ調整後頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせる78、外面をハケメ調整後頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らせる80がある。86は、底部に焼成後穿孔されている。

底部片には、甕と予想される83～85・88や鉢と予想される91などがある。

下層の弥生土器には、壺（92～94・97・107）、壺蓋（95）、甕（111～118）、甕蓋（96）、甑（108・120）、ミニチュア土器（109）などがある。細片が多いものの、量的にはまとまっている。

97は、口頸部界に成形段階から段を形成している。横方向のヘラミガキで仕上げられている。92は、削り出し凸帯上にヘラ描き沈線で区画し、中実の刺突を巡らせている。94は、削り出し凸帯上に中実の刺突を巡らせている。93は、貼り付け凸帯上に指押さえによる押圧を、その下方には半截竹管による沈線を巡らせている。

95は、口縁端部に焼成後、切れ目が入れられている。

甕には、無文で口縁端部に刻目を巡らせる111・113、口縁端部に押圧を巡らせ、口縁部内面にハケメを残す112、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らせる114・117、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせて区画し、その間に押圧を施している115、外面をハケメ調整する116、外面をハケメ調整し、口縁端部に押圧を巡らせる118がある。

125は、器形から縄文土器深鉢の系譜を引く器種の底部と考えられる。胎土は粗い。

108・120は、底部を焼成後穿孔している。

109は、くびれ部にヘラ描き沈線を巡らせる。くびれ部の下方内面には、しぼり痕が残っている。

底部片には、壺（103・104・106・107・119・121～124）、鉢（105）、甕（99・100・102・110）、ミニチュア土器（98）と予想されるものがある。104は、底部近くにヘラ描き沈線を巡らせる。

B　9号墳混入遺物

弥生土器には、壺（132・134～135・137）、甕（138～142）などがある。

134・135は、削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせている。132は、ヘラ描き沈線を巡らせ、区画した上方に粘土を貼り付けている。137は、削り出し凸帯上にヘラ描き沈線を巡らせて区画した下方に粘土を貼り付けている。132・137の2点は粘土紐を貼り付けることで、文様を付けているものと思われる。この特徴を持つ土器は、伊勢湾沿岸地域を中心に分布することが知られている。

138～140は、頸胴部界にヘラ描き沈線を口縁端部に押圧を巡らせている。140は、外面をハケメ調整している。141は、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせ、外面と口縁部内面をハケメ調整している。142は、甕の底部と予想される。

C　11号墳混入遺物

弥生土器には、壺（157～163・169・170）、壺蓋（156）、鉢（167・168）、甕（171・172・174・175）、ミニチュア土器（173）などがある。

壺には、口頸部界を削り出す158・161・163、口頸部界を削り出した上にヘラ描き沈線を巡らせる162、口頸部界にヘラ描き沈線を巡らせる160、口縁端部にヘラ描き沈線を巡らせる157、口縁部に孔を穿つ159、体部にヘラ描き沈線を巡らせる170の他に、頸部にヘラ描き沈線と貼り付け凸帯を巡らせている169がある。168は、ハケメ調整後ヘラミガキがみられるが、壺であろうか。

156は、中央に焼成前に孔が穿たれている。外面には、中央付近から口縁部に向かって、2本の線刻が刻まれている。

167は、口縁部が強く外反しており、ヘラミガキが見られる。

甕には、無文の171、外面をハケメ調整する171・174・175がある。171は、口縁端部に刻目を巡らせている。172は、頸胴部界をヘラ描き沈線で区画し、その間と口縁端部に押圧を巡らせている。

174は、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせている。

175は、頸胴部界に半截竹管を、口縁端部に刻目を巡らせている。

173は、鉢形の形態をなすが、安定感はない。

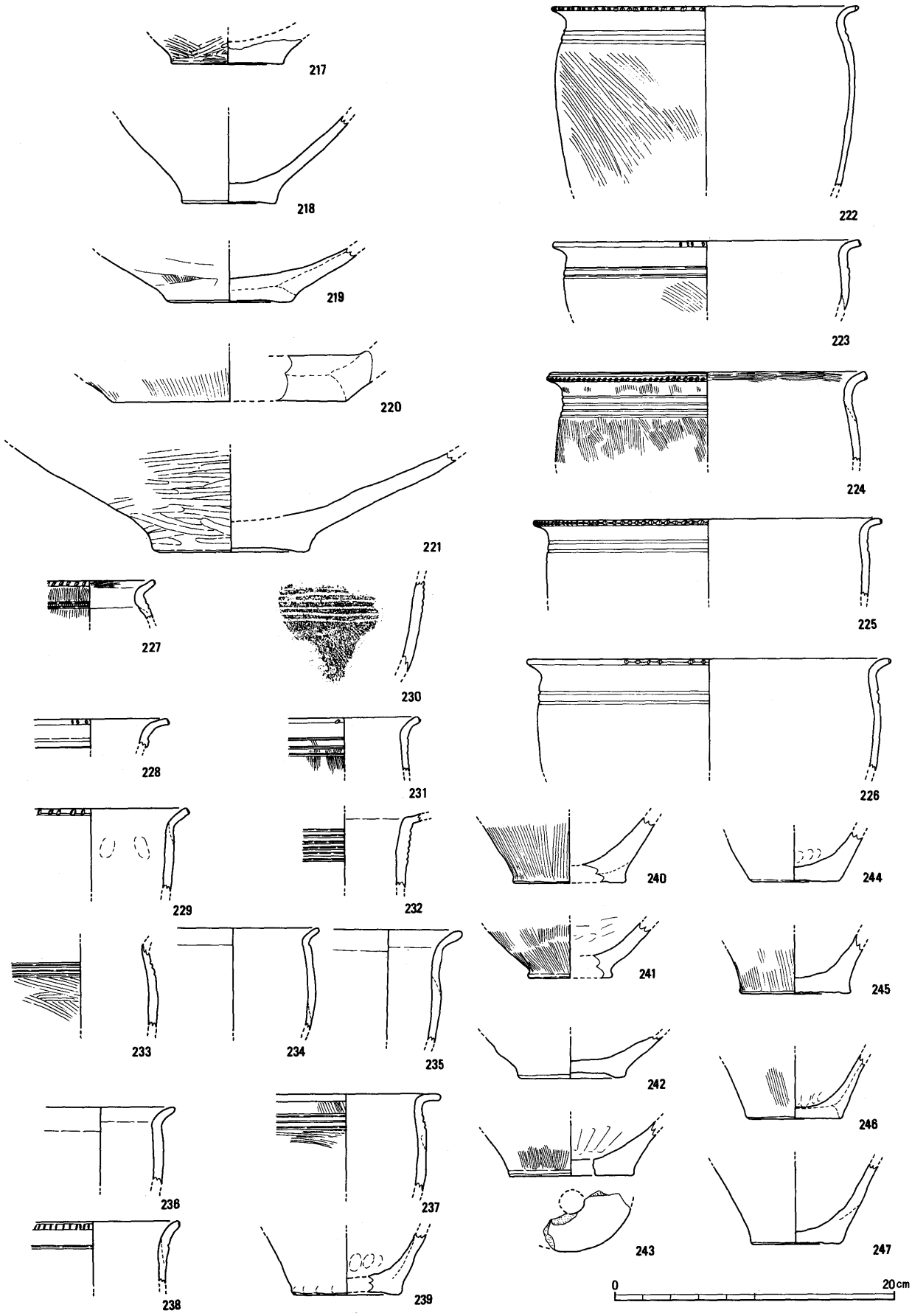


Fig. 26 出土遺物実測図

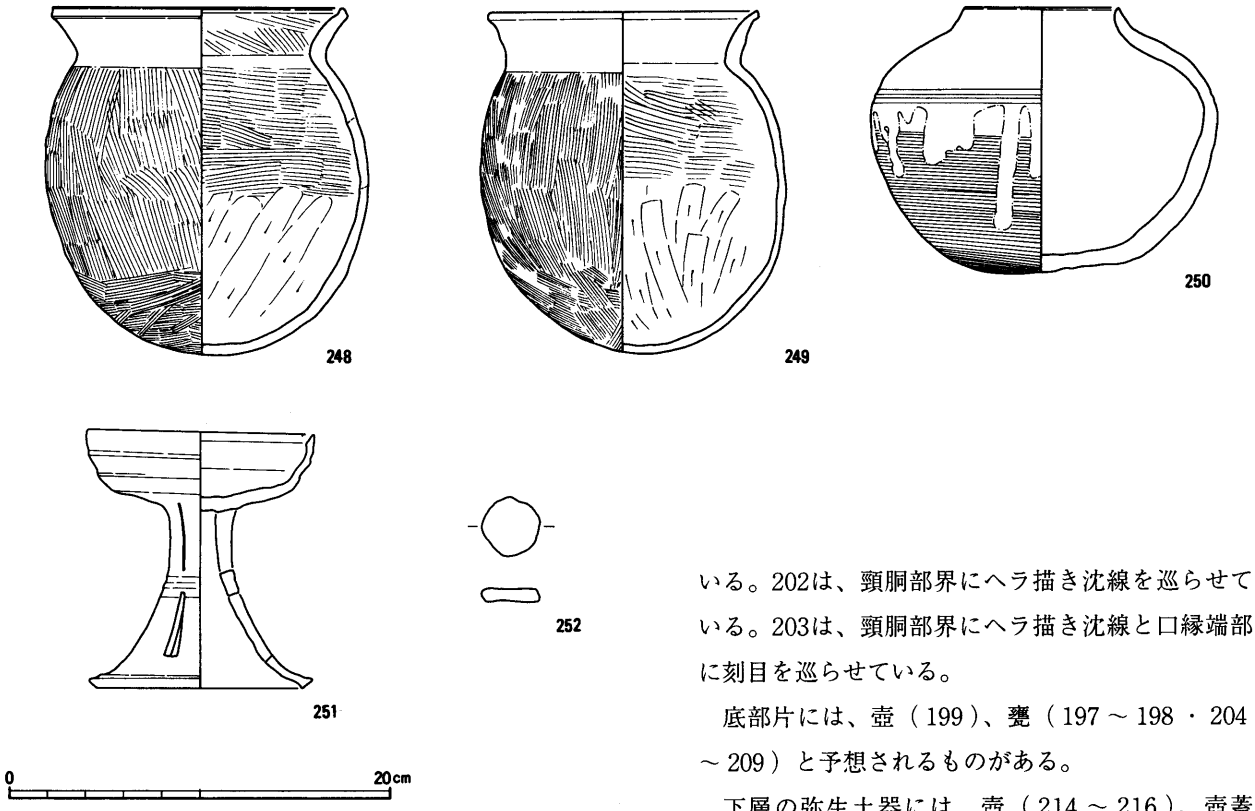


Fig. 27 出土遺物実測図

底部には、壺（164～166・177・180）、甕（176・178・181）と予想されるものなどがある。179は125と同様に縄文時代深鉢の系譜を引くものであろうか。

D　12号墳混入遺物

弥生土器には、壺（191）、甕（182～185・188）などがある。

191は、頸胴部界を削り出している。

甕には、無文の182・184・188と外面をハケメ調整する183・185がある。183のハケメは、他の個体よりも単位が短い。185・188は、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせている。182は、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らせている。

底部片には、壺（189・190）、甕（186・187）と予想されるものがある。

E　13号墳混入遺物

弥生土器には、壺（192・194～196）、壺蓋（193）、甕（200～209）などがある。

192・195・196は、口頸部界を削り出した上にヘラ描き沈線を巡らせている。194は壺であろうか。

甕には、無文の201～203と外面をハケメ調整する200がある。201は、口縁端部に刻目を巡らせている。202は、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせている。203は、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に刻目を巡らせている。

底部片には、壺（199）、甕（197～198・204～209）と予想されるものがある。

下層の弥生土器には、壺（214～216）、壺蓋（211・213）、甕（222～238）、甕蓋（212）、甑（243）がある。

壺には、口頸部界にヘラ描き沈線を巡らせる215と削り出した上にヘラ描き沈線を巡らせる216がある。214は、壺とみられる。

211は、中央に焼成前に孔が穿たれている。孔の周囲には、環状に粘土が巡っており、突起の付くタイプ（例えば、6）と異なる。

甕には、無文のもの（225・226・228・229・232・234～236・238）と外面をハケメ調整されているもの（222～224・227・230～231・233・237）がある。229は、口縁端部に押圧を巡らせている。228は、頸胴部界を削り出した上にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らしている。238は、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らしている。225・226は、頸胴部界に半截竹管による沈線と口縁端部に押圧を巡らしている。224は、頸胴部界に2本づつ並行なヘラ描き沈線を巡らせている。口縁端部のやや下がった位置には、刻目を巡らせている。230は、頸胴部界に2本づつ並行なヘラ描き沈線を巡らせている。223は、頸胴部界にヘラ描き沈線と口縁端部に押圧を巡らせている。232・233・237は、頸胴部界にヘラ描き沈線を巡らせて

いる。222は、頸胴部界に半截竹管による沈線と口縁端部に押圧を巡らせている。

212は、口縁端部に焼成前に切れ目を入れている。

243は、底部を焼成後穿孔している。

底部片には、壺（217～220・242）、鉢（221）、甕（239～241・245～247）と予想されるものがある。（川崎志乃）

4　カクラン坑出土遺物

255～257は、カクラン坑からの出土である。

壺蓋（257）は摘みの付くタイプのものである。底部片（256・258）は甕と予想される。257は、土師器皿である。底部から口縁部に向かって緩やかに屈曲し、口縁端部は丸くまとまる。（萩原）

5　石器・金属製品

259（12号墳出土）は、安山岩の削器である。260（10号墳出土）は、尖頭器の未製品の可能性がある。265（12号墳出土）・268（12号墳出土）は、扁平片刃石斧である。265は、長さ4.3cm、幅2.87cmである。刃部は研磨されている。基部は欠損している。268は、長さ5.0cm、幅2.1cmである。刃部は研磨されている。

261（10号墳出土）・263（11号墳出土）・264（10号墳出土）は、太型蛤刃石斧である。

265は、刃部が欠けており不明である。263・264は、全面敲打した後に研磨されており、263も基部が欠損しており、残長13.0cmである。刃部は刃潰れがある。264は、中央部に敲打痕跡が残る。基部は欠損している。残長10.6cmである。

266は、頁岩製の石包丁と考えられる。欠損著しく全体の形は、不明である。長さ5.98cm、幅4.43cmである。

267は叩石（E9区包含層）である。持ち手とみられる部分は、窪みが作られている。先端部分は、敲打痕が残る。

269～275（269・10号墳出土、270・271・12号墳出土、272・11号墳出土、275・SK21出土）は、砥石である。269は、全面に砥面がある。270～273は、割れたもので砥面は1面である。274は、研ぎだし痕跡が2ヵ所ある。

276は、SK57出土のサヌカイト製石鏃である。先端部分は、欠損しており先端角度は不明である。長さ1.92cm、幅1.65cm、断面はレンズ形で小型のものである。

277（P41出土）は、投弾とも考えられる。直径約4.2～4.4cm、厚さ0.9cm、重さ0.9gである。

278は不明石製品である。

279は、銀鐶である。全体形はほぼ円形で鐶径は2.7～2.9cm、内径0.7～0.8cmで、断面はほぼ円形である。銅芯銀箔張りであるが、銹化が著しく一部は欠け、緑青が吹き出している。

280～283は金属製品である。280は、U字形の鉄製鍬先の一部分とみられる。281は、厚さ0.5cmの不明金属製品である。断面形は、台形状である。

282は、鉄鏃の鏃身とみられる。283は、不明金属製品である。（萩原）

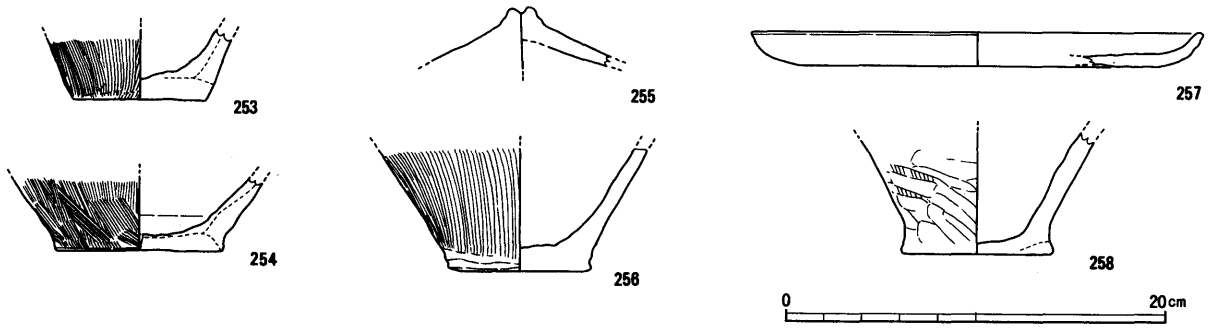


Fig. 28 出土遺物実測図

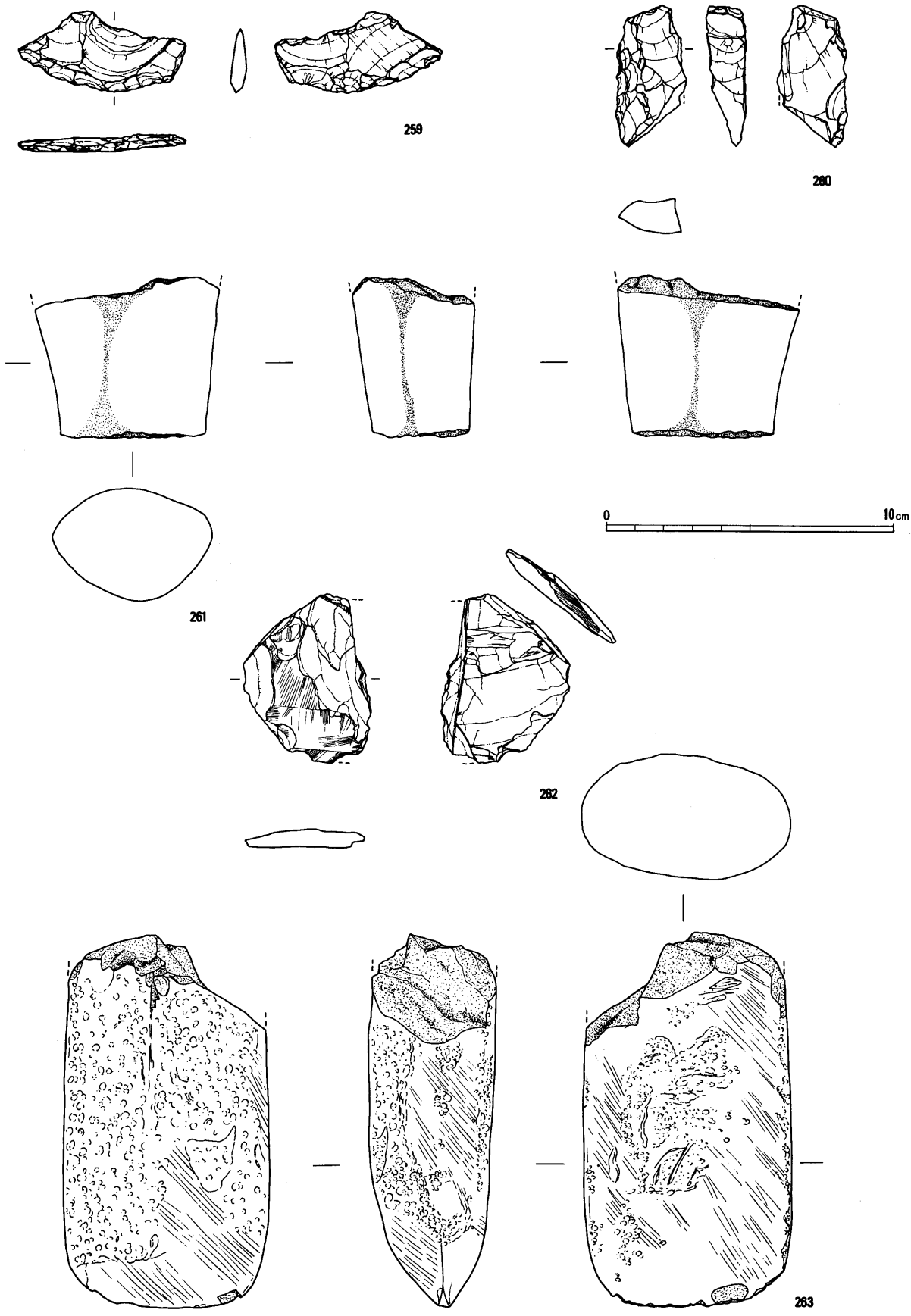


Fig. 29 出土遺物実測図

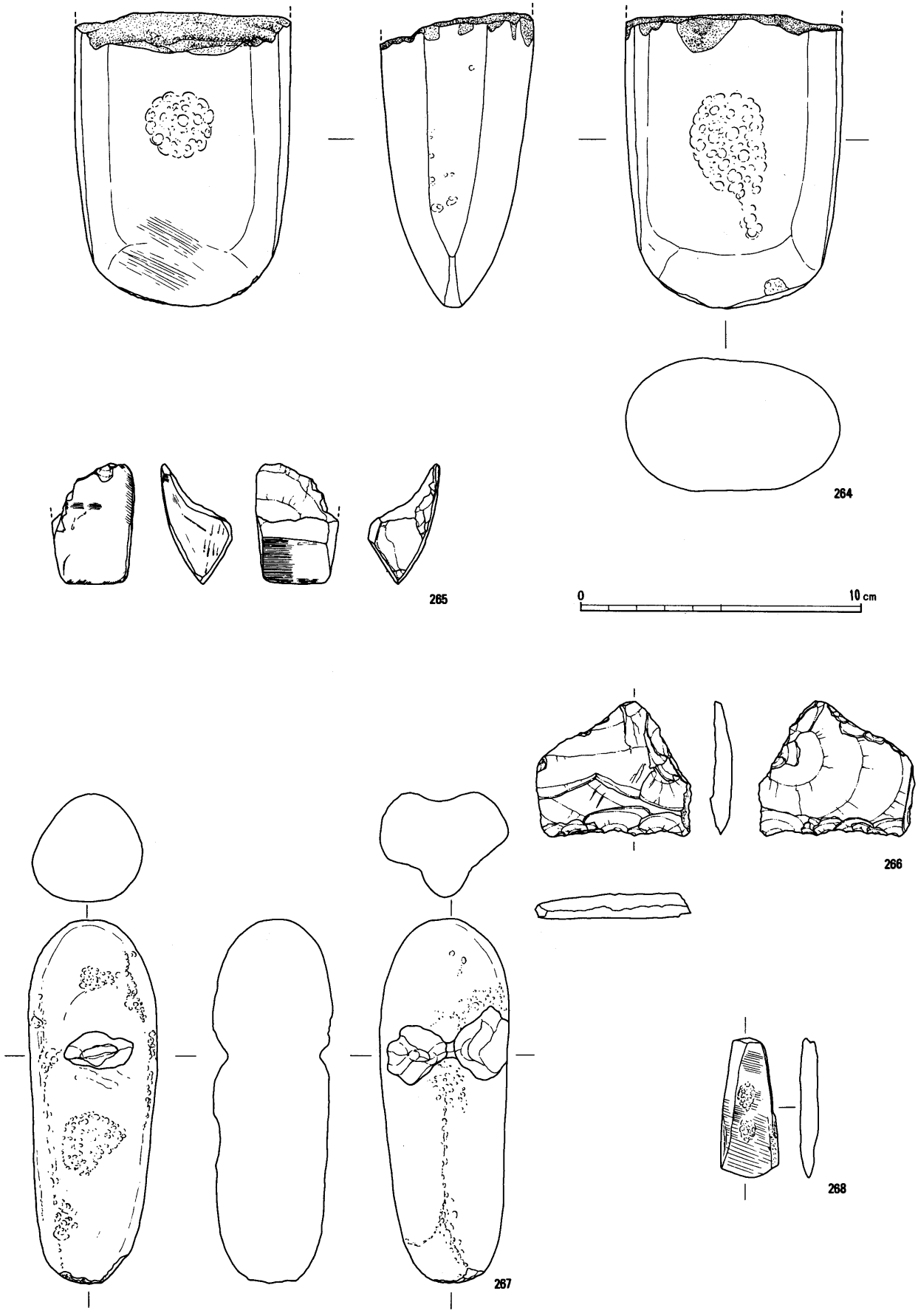


Fig. 30 出土遺物実測図

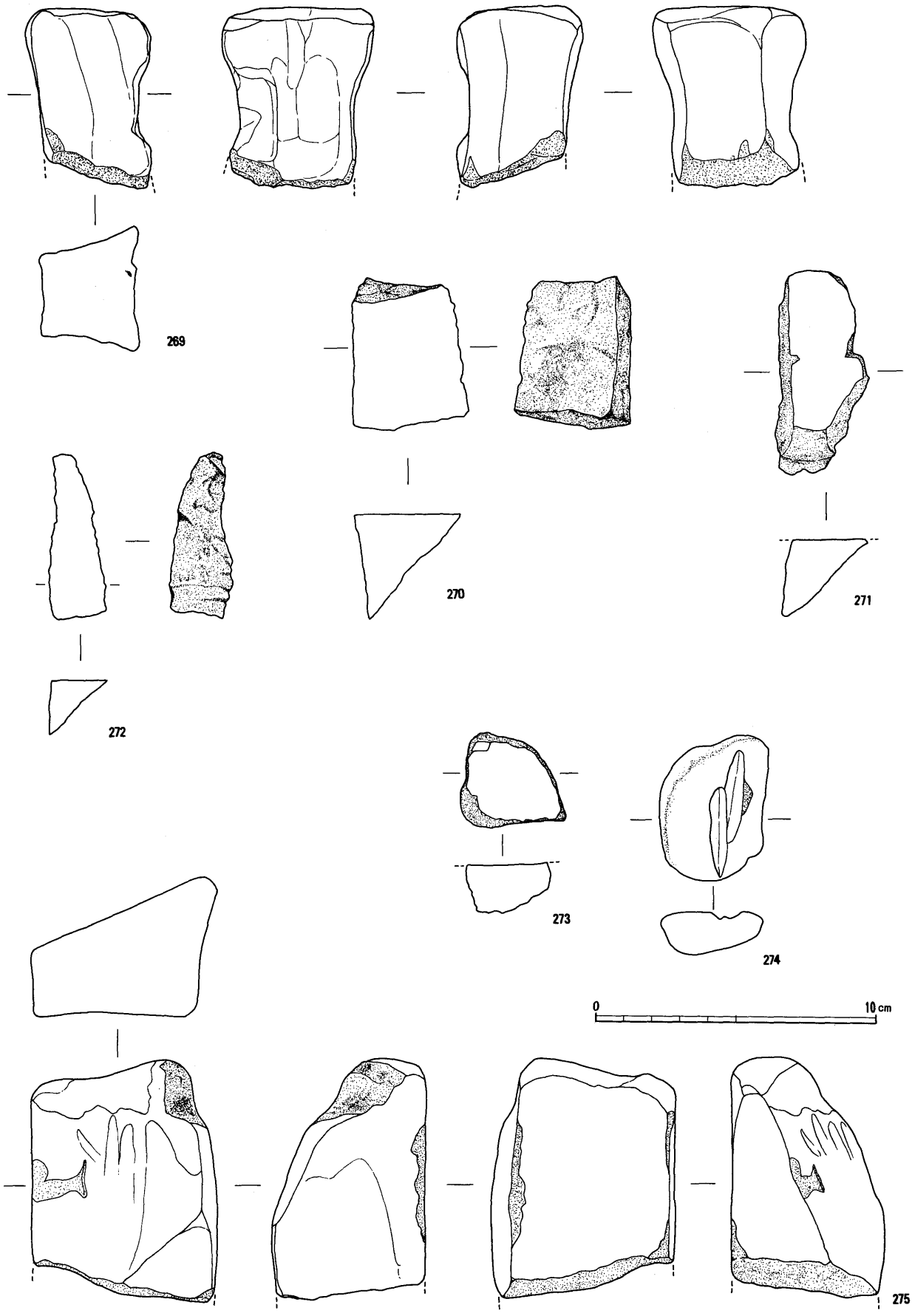


Fig. 31 出土遺物実測図

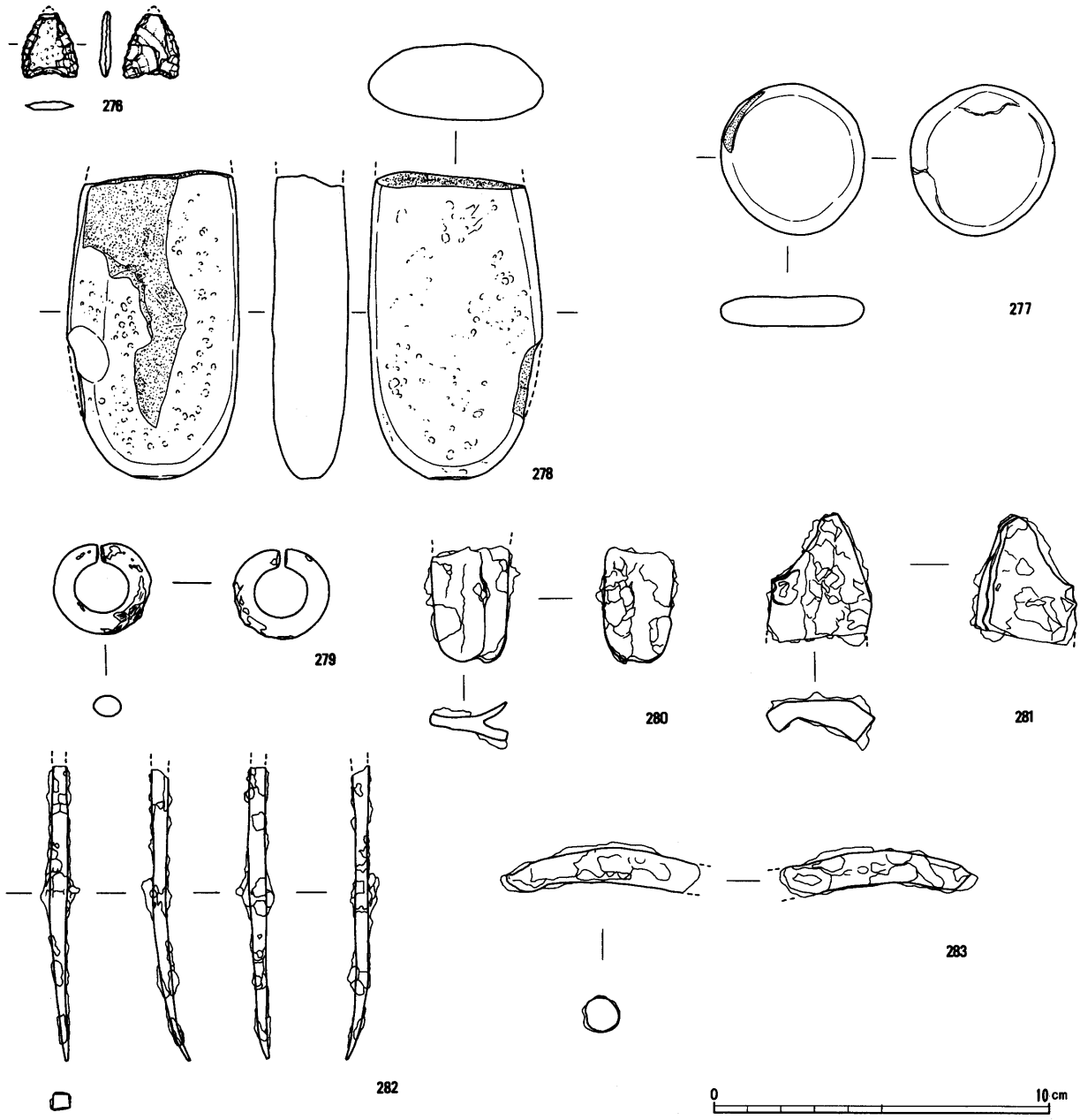


Fig. 32　出土遺物実測図

註

弥生土器の基本用語に関しては、「大和地域」（藤田三郎・松本洋明『弥生土器の様式と編年近畿編Ⅰ』木耳社　1989年）の表記を参照した。また、半裁竹管文に関しては、第Ⅳ章まとめで検討した結果に則して表記した。

①佐原真「畿央地方」（『弥生土器集成成本編２』東京堂出版　1968年）

②前掲②、参照

③田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』（平安学園考古学クラブ　1966年）

④川西宏幸「円筒埴輪総論」（『古墳時代政治史序説』　1988年）

⑤藤澤良祐「瀬戸古窯址群。」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』　瀬戸市歴史民俗資料館　1986年）

⑥千葉県茂原市立美術館・郷土資料館の津田芳男氏にご教示頂いた事では、「鬼高式の土師器甕に似ているが鬼高式とは異なる点もある。」

⑦豊橋市教育委員会「白石遺跡」（『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第15集』　1993年）Ｐ36に実測図ある。

Tab. 2　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
1	6001	弥生土器　甑	B6	SH1・P30	口28.0 底7.8	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR8/8	口50%	焼成後穿孔 外面に媒・内面に炭化物付着
2	2005	弥生土器　壺	A6	P31	底7.7	ナデ	粗	10YR8/6	底50%	
3	6101	弥生土器　壺	E8	東壁	口16.0	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR8/4	頸30%	
4	5001	弥生土器　鉢		P45・46	口29.2	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR6/4	口20%	
5	2003	弥生土器　甕	C6	SK21	底7.0	ナデ	粗	10YR8/4	底40%	
6	6304	弥生土器　壺蓋	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラミガキ?・焼成前穿孔	粗	7.5YR6/2	摘1カ所残	
7	2202	弥生土器　壺	E9	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラ描・刻目(右下)	粗	5YR6/6	－	
8	2108	弥生土器	E9	包含層(黒褐色土)	口13.9	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/3	口5%	
9	3104	弥生土器　壺蓋	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR7/4	－	
10	3504	弥生土器　鉢？	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR8/3	－	
11	2105	弥生土器　壺	E9	包含層	－	ナデ・貼り付け凸帯上に刻目	粗	5Y6/6	－	
12	2102	弥生土器　壺	F7	包含層	－	ナデ・ヘラ描	粗	2.5Y8/3	－	
13	6201	弥生土器　壺	E8	包含層(黒褐色土)	口17.2	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・削り出し	粗	5YR7/8	口ほぼ完存	
14	3603	弥生土器　壺	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・貼り付け上刻目(垂直)	粗	10YR8/4	－	
15	2103	弥生土器　甕	E9	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラ描・押圧(垂直)	蜜	10YR8/4	－	
16	6202	弥生土器　壺	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラミガキ・ヘラ描・焼成前穿孔	粗	7.5YR6/4	口5%	
17	2104	弥生土器　壺	E5	包含層	－	ナデ・刺突(竹管状)	粗	10YR8/4	－	
18	2205	弥生土器　甕	E7	包含層	－	ナデ・ヘラ描・刻目(垂直)	粗	7.5YR7/4	－	
19	1704	弥生土器　壺？	C12	包含層	底9.4	ナデ	粗	10YR7/6	底30%	
20	2203	弥生土器　壺？	E9	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描・貼り付け	粗	5YR6/4	－	
21	3103	弥生土器　甕	E8	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ハケメ・半裁竹管	粗	10YR7/4	－	
22	3702	弥生土器　甕	E9	包含層(黒褐色土)	－	ナデ・ヘラ描・押圧(垂直)	粗	7.5YR7/6	－	
23	1906	弥生土器　甕	D7	包含層	－	ナデ・ハケメ・半截竹管・押圧(左下)	粗	2.5Y6/3	－	
24	2201	弥生土器　甕	E9	包含層	口16.4	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/3	口10%	
25	2004	弥生土器 ミニチュア土器？	E8	包含層	口4.0	ナデ	粗	7.5YR7/6	完存	
26	204	土師質　紡錘車	E7	包含層	径4.2 重39.2g		粗	7.5YR7/6	完存	
27	5601	弥生土器　壺	E11・12	SK57　P3	口13.2	ナデ・ヘラミガキ・削り出し・ヘラ描	粗	7.5YR7/4	口ほぼ完存	
28	5502	弥生土器　壺	E11・12	SK57　P4・12	口16.0	ナデ・ヘラミガキ・ヘラ描	粗	7.5YR6/4	頸90%	焼成良好
29	5602	弥生土器　壺	E11・12	SK57　P8	口13.2	ナデ・ヘラミガキ・ヘラ描	粗	7.5YR5/2	口40%	5501と同一個体
29	5501	弥生土器　壺	E11・12	SK57　P13	底7.4	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR5/2	底完存	5602と同一個体
30	5503	弥生土器　壺	E11・12	SK57　P9	底8.1	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR8/6	底完存	
31	5603	弥生土器　甕	E11・12	SK57　P16	口24.0	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR8/4	口5%	
32	5701	弥生土器　甕	E11・12	SK57　P11・15	口21.4	ナデ・ハケメ・ヘラ描・刻目(垂直)	粗	7.5YR7/6	口70%	外面に媒付着
33	5801	弥生土器　甕	E11・12	SK57　P16	口18.0	ナデ・ハケメ・ヘラ描・刻目(垂直)		7.5YR6/2	－	
34	5802	弥生土器　甕	E11・12	SK57	口25.0	ナデ・押圧(垂直)	粗	7.5YR8/4	口5%	
35	5702	弥生土器　甕	E11・12	SK57　P1	口20.9	ナデ・ハケメ・押圧(垂直)	粗	7.5YR5/3	口ほぼ完存	外面に媒付着
36	5803	弥生土器　甕	E11・12	SK57　P6	底9.8	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR8/4	底完存	外面に媒付着 内面に炭化物付着
37	5901	弥生土器　鉢	E11・12	SK57	口32.7 高23.6	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ	粗	7.5YR8/4	80%	底部付近内面剥離著しい
38	5604	加工円盤	E11・12	SK57　P17	径7.8 重量112g		粗	7.5YR8/4	－	弥生土器甕底部を転用
39	803	土師器　高杯	C5	SX13(下層)	脚上2.5	ナデ・シボリメ	粗	7.5YR6/8	脚上部完存	

Tab. 3　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
40	103	土師器　椀		SX13(下層)	口13.4	ナデ・ヨコナデ	粗	7.5YR8/4	完存	
41	101	須恵器　杯蓋		SX13(下層)	口12.4	回転ナデ・回転ケズリ	粗	2.5Y8/4	完存	
42	203	須恵器　杯蓋	C5	SX13(上層)	口7.6	回転ナデ	密	N5/0	－	
43	102	須恵器　杯身	C5	SX13	口13.2	回転ナデ・回転ケズリ	粗	5GY7/1	完存	
44	201	須恵器　杯身	C5	SX13(下層)	口11.5	回転ナデ・回転ケズリ	粗	2.5Y7/2	－	
45	202	須恵器　杯身	C5	SX13(下層)	口11.6	回転ナデ・回転ケズリ	密	5Y6/2	－	
46	2601	土師質　朝顔形埴輪		SX13(下層)	口40.8	ナデ・タテハケ(外面)・ヨコハケ	粗	10YR8/3	口50%	
47	2701	土師質　円筒埴輪		SX13(下層)	口13.0～14.8	ナデ・ヨコハケ・タテハケ(外面)・透かし孔	粗	10YR8/4	底完存	底部に粘土巻き付け痕残る
48	402	土師質　朝顔形埴輪	C5	SX13(上層)	底16.8	タテハケ→ヨコハケ	粗	10YR7/4	底25%	
49	2502	土師質　円筒埴輪	C4	SX13(上層)	－	ナデ・ヨコハケ・透かし孔	密	7.5YR7/6	－	
50	2301	須恵質　円筒埴輪	C5	SX13(上層)	底14.8～15.6	ナデ・タテハケ・透かし孔	粗	5YR7/2	底完存	底部に粘土巻き付け痕残る
51	2401	土師質　円筒埴輪	C5	SX13(上層)	底12.7～15.5	ナデ・タテハケ・ヨコハケ(内面)・透かし孔	粗	10YR7/6	底ほぼ完存	底部に粘土巻き付け痕残る
52	2501	土師質　円筒埴輪	C5	SX13(上層)	底15.2 歪み大	ナデ・ヨコハケ・タテハケ	粗	7.5YR7/6	底25%	底部に粘土巻き付け痕残る 底部ヘラ切り
53	4305	加工円盤	拡張区	SX13(上層)	3.8～4.0 重量10.9g		粗	10YR6/6	－	弥生土器甕体部を転用
54	4206	土師器　台付皿	拡張区	SX13(下層)	高台5.8	ナデ・貼り付け高台	密	7.5YR8/6	高台15%	
55	4205	弥生土器　壺蓋	拡張区	SX13(上層)	孔0.3～0.4	ナデ	粗	10YR7/3	－	
56	4306	弥生土器　甕蓋	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/4	－	口縁部内面に炭化物付着
57	4905	弥生土器　甕蓋	拡張区	SX13(上層)	口22.0	ナデ	密	10YR7/2	口10%	
58	6102	弥生土器　甕蓋	拡張区	SX13(上層)	口20.2	ナデ・ヘラケズリ	粗	10YR7/3	摘75%	
59	906	弥生土器　壺	C5	SX13(上層)	－	ナデ・貼り付け凸帯＋指押さえ・ヘラ描2条間にハケメ	粗	10YR7/4	－	
60	4801	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描	粗	2.5Y8/3	－	
61	4301	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描・刺突(中実)	密	10YR6/3	－	
62	4703	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	10YR8/3	－	
63	4702	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	10YR8/4	－	
64	4804	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描	粗	10YR8/4	－	
65	4704	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	2.5YR6/6	－	
66	4803	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描・刻目(左下)	粗	7.5YR6/3	－	口縁部内面に媒付着
67	4805	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	10YR8/4	－	
68	4806	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・刻目(垂直)	粗	7.5YR6/3	－	外面に媒付着 体部内面に炭化物付着
69	4802	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・刻目(左下)	粗	5YR7/6	－	
70	3901	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	口15.2	ナデ・削り出し・ヘラ描・孔	粗	7.5YR7/6	口25%	
71	4002	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	頸10.0	ナデ・ヘラ描?	粗	10YR8/4	頸30%	頸部焼成後穿孔
72	4904	弥生土器　鉢？	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	7.5YR7/4	－	
73	4903	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ	粗	10YR6/2	－	
74	4902	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	7.5YR7/3	－	
75	4901	弥生土器　壺？	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ	粗	10YR8/2	－	
76	4105	弥生土器　鉢	拡張区	SX13(上層)	底8.5	ナデ	粗	2.5Y5/1	底完存	底部内面磨滅著しい
77	3802	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	底9.0	ナデ	粗	7.5YR7/3	底50%	
78	4001	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	口26.5	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	10YR8/3	口20%	
79	902	弥生土器　甕	A8	SX13(上層)	口12.8	ナデ・押圧(左下)	粗	10YR7/3	口20%	外面に媒付着

Tab. 4　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
80	907	弥生土器　甕	B5	SX13	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(垂直)	粗	10YR7/3	－	
81	4203	弥生土器　壺	拡張区	SX13(上層)	－	ナデ・ハケメ・刻目(左下)	密	7.5YR8/6	－	
82	1006	弥生土器　壺?	C5	SX13(上層)	－	ナデ・ヘラミガキ・ヘラ描	粗	10YR7/4	－	
83	3803	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	底7.3	ナデ	粗	5YR7/4	底50%	
84	4103	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	底9.5	ナデ	粗	10YR8/4	底ほぼ完存	底部内面磨滅著しい
85	4102	弥生土器　甕	拡張区	SX13(上層)	底9.8	ナデ	粗	10YR8/4	底完存	
86	802	弥生土器　甑	C5	SX13(上層)	底6.6	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/4	底90%	焼成後穿孔
87	3806	弥生土器	拡張区	SX13(上層)	底6.5	ナデ	粗	10YR8/3	底20%	
88	804	弥生土器　甕	C5	SX13(上層)	底7.2	ナデ	粗	7.5YR7/6	底50%	
89	4104	弥生土器	拡張区	SX13(上層)	底7.7	ナデ	粗	10YR6/3	底完存	
90	801	弥生土器	C5	SX13(上層)	底8.5	ナデ	粗	10YR8/3	底50%	
91	3801	弥生土器　鉢?	拡張区	SX13(上層)	底9.3	ナデ	粗	7.5YR7/3	底50%	底部内面磨滅著しい
92	4304	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描・刺突(中実)	粗	10YR6/4	－	
93	4302	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・貼り付け凸帯上押圧(指)・半截竹管	粗	7.5YR6/6	－	
94	4303	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・削り出し凸帯上刺突(中実)	粗	10YR6/6	－	
95	1005	弥生土器　壺蓋	C6	SX13(下層)	口13.8	ナデ	粗	7.5YR8/4	20%	焼成後切れ目
96	4204	弥生土器　甕蓋	拡張区	SX13(下層)	口14.8	ナデ・ハケメ	粗	10YR6/3	口10%	
97	903	弥生土器　壺	C6	SX13(下層)	－	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR7/2	口10%	
98	807	弥生土器 ミニチュア土器?		SX13(下層)	底3.3	ナデ	粗	10YR7/4	底完存	
99	4405	弥生土器　甕?	拡張区	SX13(下層)	底6.0	ナデ	粗	10YR7/3	底50%	
100	3805	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底7.2	ナデ・ハケメ	粗	2.5Y7/6	底20%	
101	4601	弥生土器	拡張区	SX13(下層)	底9.2	ナデ	粗	10YR5/2	底完存	
102	4503	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底9.4	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/4	底完存	
103	4504	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	底7.8	ナデ・ヘラミガキ?	粗	7.5YR7/6	底完存	
104	4603	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	底8.0	ナデ・ヘラ描	粗	5YR7/6	底20%	
105	4505	弥生土器　鉢	拡張区	SX13(下層)	底9.6	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR6/6	底完存	底部内面剥離
106	4501	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	底8.8	ナデ	粗	10YR7/4	底完存	
107	4101	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	底9.0	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/6	底完存	
108	4602	弥生土器　甑	拡張区	SX13(下層)	底7.2	ナデ	粗	10YR7/4	底30%	底部焼成後穿孔
109	4605	弥生土器　壺?	拡張区	SX13(下層)	頸4.0	ナデ・ヘラ描	粗	10YR7/3	頸50%	
110	3804	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底7.3	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/4	底25%	
111	3903	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・刻目(垂直)	密	7.5YR6/2	－	外面に媒付着
112	4003	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・ハケメ・押圧(垂直)	粗	10YR7/4	－	
113	4201	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・刻目(垂直)	粗	7.5YR7/6	－	
114	4202	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	－	ナデ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	7.5YR7/4	－	
115	1001	弥生土器　甕	C5	SX13(下層)	－	ナデ・ヘラミガキ・ヘラ描2条間に押圧	粗	10YR8/4	－	
116	1002	弥生土器　甕		SX13(下層)	－	ナデ・ハケメ	粗	2.5Y8/4	－	外面に媒付着
117	3904	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	口23.0	ナデ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	7.5YR7/6	－	
118	3902	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	口22.0	ナデ・ハケメ・押圧(左下)	粗	5YR7/4	口20%	外面に媒付着
119	4403	弥生土器　壺	拡張区	SX13(下層)	底5.6	ナデ	粗	7.5YR7/6	底ほぼ完存	

Tab. 5　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
120	4604	弥生土器　甑	拡張区	SX13(下層)	底8.0	ナデ	粗	10YR5/2	底50%	底部焼成後穿孔
121	4404	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底8.2	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/6	底完存	外面に媒付着
122	4502	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底7.4	ナデ	粗	7.5YR6/6	底完存	外面に媒付着
123	4401	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底7.2	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/3	底30%	外面に媒付着
124	4402	弥生土器　甕	拡張区	SX13(下層)	底9.0	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/6	底50%	
125	4701	深鉢？	拡張区	SX13(下層)	底7.2	ナデ	粗	10YR6/6	底完存	
126	5402	須恵器　杯蓋	拡張区	SX23(上層)	口7.6 高2.8	回転ナデ・回転ケズリ・貼り付け ナデ	密	N7/0	65%	
127	3503	須恵器　杯蓋	E5	SX23	口8.2 高2.7	回転ナデ・回転ケズリ	粗	5YR7/1	50%	
128	5403	須恵器　杯蓋	拡張区	SX23(上層)	口12.3	回転ナデ・ヘラ切り	粗	N5/0	口10%	
129	2006	須恵器　椀	E4	SK15	底5.2	回転ナデ・回転ケズリ	密	5Y8/1	底25%	
130	5401	須恵器　甕	拡張区	SX23(下層)	口23.5	ナデ・ハケメ?	密	2.5Y8/1	口10%	
131	3704	土師質　円筒埴輪	E5	SX23	口24.4	ナデ・ハケメ	粗	2.5Y6/3	－	
132	3604	弥生土器　壺	E4	SX23	－	ナデ・ヘラ描・貼り付け	粗	7.5YR7/6	－	
133	3601	弥生土器　甕?	E5	SX23	－	ナデ・ハケメ・貼り付け	粗	7.5YR7/6	－	
134	2101	弥生土器　壺	E4	SK17	－	ナデ・削り出し・ヘラ描	粗	10YR8/3	－	
135	5404	弥生土器　壺	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描	粗	N4/0	－	
136	5405	土師質　円筒埴輪	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・線刻	粗	2.5Y8/2	－	
137	5406	弥生土器　壺	拡張区	SX23(下層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描・貼り付け	粗	7.5YR6/6	－	
138	2106	弥生土器　甕	E4	Pit8	－	ナデ・ヘラ描・押圧(右下)	粗	10YR7/4	－	
139	901	弥生土器　甕	E5	SX23(外)	－	ナデ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	7.5YR6/4	－	
140	5103	弥生土器　甕	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(右下)	粗	7.5YR8/4	－	
141	5102	弥生土器　甕	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	7.5YR8/4	－	
142	1903	弥生土器　甕	E5	SX23	底7.6	ナデ・ハケメ	粗	5YR7/8	底25%	
143	3502	土師質　器材埴輪	E5	SX23	－	ナデ・ハケメ・線刻	密	10YR8/4	－	
144	5201	土師質　盾形埴輪	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・線刻・透かし孔	粗	10YR8/3	－	
145	3703	土師質　器材埴輪	E4	SK15	－	ナデ・ハケメ・線刻	密	10YR8/4	－	
146	3605	土師質　器材埴輪	E5	SK15	－	ナデ・線刻	粗	10YR8/4	－	
147	3701	土師質　器材埴輪	E5	SX23	－	ナデ・ハケメ・線刻	粗	2.5Y8/4	－	
148	3501	土師質　器材埴輪	E5	SK18	－	ナデ・ハケメ・線刻	密	10YR8/4	－	
149	5301	土師質　盾形埴輪	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・線刻	粗	7.5YR8/3	－	
150	5101	土師質　盾形埴輪	拡張区	SX23(上層)	－	ナデ・ハケメ・線刻	粗	10YR8/3	－	
151	3004	土師器　椀	D7	SX28	口13.3	ナデ	粗	10YR7/6	－	
152	1801	土師器　椀	D7	SK28	口11.8	ナデ・ヨコナデ	密	10YR7/6	口20%	
153	401	土師器　甕		SX28	口11.5 高16.8	ナデ	粗	7.5YR7/4	50%	内面に輪積痕明瞭に残る
154	3001	土師器　甕	D9	SX28(下層)	－	ナデ・ハケメ	粗	10YR6/4	－	
155	806	陶器　椀	D9	SX28(上層)	底6.7	ロクロナデ・糸切り痕・貼り付け高台・モミガラ痕	密	2.5Y7/2	底25%	
156	6302	弥生土器　壺蓋	D9	SX28(下層)	口10.6 高3.3	ナデ・ヘラミガキ・焼成前穿孔・線刻	粗	7.5YR8/3	25%	
157	2906	弥生土器　壺	E10	SX28(下層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	7.5YR6/6	－	
158	1003	弥生土器　壺	E10	SX28(下層)	口11.8	ナデ・削り出し	粗	7.5YR8/6	－	
159	2901	弥生土器　壺	E10	SX28(下層)	口15.6	ナデ・孔	粗	7.5YR7/6	口25%	

Tab. 6　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
160	1805	弥生土器　壺	D9	SX28(下層)	口15.6	ナデ・ヘラ描	粗	7.5YR7/8	－	
161	2107	弥生土器　壺	D10	SX28(上層)	口18.4	ナデ・削り出し	粗	7.5YR7/6	口15%	
162	2204	弥生土器　壺	D9	SX28(上層)	－	ナデ・削り出し・ヘラ描・ヘラミガキ	粗	5YR6/6	－	
163	3005	弥生土器　壺	E10	SX28(下層)	－	ナデ・削り出し	粗	7.5YR7/6	－	
164	2904	弥生土器　壺	D8	SX28	底7.8	ナデ	粗	10YR6/4	底50%	
165	2804	弥生土器　壺	E6	SX28	底9.2	ナデ	粗	10YR6/4	底25%	
166	1702	弥生土器　壺	D10	SX28(上層)	底9.0	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR7/4	底50%	
167	904	弥生土器　鉢	E6	SX28	－	ナデ・ヘラミガキ	粗	10YR7/4	－	
168	909	弥生土器　壺？	D9	SX28(上層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ	粗	10YR7/6	－	
169	3003	弥生土器　壺	D8	SX28	－	ナデ・ヘラ描	粗	10YR8/4	－	
170	3002	弥生土器　壺	D9	SX28(下層)	－	ナデ・ヘラ描・ヘラミガキ	粗	10YR6/4	－	
171	2905	弥生土器　甕	E6	SX28	－	ナデ・ハケメ・刻目(右下)	粗	7.5YR7/6	－	
172	908	弥生土器　甕	E10	SX28(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	10YR7/4	－	外面に媒付着
173	2002	弥生土器 ミニチュア土器？	D7	SX28	口6.0	ナデ	粗	10YR7/4	60%	
174	2902	弥生土器　甕	E10	SX28(下層)	口17.0	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	10YR7/4	－	
175	2903	弥生土器　甕	E10	SX28(下層)	口24.6	ナデ・ハケメ・半截竹管・刻目(垂直)	粗	10YR6/3	－	
176	2803	弥生土器　甕	E10	SX28(下層)	底8.2	ナデ	粗	10YR7/4	底30%	
177	2805	弥生土器　壺	D9	SX28(下層)	底7.4	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ	粗	10YR5/4	－	内面に炭化物付着
178	805	弥生土器　甕	D9	SX28(上層)	底7.0	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/4	底30%	
179	1803	弥生土器　甕	D9	SK28(下層)	底4.0	ナデ	粗	5YR6/6	底完存	
180	2806	弥生土器　壺	D9	SX28(下層)	底7.2	ナデ	粗	7.5YR7/6	底ほぼ完存	
181	1701	弥生土器　甕	D9	SX28(下層)	底6.0	ナデ	粗	7.5YR7/6	底50%	
182	1004	弥生土器　甕	C10	SX38(上層)	口19.0	ナデ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	10YR7/4	口10%	
183	1904	弥生土器　甕	C10	SX38(下層)	口22.6	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/4	口15%	外面に媒付着
184	1804	弥生土器　甕	B11	SX38(下層)	口9.8	ナデ	密	7.5YR7/6	口20%	
185	1905	弥生土器　甕	B11	SX38(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	7.5YR7/6	－	
186	1901	弥生土器　甕	B8	SX38(下層)	底7.2	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/4	底完存	
187	1902	弥生土器　甕		SX38(下層)	底7.6	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/6	底50%	
188	1907	弥生土器　甕	B11	SX38(下層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	10YR7/4	－	
189	2802	弥生土器　壺	B11	SX38(下層)	底8.2	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ	粗	10YR7/6	底50%	
190	2801	弥生土器　壺	B11	SX38(下層)	底9.1	ナデ	粗	10YR7/6	底ほぼ完存	
191	3602	弥生土器　壺	B11	SX38(下層)	－	ナデ・削り出し	粗	7.5YR7/6	－	
192	1103	弥生土器　壺	C11	SX49(上層)	口16.7	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・削り出し・ヘラ描	粗	7.5YR5/4	口20%	
193	1304	弥生土器　壺蓋	C11	SX49(上層)	口11.6	ナデ	粗	2.5Y8/3	10%	
194	1303	弥生土器　壺？	C11	SX49(上層)	－	ナデ・ヘラミガキ	粗	5YR6/4	－	
195	1104	弥生土器　壺	C11	SX49(上層)	－	ナデ・ヘラミガキ・削り出し・ヘラ描	粗	7.5YR6/6	－	
196	1102	弥生土器　壺	C11	SX49(上層)	頸10.2	ナデ・ヘラミガキ・削り出し・ヘラ描	粗	7.5YR7/3	頸10%	
197	1505	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底5.5	ナデ	粗	7.5YR8/3	底25%	
198	1606	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底8.8	ナデ	粗	5YR7/6	底20%	
199	1402	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底8.0	ナデ	粗	10YR7/4	底30%	

Tab. 7　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
200	3102	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	口24.4	ナデ・ハケメ・半截竹管・刻目(垂直)	粗	5YR7/4	口10%	
201	604	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	－	ナデ・刻目（右下)	粗	10YR8/6	口5%	
202	1206	弥生土器　甕	E11	SX49(上層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	10YR8/4	－	
203	504	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	－	ナデ・ヘラ描(２条)・押圧(垂直)	粗	10YR8/4	5%	外面に媒付着
204	1603	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底8.5	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/4	底25%	
205	501	弥生土器　甕	E11	SX49(上層)	底6.4	ナデ	粗	10YR7/4	底40%	
206	1504	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底6.7	ナデ・ハケメ	粗	5YR7/4	底完存	
207	1507	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底6.3	ナデ	粗	2.5YR6/6	底完存	
208	1602	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底7.1	ナデ・ハケメ	粗	10YR6/2	底50%	
209	1404	弥生土器　甕	C11	SX49(上層)	底6.8～7.3	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/4	底完存	内面に炭化物付着
210	905	土師器　杯	B12	SX49(下層)	口12.5	ナデ	粗	7.5YR7/8	口20%	
211	6303	弥生土器　壺蓋	D11	SX49(下層)	口12.8 高4.05	ナデ・ヘラミガキ・焼成前穿孔	粗	7.5YR8/6	30%	
212	6203	弥生土器　甕蓋	D11	SX49(下層)	口22.5	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR8/4	25%	
213	606	弥生土器　壺蓋	D11	SX49(下層)	－	ナデ	粗	7.5YR7/4	－	
214	605	弥生土器	D11	SX49(下層)	－	ナデ	粗	5YR6/8	－	
215	1202	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	口14.6	ナデ・ヘラ描?	粗	7.5YR8/4	口ほぼ完存	
216	1101	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	口18.6	ナデ・ハケメ・ヘラミガキ・削り出し・ヘラ描	粗	7.5YR7/4	頸20%	
217	1601	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	底8.0	ナデ・ヘラミガキ	粗	7.5YR7/3	底30%	
218	503	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	底6.6	ナデ	粗	10YR8/4	ほぼ完存	
219	1401	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	底8.8	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR6/2	底30%	
220	1503	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底16.5	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR8/3	底10%	
221	3101	弥生土器　鉢?	D11	SX49(下層)	底11.0	ナデ・ヘラミガキ	粗	5YR6/6	底ほぼ完存	底部内面剥離著しい
222	6301	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	口22.0	ナデ・ハケメ・半截竹管・刻目(垂直)	粗	7.5YR7/6	口30%	
223	602	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	口22.0	ナデ・ハケメ・ヘラ描(２条)・押圧～刻目(垂直)	粗	10YR8/4	口10%	
224	1201	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	口22.5	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	5YR7/4	口60%	
225	603	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	口25.0	ナデ・半截竹管・押圧(左下)	粗	7.5YR7/6	口10%	
226	601	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	口26.0	ナデ・半截竹管・押圧(垂直～左下)	粗	10YR8/4	口10%	
227	1203	弥生土器　甕	B12	SX49(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	5YR6/4	－	
228	706	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・削り出し+ヘラ描・押圧(垂直)	粗	10YR8/4	－	
229	701	弥生土器　甕	D14	SX49(下層)	－	ナデ・押圧(左下)	粗	7.5YR7/4	口5%	外面に媒付着
230	1301	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	7.5YR6/3	－	
231	704	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描・押圧(左下)	粗	10YR8/4	口10%	
232	1204	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ヘラ描	粗	7.5YR7/4	－	
233	703	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	7.5YR7/6	－	
234	505	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ヘラ描?	粗	7.5YR8/6	5%	外面に媒付着
235	1302	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ	粗	10YR6/2	－	
236	1205	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ	粗	7.5YR8/4	－	
237	705	弥生土器　甕	B12	SX49(下層)	－	ナデ・ハケメ・ヘラ描	粗	7.5YR7/6	口5%	
238	702	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	－	ナデ・ヘラ描・押圧(垂直)	粗	10YR8/4	口5%	
239	1604	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底7.6	ナデ	粗	7.5YR7/4	底30%	

Tab. 8　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
240	1605	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底8.0	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/3	底20%	
241	1506	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底6.0	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR8/3	底20%	
242	502	弥生土器　壺	D11	SX49(下層)	底7.5	ナデ	粗	10YR6/3	底ほぼ完存	
243	1502	弥生土器　甑	D11	SX49(下層)	底9.0	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/4	底25%	焼成後穿孔
244	1403	弥生土器	D11	SX49(下層)	底6.3	ナデ	粗	5YR7/3	底完存	
245	1406	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底8.0	ナデ・ハケメ	粗	10YR8/3	底90%	
246	1405	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底7.0	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/4	底50%	
247	1501	弥生土器　甕	D11	SX49(下層)	底6.5	ナデ	粗	5YR7/4	底ほぼ完存	
248	302	土師器　甕	D5	SX24	口15.0 高18.4	ハケ・ヘラケズリ・ナデ	粗	10YR7/4	50%	
249	301	土師器　甕	D5	SX24	口14.0 高18.1	ハケ・ヘラケズリ・ナデ	密	10YR8/4	ほぼ完存	
250	6501	須恵器　短頸壺	D5	SX24	口8.1 高14.0	回転ナデ・カキメ	粗	2.5Y7/2	完存	全体に自然釉付着
251	104	須恵器　高杯	D5	SX24	口12.0 高15.0	回転ナデ・回転ケズリ	粗	7.5Y6/2	杯部完存	
252	205	加工円盤	D5	SX24	径3.0 重8.0g		粗	10YR8/4		
253	1705	弥生土器　甕	試No.6		底7.0	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR7/6	底30%	
254	2001	弥生土器　甕	試No.6		底8.8	ナデ・ハケメ	粗	10YR7/4	底30%	
255	2007	弥生土器　壺蓋	D14	カクラン坑	－	ナデ	粗	7.5YR7/6	摘１カ所残	
256	5002	弥生土器　甕	D11	カクラン坑	底6.7	ナデ・ハケメ	粗	7.5YR6/6	底完存	
257	2008	土師器　皿	D14	カクラン坑	口24.0	ナデ・ヨコナデ	密	10YR7/6	口5%	
258	1703	弥生土器　甕	E11	カクラン坑	底7.8	ナデ・ハケメ	粗	10YR6/4	底50%	
259	6702	安山岩?　削器	D7	SX28	長2.83 幅5.74				－	
260	6802	チャート　RF	C10	SX38(上層)	長4.92 幅2.48				－	
261	6504	磨製石斧	拡張区	SX13(上層)	幅5.5				－	
262	6901	頁岩　石包丁	拡張区		長5.98 幅4.43					－
263	3401	磨製石斧	B11	SX38(下層)	幅7.0	研磨痕				
264	3301	磨製石斧	D11	SX49(下層)	幅7.7					叩き石として転用
265	6701	磨製石斧	D9	SX28	長4.3 幅2.87				－	
266	7001	頁岩　石包丁	拡張区	SX13(下層)	長4.8 幅0.52				－	
267	3302	石杵	E9	包含層	長12.9	敲打痕				先端部のみ被熱により赤変
268	6401	磨製石斧	D10	SX28(上層)	長5.0 幅2.1				完存	
269	3203	砥石	B5	SK21	4.4×3.6	５面使用			－	
270	6503	砂岩　砥石	拡張区	SX13(上層)	－	１面使用			－	
271	3202	砥石	C6	SX13(下層)	－	１面使用			－	
272	6502	砂岩　砥石	拡張区	SX13(下層)	－	１面使用			－	
273	3204	砥石	E6	SX28	－	１面使用			－	
274	6402	有溝砥石	D10	SX28(上層)	長3.3 幅0.6				－	研き出し痕２カ所
275	3201	砥石	C10	SX38(上層)	6.7×5.0	４面使用			－	
276	6801	尖頭器　未製品	E11・12	SK57	長1.92 幅1.65				先端欠損	
277	3402	石		P41	径4.2～4.4 厚0.9					投弾の可能性あり
278	3403	石	D11	SX49(下層)	幅5.2				－	
279	6601	銀鐶	D5	包含層	環2.7～2.9 径0.7～0.8					

Tab. 9　遺物観察表

番号	実測番号	器　種　等	地　区	遺構・層名等	計測値(cm)	調整・技法の特徴	胎土	色　調	残　存	特　記　事　項
280	6605	鏃先	D8	SX28(下層)	刃幅0.7 接続部幅0.5					鏃先の端部
281	6602	不明鉄製品	B12	SX49(上層)	厚0.5					
282	6604	鉄鏃？	C6	SX13	幅0.5 厚0.5					
283	6603	不明鉄製品	E11	SX49(上層)	径1.0					

遺物観察表　凡　例

遺物観察表については、以下のような方法によって表記している。

番号；図版に対応する番号である。

実測番号；実測図作成段階での番号である。３桁以上の番号が実測用紙番号で、下２桁の番号が実測用紙内の番号である。(例)　１２３０４→１２３－０４

器種等；弥生土器・土師器などの別と、器種（壺・甕・杯）などを記した。

地区；調査区内のグリット（４ｍ×４ｍ）である。

遺構・層名等；遺構から出土したものについては遺構を表記している。

計測値；口縁＝口縁部径、底＝底径、高台＝高台径、高＝器高などと略した。

調整・技法の特徴；焼成時に生じた特徴的な事項を含め、簡単に記した。甕口縁部の刻みなどについては、刻目＝押し引き施文、押圧の別と、方向について、正立させた状態で右下・垂直・左下と記した。

胎土；粗密のみを表記した。胎土中に見られる重要な特徴については「特記事項」に記した。

色調；『新版標準土色帖』(小山・竹原編　９版　１９８９年）を基準とした色調を表記した。

残存；口縁部・底部などの残存の度合いを百分率で表現した。

特記事項；土器に見られる特徴的な要素などを記した。

V まとめ

今回の調査では、弥生時代、古墳時代の遺構が確認された。また、遺物では、旧石器時代のスクレイパー、弥生時代前期土器、円筒埴輪を含む古墳時代の土器もみられた。

また、本遺跡は非常に著名な遺跡である一方、過去の調査からみると、僅かな資料でしかない。ここでは、今回の調査成果で今後の課題も考えたい。

1　弥生時代について

(1)　住居址について

第４次調査では、ＳＨ１・２の２棟の建物が確認された。

ＳＨ１は、歪な方形状に掘られている痕跡を確認することができた。建物内にはランダムに穴がみられ内１箇所から土器がまとまって出土した。

ＳＨ２は、円形に柱穴が巡り、２つの穴が中央の土坑を挟む形で見られた。中央土坑には、炭が混じっていたが明確に穴の壁面などに焼土が認められなかった。壁面は、円形に巡る柱穴に沿って確認できなかったが、やや広い範囲にわたって周囲より低くなっている。これらの特徴は、松菊里型住居[1]と共通する。松菊里型住居は、集落内の全ての建物がそれで占められているのではないことと、中央土坑を挟んだ２つの柱穴が近接している為、中央土坑を炉とは言い切れないことなどから、一般的な住居では、なく、工房などに利用されていることが多いとされている[2]。しかし、ＳＨ２からは全く石器剥片などが出土しておらず（13の壺を正立した状態で検出していることから、床面を調査時に削りすぎているとは考えにくい。調査と平行して、石も土器と同様に水洗し検討した。）、工房としての確証を欠く。

また、断ち割った際に、中央部付近のみが焼け締まっていることも確認した。よって、焼土が認められなくとも、炉として機能していた可能性を捨てきれない。

(2)　ＳＨ１出土甑の系譜について

ＳＨ１出土甑（１）は、体部の張る形状をなしており、鉢と甕の折衷形のようにもみえる。しかし、内傾接合[3]によって成形されていることと頸胴部界で調整の変換点が見られることから凸帯文系土器の深鉢に系譜を求めることができようか。形態上の類例は、唐古・鍵遺跡ＳＫ215出土甕[4]がある。ハケ調整を基本とし、頸胴部界で変換点をもつ共通性が認められる。（未実見・成形は不明）

唐古・鍵遺跡ＳＫ215出土土器は、大和Ｉ－２－ａ様式[5]の指標とされている土器群である。よって、ＳＨ１では単体の出土であるために、時期決定が困難であるものの、調査区内で多くの弥生時代前期土器が出土していることを考慮すれば、ほぼ同時期の所産であるといえる。

(3)　刻目について

伊勢湾西岸地域では、馬見塚期に凸帯文系土器が普遍的にみられる[6]。凸帯文土器の刻目文は、大半の資料でＤ字状など左から右に動く刻目が見られることから、土器を正立させた状態で施文されていることが知られる[7]。ところが、金剛坂遺跡の弥生時代前期の資料では変化がみられる。

壺の場合は、凸帯上に同様に正立させた状態で施文されている。一方、甕の場合には、原体を横に押し引きしない押圧のものが一定量を占めている。また、刻目を巡らせている場合、右から左に動くものが主流を占めるようになる。突然に利き手の比率が変化するとは考えにくい。また、器種によって差が生じていることからも利き手の変化ではなく、器形が小形化することと施文方法の変化に由来するものと考えられる。よって、右から左に動く逆Ｄ字状の刻目をもつ個体は、土器を持ち上げた状態で施文していると予想される。

(4)　いわゆる半截竹管文について

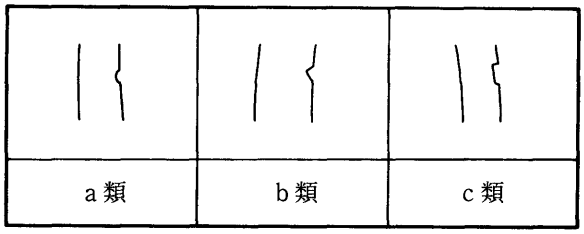
東海地方では、２条単位で平行に巡る沈線文を半截竹管による施文と見なして研究が進められてきた[8]。ところが、今回報告するに当たって整理を進めていくと、平行沈線文（ほぼ平行で、ゆれの限りなく少ないものを含む）には、３種類の断面形態が存在することが明らかになってきた（Tab.　10参照）。そして、３種類のうちどれが学史上での半截竹管文が

相当するのか、見極めるのが困難であった。また、細片の場合には、沈線が平行しているのか否かを判断しづらいことも多かった。以下、各断面形態ごとに検討したい。

まずａ類の場合には、ほぼ平行に沈線が巡っているにもかかわらず、同時に書き始め・書き終わりの切れ目が見られない個体（27・175）がある。また、沈線自体が１本しか巡っていない場合もある。このことからａ類の場合、偶数単位でなくとも単体でも原体が存在することがわかる。しかし、230の平行沈線文は２条ずつ対になって、沈線を巡らせている。このことから、単体の原体を２条まとめて巡らせている場合も想定される。224の場合は、計４条のほぼ平行な沈線が巡っている。しかし、厳密には１条目と２条目の間隔が伸縮することから、２条が対になっているとはいえない。また、１条目と２条目の間隔と３条目と４条目の間隔の幅が異なっており、同一原体を２周させているとは、考えにくい。この場合、単体の原体を４条まとめて施文している可能性も捨てきれない。

ｂ類の場合には、沈線が１本しか巡っていない場合や３本巡らされている個体が存在する。よって、ａ類の場合と同様に原体そのものは単体でも存在することがわかる。量的には、平行するものよりも平行しないものの方が多い。

ｃ類の場合には、２条単位のもののみしか確認されていない。甕200の場合は、２条単位で同一原体を２周させている。また、同時に書き始め・書き終わりの切れ目が存在する個体が中ノ庄遺跡[9]で出土している。以上から原体に半截した竹管状工具を使用している、狭義の半截竹管文の可能性があるのはｃ類の場合に限定できよう。ただ、原体の当たる角度によって、断面形が変化することはあらかじめ予想される。よって、一部ｂ類の場合も含まれる可能性



Tab. 10　甕の断面形態分類

が指摘できよう。

次に、口縁端部の刻目を確認する。ａ類の場合は、逆Ｄ字状の刻目あるいは押圧である。半截竹管文が施文される場合は、Ｄ字状の刻目ないし面状の押圧あるいは、ないものがある。つまり、逆Ｄ字のものがないということは、土器を持ち上げた状態で施文していると明らかに判断できる個体はなく、凸帯文以来の施文方法を踏襲しているといえよう。鈴木克彦氏は、半截竹管文で施文される甕とそうでない甕の刻目の方向を正立させた状態で検討されている。具体的には、正立させた状態で左上がりの大半が前者で、右上がりまたは直立が後者ということである[10]。この結果は、上記で検討したものと対応し、施文方法の違いを反映していると考えられる。

さらに、これら甕の成形技法を確認したい。遠賀川系土器は、一般的に外傾接合で成形されるとされている[11]。実際に、調査区内出土土器で確認できるものは、外傾接合によって成形されている。単体の原体をまとめて施文している可能性のあるａ類の場合（224）は、外傾接合によって成形されている。半截竹管文が施文されるものに関しては、明確に判断できるものがなかった。

(5)　ハケ調整仕上げの甕について

今回の調査区内では、遠賀川系土器が大半を占めており、条痕文系土器は全く出土していない。周辺では、美杉村下之川富田遺跡で、前期中段階の資料が報告されており、条痕で調整され口縁端部に刻目を巡らせる甕が出土している。伊藤裕偉氏は、この土器を大和形甕の祖形をなすものとして注目し、遠賀川系土器の影響を受けつつ、条痕文系土器の存在する地域は伊勢湾西岸部の伊勢であることから大和形甕に条痕文系土器の影響を考慮する場合には、縄文時代晩期後半の伊勢での状況を確認する視点が必要である[12]と、喚起を促されている。

甕35・118は、外面と口縁部内面がハケ調整で仕上げられており、頸部の屈曲のゆるやかなものが数点みられる。大和形甕を考える上で参考になる資料であろうが、確実に内傾接合によって成形されていることの確認できる資料はない。

(6)　弥生時代の遺構・遺物時期について

実際に遺構として、一定量の土器群が認められた

のは、ＳＫ57のみであるため、厳密に時期細分に適しない資料である。敢えて区分するなら、概ね２時期に分けることができる。更に後半は２時期に細分することもできよう。

ＳＫ57・ＳＨ１・ＳＨ２（Ｅ８区周辺）は、弥生時代前期中段階[13]に相当する土器が出土する遺構である。

９号墳・10号墳（下層）・11号墳・12号墳・13号墳の混入土器は、弥生時代前期新段階（前半）[14]に相当する資料が中心となる。

10号墳（上層）混入土器は、下層よりやや新しい様相がみられることから、弥生時代前期新段階（後半）[15]に相当するのであろうか。壺62・63・65は、頸部に多条沈線が巡っており、形態としては佐原真氏がｂ形態[16]としたものである。

(7) 金剛坂遺跡出土土器の特徴

今回の調査区内では、遠賀川系土器ほぼ大半を占めており、条痕文系土器は全く出土していない。

かつて、赤褐色の焼成と半截竹管文や押圧凸帯によって特徴づけられる土器群をもって金剛坂式[17]と称されたことがあった。また、これを亜流遠賀川式土器とよぶこともあった。しかし、半截竹管で施文された甕であっても、胎土は他の個体と際立った差はなく、赤褐色を呈しているわけでもなかった。赤褐色の焼成で他の土器と著しい差があるものには、125などがある。

純粋な遠賀川式土器に対して、当地域の地域色をもった土器群を「亜流遠賀川式土器」と称する場合には鈴木克彦氏の分類[18]がもっとも実状に則しているように思われる。（川崎志乃）

２　古墳時代（辰ノ口古墳群）について

(1) 周辺の古墳群と関係について

明野原台地周辺には、第Ⅰ章で述べたとおり数多くの古墳群が存在する。過去において発掘調査された古墳では、５世紀後半から造営される帆立貝式の高塚１号墳、神前山１号墳等のような大規模なものから６世紀後半～７世紀初頭にかけての小規模なものがみられる。その中で陶邑編年ＴＫ47～ＭＴ15型式に並行する辰ノ口古墳群は、造営の時期において６世紀初頭以降であり、大規模な古墳の造営から古墳群に移行する時期の古墳群とも考えられる。

(2) 墳形について

辰ノ口古墳群の墳形は、過去を含め全て方形を呈している。明野原台地周辺に存在する古墳群の墳形は、様々であって一答できるものでない。その中で墳形の統一性をもっており、他の古墳群と様相は異なる。

(3) 小結

今回検出した削平された古墳は、全部で５基である。調査地は、かつて金剛坂四十八塚と呼ばれる古墳群が存在したとみられ、過去の調査によって辰ノ口地区から古墳が数基確認されている。また、現在の県道鳥羽松阪線の前身である伊勢電鉄の線路敷設に伴い現状の台地を削平し古墳を破壊した際に家形埴輪が出土している。これらの状況から、辰ノ口古墳群は、台地の縁辺部に沿うように順次、造営されていったと考えられ、調査地から丘陵地帯に広がると推定される。（萩原義彦）

①中間研志「松菊里型住居－我国稲作農耕受容器における竪穴住居層の研究－」（『東アジアの考古と歴史　中岡崎敬先生退官記念論集』岡崎敬先生退官記念事業会　1987年）
②前掲註①、参照
③家根祥多「縄文土器から弥生土器へ」（『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所　1984年）
④藤田三郎『唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報』（田原本町教育委員会　1986年）
⑤藤田三郎「大和の弥生土器編年図」（『大和の弥生遺跡　基礎資料Ⅰ』大和弥生文化の会　1995年）
⑥鈴木克彦「伊勢湾沿岸地方における凸帯深鉢の様相－伊勢地方からの視点」（『三重県史研究』第６号　1990年）
⑦例えば、伊藤裕偉編『島抜Ⅰ』（三重県埋蔵文化センター　1988年）
⑧研究史に関しては、鈴木克彦「『亜流遠賀川式土器』再考」（『Ｍｉｅｈｉｓｔｏｒｙ　ｖｏｌ.２』三重歴史文化研究会　1990年）に詳しい。
⑨中ノ庄遺跡昭和46年度調査出土であるが、以下の報告には掲載されていない。（谷本鋭次『中ノ庄遺跡発掘調査報告書』三重県教育委員会　1972年）
⑩前掲註⑧、参照
⑪前掲註③、参照
⑫伊藤裕偉『下之川富田遺跡』（三重県埋蔵文化センター　1987年）
⑬佐原真「畿央地方」（『弥生土器集成本編２』東京堂出版　1968年）
⑭前掲註⑬、参照
⑮前掲註⑬、参照
⑯前掲註⑬、参照
⑰紅村弘「東海西部」（『弥生土器Ⅰ』ニューサイエンス社　1983年）
⑱前掲註⑧、参照

PL. 1

調査作業風景

完掘全景

SH1完掘全景

SK57遺物出土状況

PL. 3

SX13完掘全景

SX13遺物出土状況

SX13遺物出土状況

SX23遺物出土状況

PL. 5

SX28完掘全景

SX28遺物出土状況

SX38完掘全景

SX38完掘全景

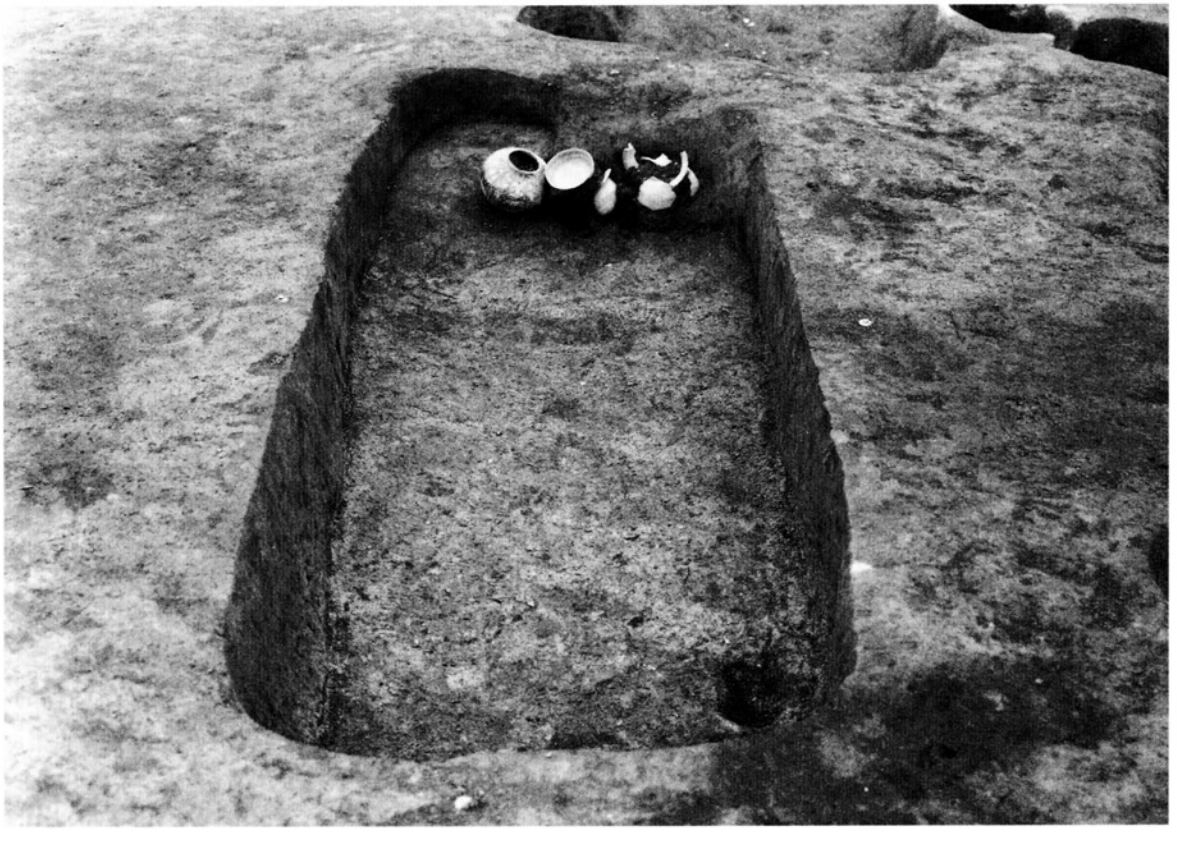
PL. 7

SX49完掘全景

SX49完掘全景

SX11完掘全景

SX24遺物出土状況

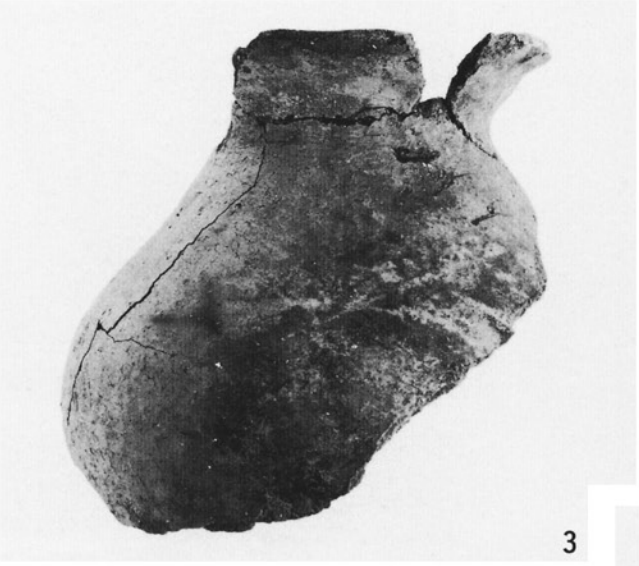


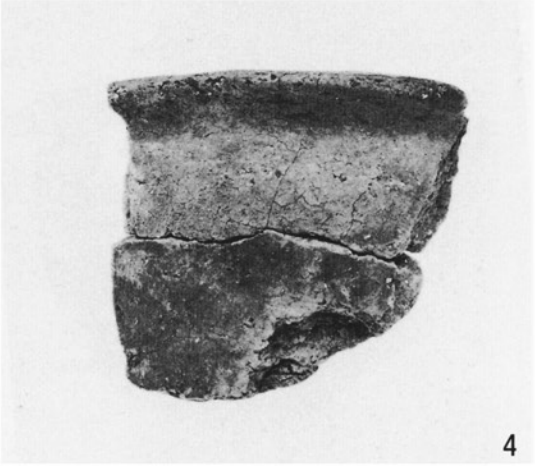
PL. 9

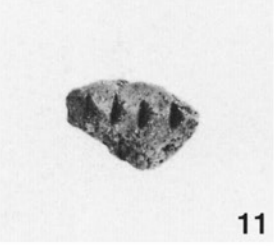
耳鐶出土状況

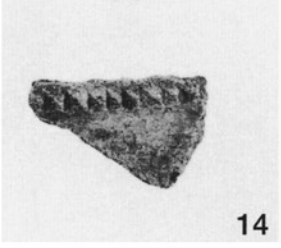
拡張区完掘全景

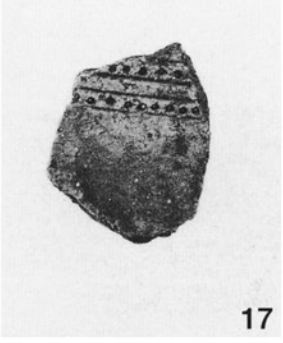
出土遺物

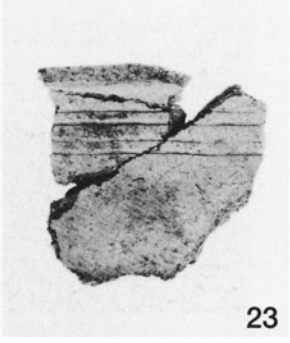

3


4

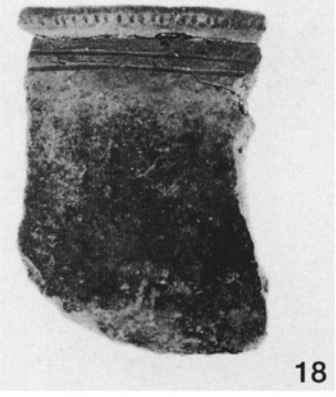

11

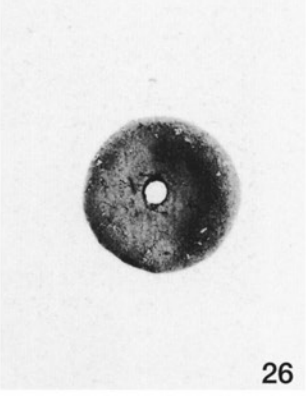

14


17


23

13


18


26

27

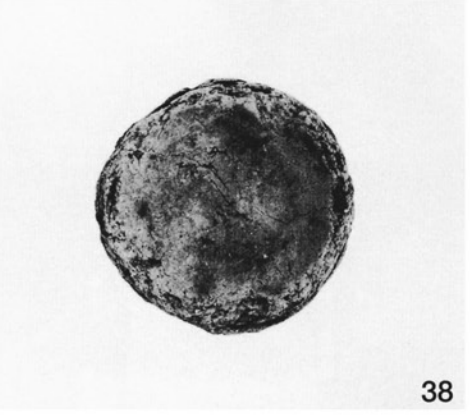
32

出土遺物

35

36

37


38

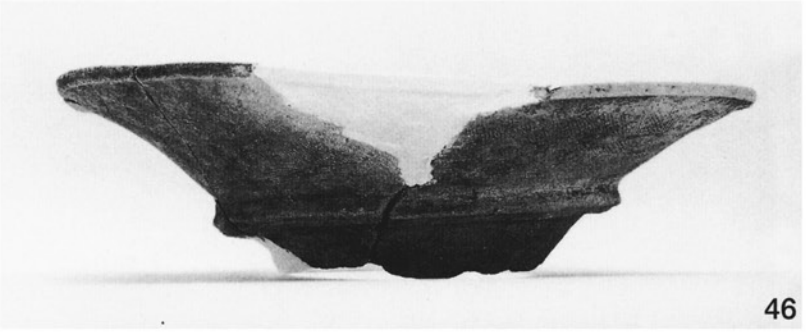
40

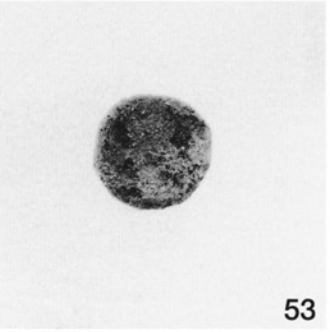
41

44

43

45

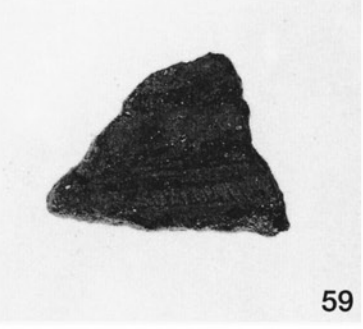

46

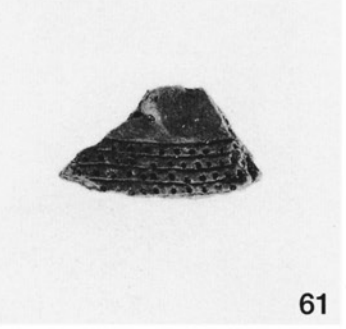

53

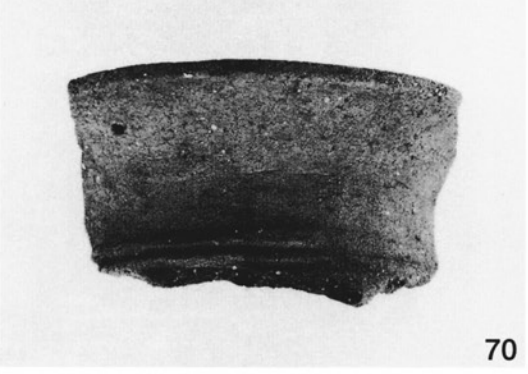
47

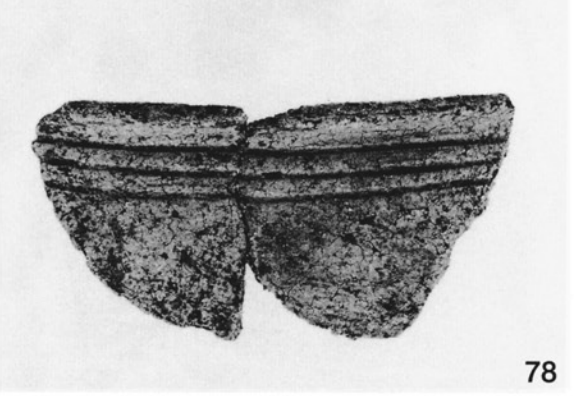
50

51

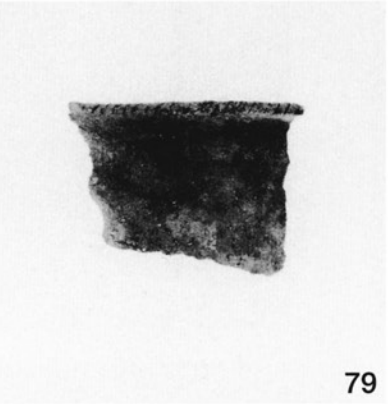

59

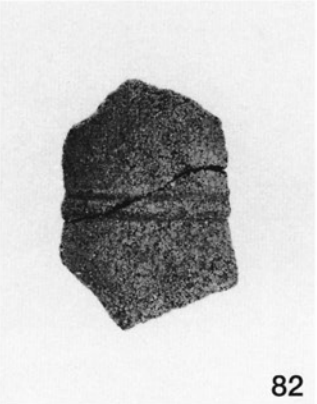

61

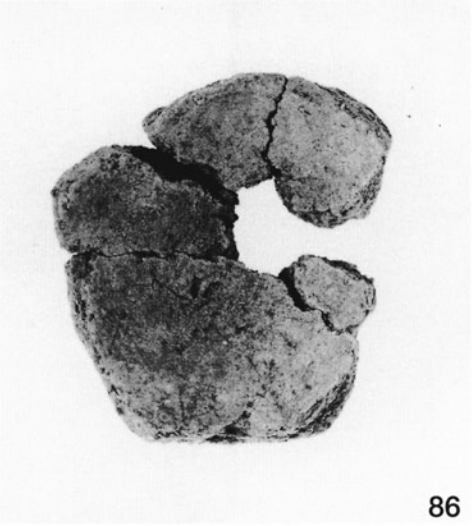

70


78

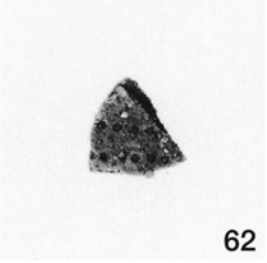
出土遺物


79

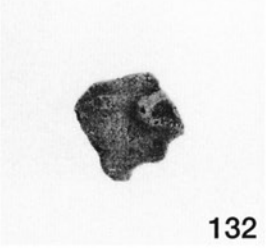

82


86

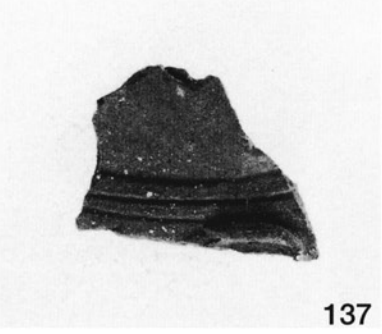
126


62

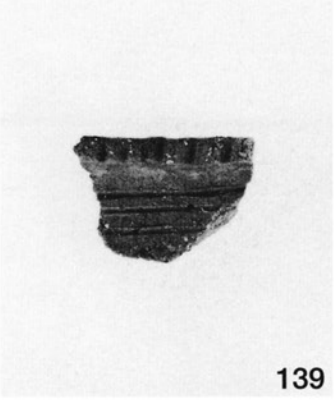
127

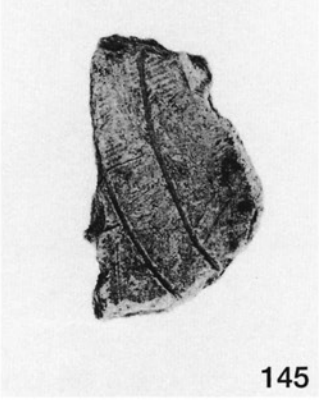

132

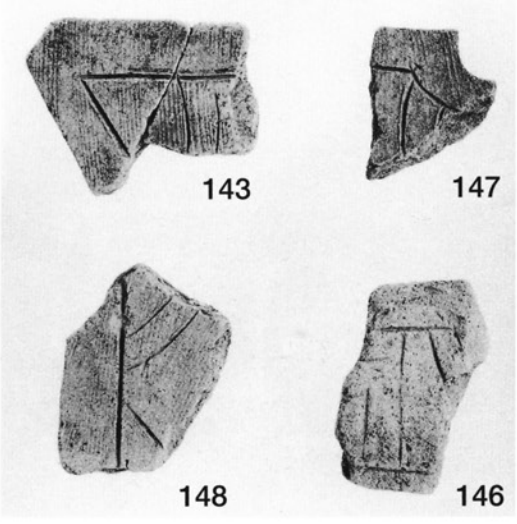
131

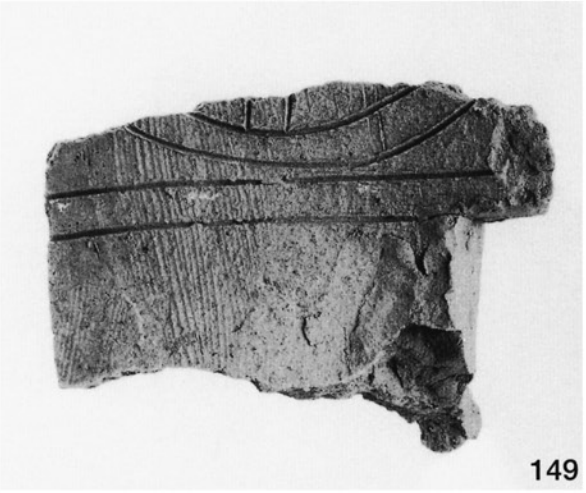

137

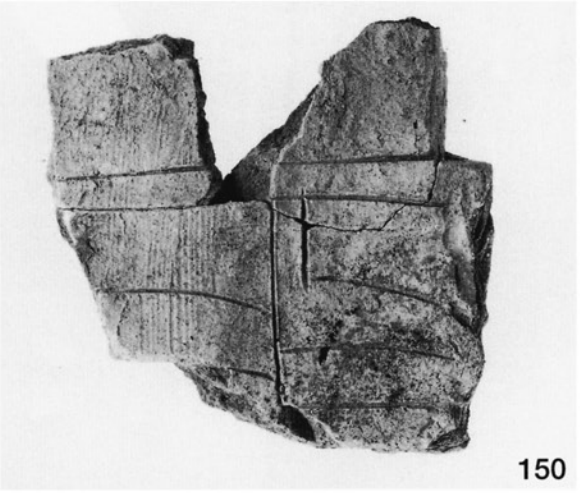
135

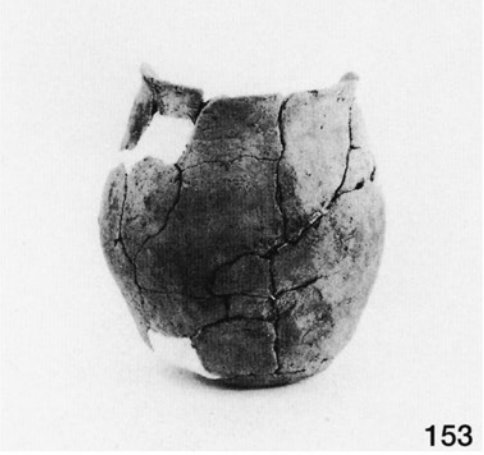

139

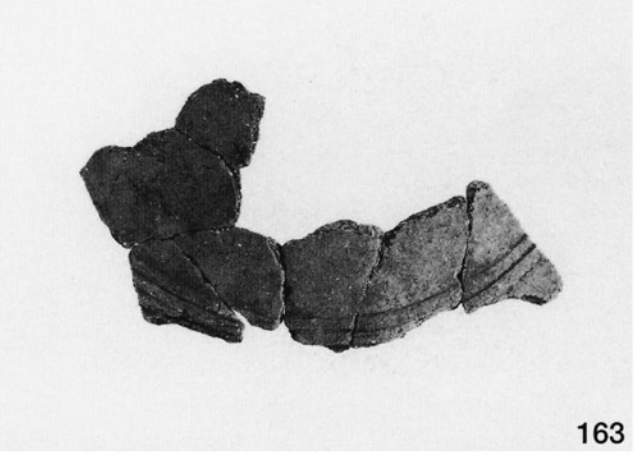

145

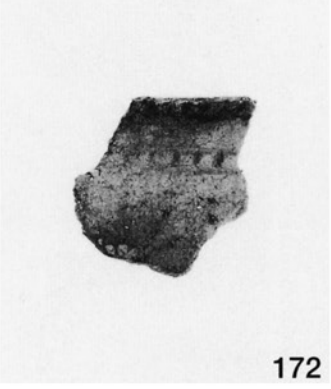

143 147 148 146

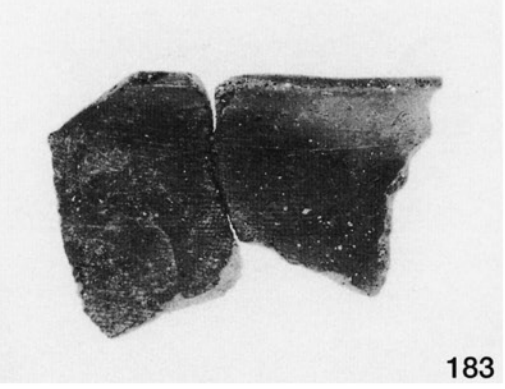

149

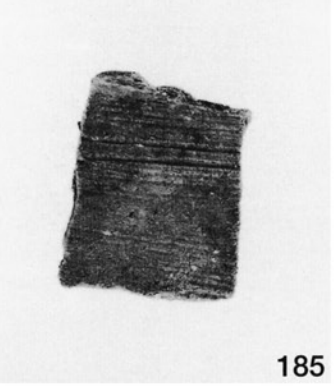

150


153

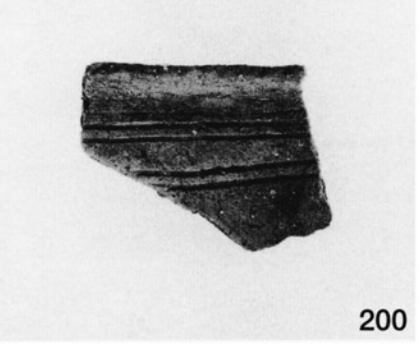

163

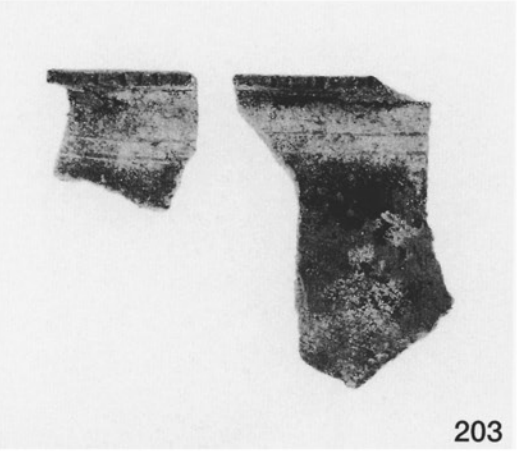

172

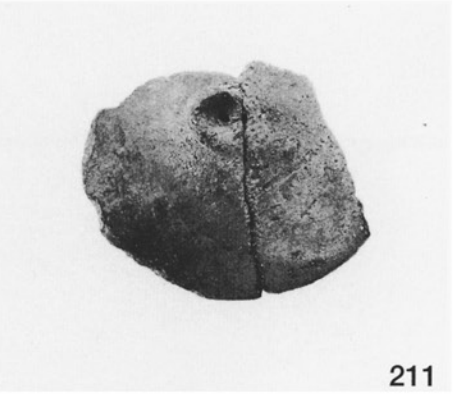

183


185

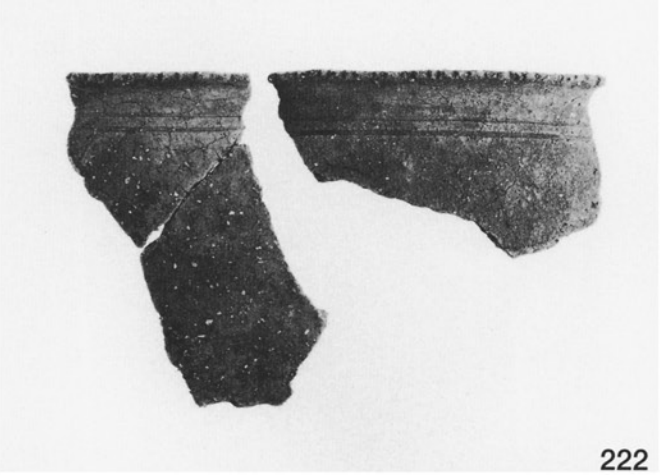
192

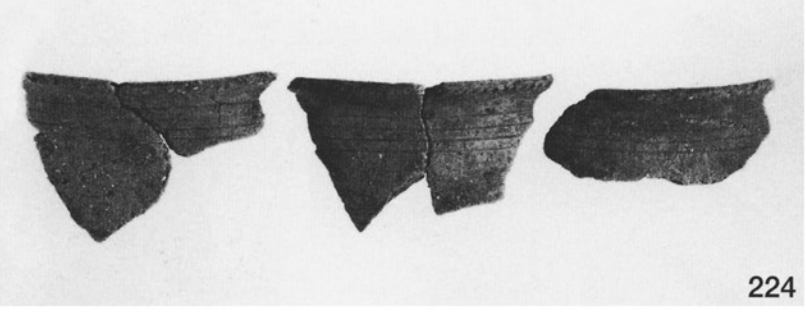

200

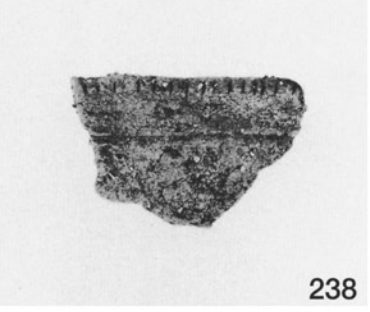

203


211

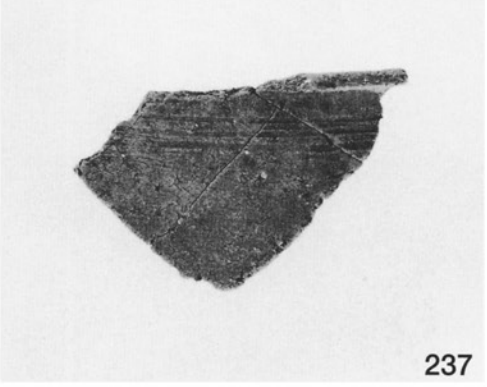
215


222

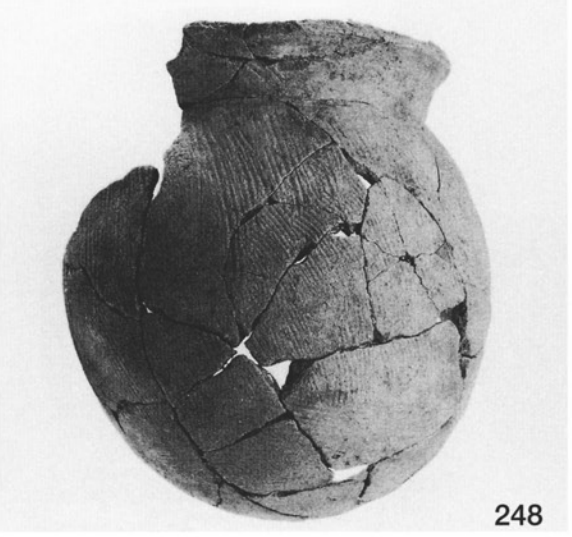

224


238

225


237

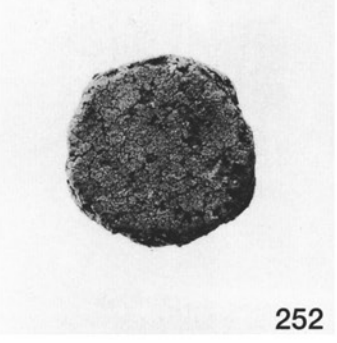
227

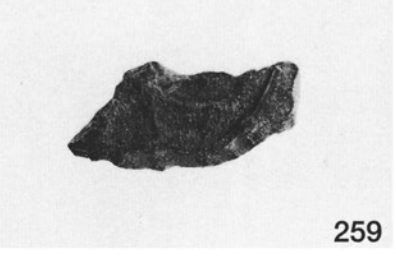

248

249

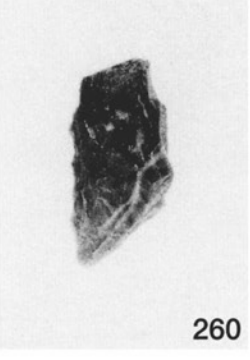
250

251

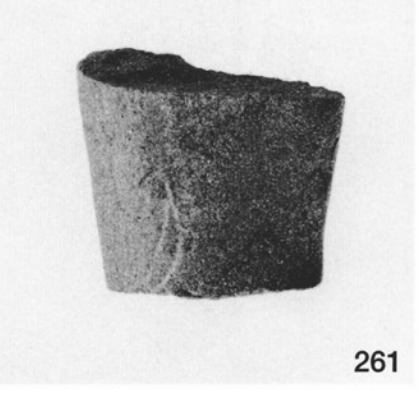

252

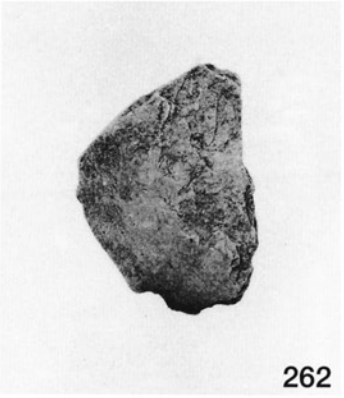

259

259


260

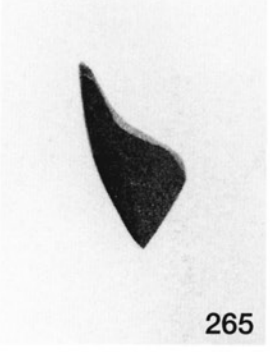
260


261


262

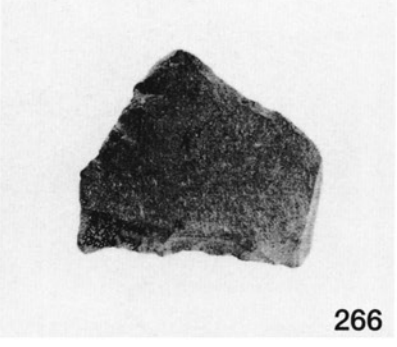
263

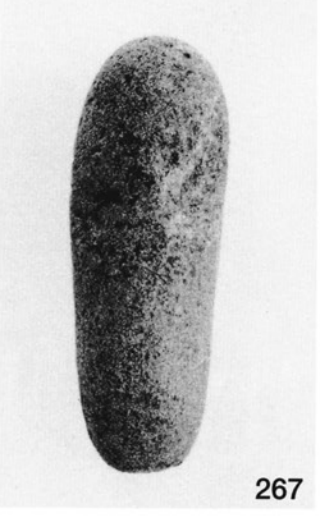
263

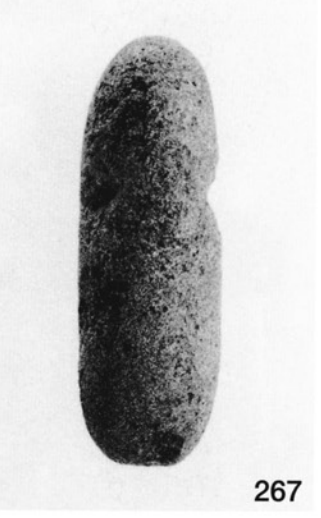

265

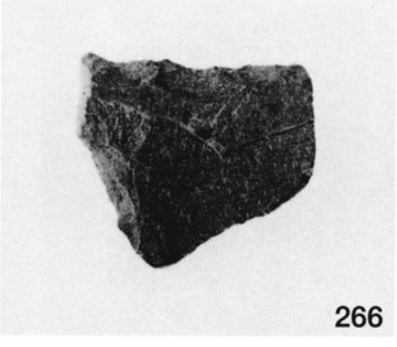
264

264

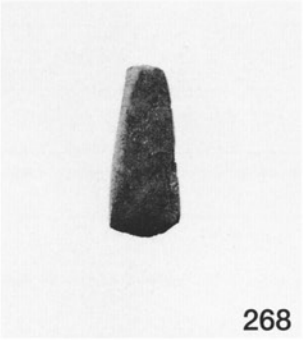

266

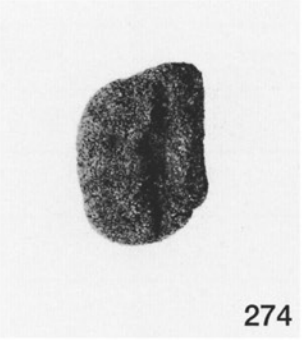

267

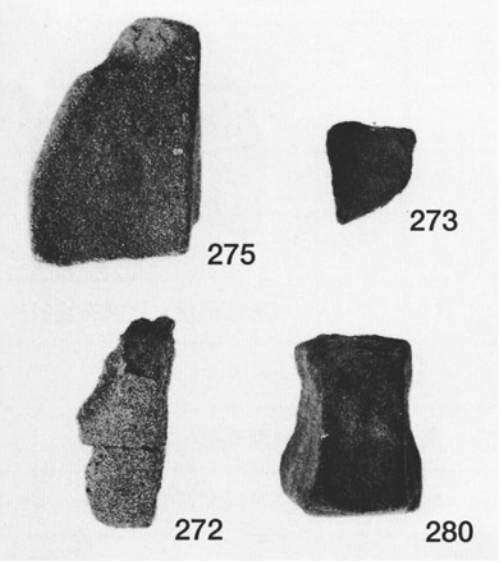

267

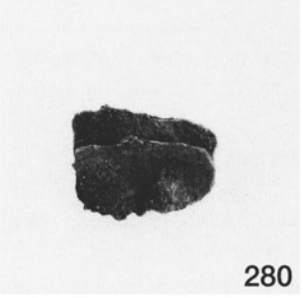

266

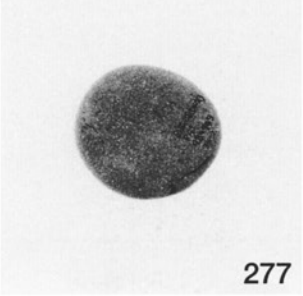
出土遺物

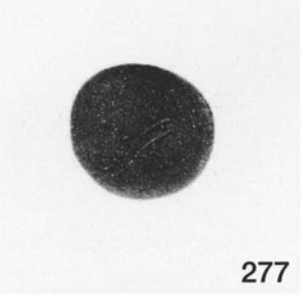


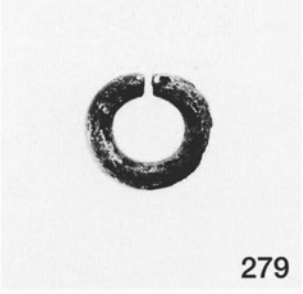


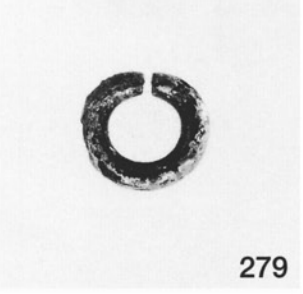












報告書抄録

ふりがな	こんごうざかいせき　だい４じ　・たつのくちこふんぐん　だい２じ　はっくつちょうさほうこく
書名	金剛坂遺跡（第４次）・辰ノ口古墳群（第２次）発掘調査報告
副書名	
巻次	
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１８８
編集者名	萩原義彦・川崎志乃
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒515－0325　三重県多気郡明和町竹川503　☎0596－52－1732
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
こんごうざかいせき 金剛坂遺跡	みえけんたきぐん 三重県多気郡 めいわちょうこんごうざか 明和町金剛坂	24442	36	34° 30′ 45″	136° 36′ 27″	1998.6.8 ～ 1998.8.6	800	平成10年度一般地方道多気停車場斉明線緊急地方道路整備工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺物	特記事
金剛坂遺跡	集落跡	弥生時代	弥生土器ほか	竪穴住居・土坑
辰ノ口古墳群	古墳群	古墳時代	円筒埴輪 朝顔形埴輪 須恵器蓋、杯、短頸壺、高杯 土師器杯、甕	古墳５基、土壙墓１基、木棺墓１基

平成11(1999)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年9月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１８８

金剛坂遺跡発掘調査報告

１９９９・３

編　集
発　行　三重県埋蔵文化財センター
印　刷　文化印刷有限会社